

庄・蔵本遺跡 7

— 第14次調査地点・2016年度立会調査地点 —

2026

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

庄・蔵本遺跡 7

— 第14次調査地点・2016年度立会調査地点 —

2026

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

例 言

1. 本書は、徳島大学埋蔵文化財調査室が1995・2016年度に蔵本キャンパスにおいて実施した医薬資源教育研究センター建設、基幹環境整備・駐車整理部事務所建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 整理作業は、三浦哉室長・山口雄治副室長の助言のもと、端野晋平・岸本多美子・久米淑子・中原尚子・板東美幸・前田千夏・安山かおり・山本愛子が担当した。
3. 遺構写真の撮影は橋本達也（現・鹿児島大学）が、遺物写真の撮影は板東が担当した。
4. 本書の執筆・編集は、端野が担当した。
5. 本書で使用した座標の値は、世界測地系による平面直角座標系（第IV系）に準拠した。方位は座標北、レベルは海拔標高である。
6. 土層および土器・陶磁器胎土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠した。
7. 弥生時代の時期区分については、前期は中村（2000・2002）の土器編年、中期以降は菅原・瀧山（2000）のそれに準拠した。

中村豊，2000．阿波地域における弥生時代前期の土器編年．田崎博之（編），突帯文と遠賀川．土器持寄会論文集刊行会，松山．pp.471-497.

中村豊，2002．縄文から弥生へー眉山北麓遺跡群の分析からー．徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島．pp.245-258.

菅原康夫・瀧山雄一，2000．阿波地域．菅原康夫・梅木謙一（編），弥生土器の様式と編年 四国編．木耳社，東京，pp.1-130.

なお、土器様式と時期名称との対応は次のとおりである。Ⅰ－1様式（古段階）＝前期初頭，Ⅰ－1様式（新段階）＝前期前葉，Ⅰ－2様式＝前期中葉，Ⅰ－3様式＝前期末，Ⅰ－4様式＝中期初頭，Ⅱ様式＝中期前葉，Ⅲ－1～3様式＝中期中葉，Ⅳ－1様式＝中期後葉，Ⅳ－2様式＝中期末，Ⅴ－1様式＝後期初頭，Ⅴ－2様式＝後期前葉，Ⅴ－3様式＝後期中葉，Ⅴ－4様式＝後期後葉，Ⅴ－5様式＝後期末，Ⅵ－1～2様式＝終末期。
8. 本書に掲載した調査記録および出土遺物は、すべて徳島大学埋蔵文化財調査室で保管している。今後、教育・研究・社会貢献の場で積極的に活用されることを期待する。

目 次

第1章 遺跡を取り巻く環境と概要	1
第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第3節 庄・蔵本遺跡の概要	4
第4節 基本層序	9
第2章 第14次調査（医薬資源教育研究センター地点）	21
第1節 調査にいたる経緯・経過	21
1. 調査にいたる経緯	21
2. 調査の体制	21
3. 調査地点の位置と区割り	21
4. 調査の経過	21
第2節 調査の記録	21
1. 層序	21
2. 遺構	27
3. 遺物	30
第3章 2016年度立会調査（基幹環境整備地点・駐車整理部地点）	43
第1節 調査にいたる経緯	43
1. 調査にいたる経緯	43
2. 調査の体制	43
第2節 調査の記録	43
1. 層序	43
2. 遺物	44
第4章 総 括	57

插图目次

図 1-1 庄・蔵本遺跡と周辺遺跡の位置	2	図 2-17 3層上面遺構全体図	37
図 1-2 庄・蔵本遺跡における調査地点の位置	5	図 2-18 暗渠 1	38
図 1-3 弥生時代前期前葉～中葉の主要遺構・遺物	11	図 2-19 柱穴群	39
図 1-4 弥生時代前期末～中期初頭の主要遺構・遺物	12	図 2-20 出土遺物	40
図 1-5 弥生時代中期初頭～中葉の主要遺構・遺物	13	図 3-1 調査地点の位置	44
図 1-6 弥生時代中期中葉～後葉の主要遺構・遺物	14	図 3-2 基幹環境整備地点土層断面	45
図 1-7 弥生時代中期末～後期中葉の主要遺構・遺物	15	図 3-3 駐車整理部地点土層断面	46
図 1-8 弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉の主要遺構・遺物	16	図 3-4 出土遺物 (1)	47
図 1-9 古墳時代中期～後期の主要遺構・遺物	17	図 3-5 出土遺物 (2)	48
図 1-10 古代の主要遺構・遺物	18	図 3-6 出土遺物 (3)	49
図 1-11 中世の主要遺構・遺物	19	図 3-7 出土遺物 (4)	50
図 1-12 近世の主要遺構・遺物	20	図 3-8 出土遺物 (5)	51
図 2-1 調査地点の位置と区割り	22	図 4-1 微地形図 C (暗褐色粘質シルト層上面)	58
図 2-2 土層断面図 (1)	23	図 4-2 微地形図 B (黄褐色シルト層上面)	59
図 2-3 土層断面図 (2)	24	図 4-3 微地形図 A (黒褐色シルト層上面)	60
図 2-4 土層断面図 (3)	25	図 4-4 弥生時代前期前葉～中葉の微地形と主要遺構	61
図 2-5 土層断面図 (4)	26	図 4-5 弥生時代前期末～中期初頭の微地形と主要遺構	62
図 2-6 12層上面遺構全体図	28	図 4-6 弥生時代中期初頭～中葉の微地形と主要遺構	63
図 2-7 10層上面遺構全体図	29	図 4-7 弥生時代中期中葉～後葉の微地形と主要遺構	64
図 2-8 掘立柱建物跡	30	図 4-8 弥生時代中期末～後期中葉の微地形と主要遺構	65
図 2-9 鉄器出土状況	30	図 4-9 弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉の微地形と主要遺構	66
図 2-10 9層上面遺構全体図	31	図 4-10 古墳時代中～後期の微地形と主要遺構	67
図 2-11 SD04	32	図 4-11 古代の微地形と主要遺構	68
図 2-12 土師器・甕出土状況	33	図 4-12 中世の微地形と主要遺構	69
図 2-13 SK02・SD04・SD05	33	図 4-13 近世の微地形と主要遺構	70
図 2-14 7層上面遺構全体図	34	図 4-14 3次元化された各微地形図 (高さ 30 倍)	71
図 2-15 SD01・SD02・SD03・SK01	35	図 4-15 庄・蔵本遺跡における近世の道路と水路	72
図 2-16 5層上面遺構全体図	36		

表目次

表 1-1 発掘調査一覧	6	表 3-1 土器観察表	52
表 1-2 報告書刊行立会調査一覧	7	表 3-2 石器類観察表	55
表 2-1 土器・土製品観察表	41	表 4-1 庄・蔵本遺跡主要遺構・遺物一覧	73
表 2-2 石器・金属製品観察表	41		

図版目次

図版 1 第 14 次調査地点遺跡・遺構 (1)

図版 2 第 14 次調査地点遺跡・遺構 (2)

図版 3 第 14 次調査地点遺跡・遺構 (3)

図版 4 第 14 次調査地点遺跡・遺構 (4)

図版 5 第 14 次調査地点遺跡・遺構 (5)

図版 6 第 14 次調査地点遺跡・遺構 (6)

図版 7 第 14 次調査地点遺跡・遺構 (7)

図版 8 第 14 次調査地点遺跡・遺構 (8)

図版 9 第 14 次調査地点遺跡・遺構 (9)

図版 10 第 14 次調査地点遺物

図版 11 2016 年度立会調査地点遺物 (1)

図版 12 2016 年度立会調査地点遺物 (2)

図版 13 2016 年度立会調査地点遺物 (3)

図版 14 2016 年度立会調査地点遺物 (4)

第1章 遺跡を取り巻く環境と概要

第1節 遺跡の位置と地理的環境

国立大学法人徳島大学蔵本キャンパスは、徳島市庄町1丁目と蔵本町2丁目・3丁目にわたって所在し、徳島県遺跡地図（徳島県教委・徳島県埋文編2006）上では、蔵本遺跡の大部分および庄遺跡の東端を含む範囲に位置する（図1-1-1）。本学では『庄・蔵本遺跡1』（北條編1998）の刊行以降、同キャンパス内の遺跡については、独自にこの名称を用いており、本書でもこれに従う。

庄・蔵本遺跡は、吉野川の支流である鮎喰川の下流域右岸、四国山地東端の眉山北麓に位置する。現在の鮎喰川は、四国山地の雲早山に源を発し、外帯を約50km北流して吉野川と合流する。下流域では、数面の沖積段丘面をとともなう扇状地性平野が発達することが知られている。また、上流域では御荷鉾構造線をはじめとする複数の破碎帯を通過し、また地すべりや山腹崩壊により、下流域の平野部において、礫層が厚く発達し、礫床河道となっている（古田2005）。

吉野川下流域から河口付近にかけての古環境復元の研究によれば、約2万～1万8千年前の海水準は、現在に比べ約100m前後低く、その後の温暖化にともない次第に上昇したとされる。約6千年前の縄文海進のピーク時には、吉野川河口部の汀線は、現在の地形面の標高5m程度内陸に入り込んでいたと推定され、鮎喰川は直接、紀伊水道に注ぎ込み、河口部に三角州性扇状地を形成したとみられる。その後、やや寒冷化する弥生時代以降、海面の低下と吉野川から流出した土砂の堆積により、三角州が発達していく（古田1996, 2005, 平井1998）。

第2節 歴史的環境

庄・蔵本遺跡は、縄文時代晩期から近現代にいたるまでの複合遺跡である。その形成過程を正しく理解するためには、当然のことながら、周辺の遺跡まで視野を広げることが不可欠である。そこで、周辺遺跡について、以下、時代ごとに概観する。

旧石器時代 現在のところ、庄・蔵本遺跡周辺で旧石器時代の遺跡は確認されていない。徳島県域においては、吉野川中・下流域の北岸に遺跡が分布する（氏家2002）。

縄文時代 徳島県域において、縄文時代草創期～前期の遺跡は存在するものの、遺跡数は限られ、その様相は不明瞭である。中期になると、遺跡数が若干増加し、三好郡東みよし町の加茂谷川支流沿いに位置する加茂谷川1号岩陰や、吉野川中流域の美馬郡つるぎ町貞光前田遺跡では、船元Ⅰ式・里木Ⅱ式土器が確認されている。鮎喰川下流域左岸の矢野遺跡（図1-1-18）では、中期末～後期前葉の居住域が検出されている（湯浅2002）。

庄・蔵本遺跡周辺で、遺跡形成が顕著となるのは後期後葉以降であり（中村編2011）、庄遺跡（図1-1-6）の財務省蔵本住宅地点では、後期後葉の住居跡1棟が検出されている（岡山編1999）。また、同遺跡の各調査地点では、後期末～晩期前半の土器や石器が確認されている（湯浅2002, 中村編2011）。名東遺跡（図1-1-11）では、晩期後半の自然落ち込みから突帯文土器と石器が出土した（勝浦編1990）。



図 1-1 庄・蔵本遺跡と周辺遺跡の位置

1. 庄・蔵本遺跡 2. 蜂須賀家万年山墓所 3. 三谷遺跡 4. 南蔵本遺跡 5. 蔵本遺跡 6. 庄遺跡 7. 中島田遺跡 8. 南庄遺跡 9. 袋井用水の水源地 10. 鮎喰遺跡 11. 名東遺跡 12. 節句山 1 号墳 13. 節句山 2 号墳 14. 穴不動古墳 15. 八人塚古墳 16. 敷地遺跡 17. 観音寺遺跡 18. 矢野遺跡 19. 延命遺跡 (徳島県教委・徳島県埋文編 2006 をもとに作成)

弥生時代 三谷遺跡 (図 1-1-3) では名東遺跡より新しい時期に位置づけられる、突帯文土器と遠賀川式土器との相伴関係が確認されている (勝浦編 1997)。近年の調査でもこの時期の集落域の一部が明らかとなっている (中村 2016, 2017)。庄・蔵本遺跡では、弥生時代前期前葉～中葉の居住域・墓域・生産域 (水田・畑) からなる集落の全容が把握され、隣接する南蔵本遺跡 (図 1-1-4) まで広がることが確認されている (近藤編 2014 ほか)。これらの遺跡では、前期末から中期初頭の洪水起源砂層が確認されており、洪水砂によって集落のほとんどが埋没したものと推定されている (中村編 2011 ほか)。庄・蔵本遺跡や名東遺跡周辺で確認された自然流路は、鮎喰川の旧分流の一部とみられ、弥生時代初期の居住域は、これらの旧分流の中州か眉山北麓斜面に存在したと考えられている (古田 2005)。

庄・蔵本遺跡一帯では、中期前葉～中葉の遺構は極めて少なく、この時期の集落構造は判然としない。中期後葉になると、居住域や墓域が明瞭になる。鮎喰川流域では、右岸の名東遺跡や庄・蔵本遺跡一帯で数十基の方形周溝墓、左岸の矢野遺跡 (図 1-1-18) で、30 棟前後の竪穴住居跡が確認されている。ただし、水田などの生産域はわかっていない。つづいて後期初頭になると、これらの遺跡一帯では、遺構・遺物の数はともに極端に減少する (近藤 2012)。なお、名東遺跡 (図 1-1-11) では、中期後葉～後期初頭の所産とみられる扁平紐式銅鐸の埋納遺構が検出されている (勝浦編 1990)。

後期前半は、それ以前に比べると、竪穴住居跡の数は少なく、墓域や生産域も不明瞭である。その後、後期後半～終末期になると、竪穴住居跡数は増加し、中期後半の数を上回るようになる。矢野遺跡 (図 1-1-18) では、蛇紋岩製勾玉の未成品や鍛冶関連遺構、突線紐式銅鐸の埋納遺構が確認されている。矢野遺跡の南に隣接する延命遺跡 (図 1-1-19) では、墳丘墓などからなる墓域が認められ、石井城ノ内遺跡では水田跡が確認されている (近藤 2012)。

古墳時代 眉山西北麓の丘陵尾根上には、前期古墳が点在する。節句山古墳群（図 1-1-12・13）の 2 号墳からは、浮彫式獣帯鏡が出土している。本学考古学研究室が測量調査を実施した八人塚古墳（図 1-1-15）は、全長約 60m の前方後円墳で、川原石を用いた積石塚である（東ほか 2006）。庄・蔵本遺跡の南側に面した眉山北麓では、今のところ前期古墳や居住域は確認されていない。中期の古墳、居住域もまた未発見である。後期になると、横穴式石室をもつ穴不動古墳（図 1-1-14）などがみられるが、やはり集落域はわかっていない（北條編 1998, 中村編 2011）。

古代 観音寺遺跡や敷地遺跡（図 1-1-16・17）の発掘調査により、多数の木簡および多彩な遺構・遺物が確認され（藤川編 2002 ほか）、これらの遺跡一帯は、国府であった可能性が高い（藤川 2015 ほか）。庄・蔵本遺跡と名東遺跡周辺では、大型の掘立柱建物跡や墨書土器、石帯、木製祭祀具などが相対的に多く出土しており、郡衙である名東郡にあたる可能性が指摘されている（早淵 2002, 藤川 2002）。また、この一帯では条里地割に関係するとみられる溝が検出されている。

中世 12 世紀後半～13 世紀が中心時期とされる中島田遺跡（図 1-1-7）では、道路状遺構と、その両側で屋敷地区画が確認されている。また、徳島県域の他の遺跡で多数を占める和泉型瓦器碗よりも、吉備系土師器碗が多数出土したことが注目されている（石尾 2002, 島田 2008）。そこから、この遺跡を物資の集散地とみなし、さらに「市庭」跡（福家 2002）や「市町」（石尾 2002）と解釈する見解も提出されている。名東遺跡や庄遺跡周辺では、溝などの遺構や瓦器・土師器などの遺物が検出されているが、遺跡の性格ははっきりしない（福家 2002, 島田 2008）。

近世 庄・蔵本遺跡一帯は、城下町周辺の散村であったとみられ、後述する鮎喰川の改修工事などにより水田開発が進められていったと考えられる。この時期の水田開発により、古墳時代から中世にかけての遺構の多くが、削平された可能性が指摘されている（中村編 2011）。また、佐古に所在する蜂須賀家万年山墓所（図 1-1-2）は、10 代藩主蜂須賀重喜が藩政改革を背景に造成した儒式の墓地で、以後、蜂須賀家は仏式の興源寺と儒式の万年山による両墓制をとるようになった（徳島県の歴史散歩編 2009）。

鮎喰川の河川改修の記録としては、天正 15（1587）年の「逢庵堤」が知られている。これは徳島城の築城および名東郡の洪水対策のために、右岸の築堤が行われたというものである。その後、享保年間（1716～1736 年）や寛政年間（1789～1801 年）の工事によって、右岸の連続築堤が完成された。しかし、逆にこれが天井川化を加速させ、今日にいたる洪水被害の一因となったという（古田 2005）。ほかに、元禄年間（1688～1704 年）には、鮎喰川流域右岸の水不足解消のため、袋井用水（図 1-1-9）の開削が開始されたという記録もある。また、蔵本付近は伊予街道と讃岐街道の分岐点に位置し、交通の要所でもあった（ふるさと徳島編 1991）。

近現代 現在の蔵本キャンパスとその周辺にあたる区域では、1907 年、陸軍第 10 旅団司令部、歩兵第 62 連隊が設置されたが、第 1 次大戦後は廃止された。これにかわり 1925 年、歩兵第 43 連隊が移駐し、以後、1945 年まで存続することとなった。また、1908 年に徳島衛戍病院が設けられ、その後、徳島陸軍病院と改称された。1945 年 7 月 4 日の徳島大空襲の後の同月 24 日には、歩兵第 43 連隊本部を標的とした 1 トン爆弾による空襲があった（山川 1995）。

終戦後まもなく連隊跡地には、1947 年に官制徳島医学専門学校が移転し、翌年には徳島医科大学となり、1949 年には徳島大学が設置された。また、陸軍病院跡には県立中央病院、練兵場跡には蔵本公園・賀茂名中学校、実弾射撃場跡には徳島県立林業試験場（林業総合技術センター）が、それぞれ置かれる

こととなった（ふるさと徳島編 1991）。

第3節 庄・蔵本遺跡の概要

1982年に始まった蔵本キャンパスでの発掘調査は、2026年9月現在、計36次にも及び、約40,000㎡の面積がその対象となった（図1-2、表1-1・1-2）。結果として、縄文時代から現代にいたるまでの、多種多様な遺構・遺物が多数確認されている。ここでは、古い時期から順に、その成果を振り返ろう。なお、以下の成果は未報告地点のものも含み、遺構・遺物の時期・性格などの評価は今後、正式報告書の刊行に際して、変更される可能性があることを付記しておく。

縄文時代晩期以前 現在、キャンパス内では遺構は確認されていないが、第2次調査地点、1998年度立会調査地点T3、第34次調査地点などでは縄文時代晩期中葉の土器片が出土した。

弥生時代前期前葉～中葉（図1-3） 居住域・墓域・生産域からなる集落の全体像を描き出すほどの成果が得られている。居住域は、キャンパスの南東部に位置する第15・34次調査地点、1998年度立会調査地点T2などで、二重の弧状大溝が確認されており、その内側に想定しうる。キャンパスの南側に位置する南蔵本遺跡では、この時期の住居跡が数軒検出されており（徳島市教委1989、中村1998、2002ほか）、さらに南側の眉山北麓にも居住域の存在が推定される。墓域は、キャンパスの南西部（第6次調査地点）と南東部（1998年度立会地点T2・3、第22次調査地点）の2か所で確認されている。第6次調査地点では、石棺墓・配石墓・土壇墓・土器棺墓といった計20基以上の墓からなる墓域が明らかとなった。1998年度立会地点T2・3、第22次調査地点でも、石棺墓・土壇墓が確認された。生産域は、キャンパスの北東部において、水田跡が検出されており（第17・19・24・28・35次調査地点）、これがキャンパスの東に隣接する南蔵本遺跡（県立中央病院地点）まで広がることがわかっている（近藤編2014）。また、キャンパスの南部を東西に走る河道（第5・9・13・15・16・20・27次調査地点）と、ここから分岐する用水路網（第10・13・15・20・26・27・29・33次調査地点）が確認され、水田への給水システムも判明しつつある。さらに、第20次調査地点では、弥生時代前期中葉の畑跡が確認された。この時期の畑跡は全国的にみてもきわめてまれで、畝立てするものとしては列島最古級である。第27次調査でも畝間状の溝列が検出されており、これも畑跡の可能性がある。同様の畑跡は、南蔵本遺跡（県立中央病院ER棟地点）でも確認された（徳島県・徳島県埋文2021）。

この時期に属する人工遺物には、土器・石器・木製品などがあるが、とくに注目されてきた遺物として、木製腰掛け、「石製刺突武器」、擬朝鮮系無文土器、浮線網状文系土器といった外来系土器がある。木製腰掛けは、弥生時代前期前葉の水溜場から出土したもので（第9次調査地点）、列島最古の腰掛けとされる。「石製刺突武器」は、河道上層（弥生時代前期中葉）から出土したサヌカイト製の石器で（第9次調査地点）、槍ないしは戈の用途が推定される。当該地域における戦争の始まりを語るための資料とされたこともある。擬朝鮮系無文土器は、朝鮮半島南部の無文土器から影響を受けた土器で、松菊里型（中期無文土器）系と円形粘土帯（後期前半無文土器）系の二者がある（第6・9次調査地点、1998年度立会地点T2）。朝鮮半島や九州といった西方地域との関係を示す資料といえる。浮線網状文系土器は、氷Ⅰ式中段階あるいは離山式段階に位置づけられる中部高地の土器で（第9次調査地点、1998年度立会調査地点T2）、この地域との関係を示す資料である。第34次調査地点では、弥生時代前期中葉、あるいは次の前期末～中期初頭の円形粘土帯系土器、北部九州からの搬入品とみられる層灰岩製扁平片

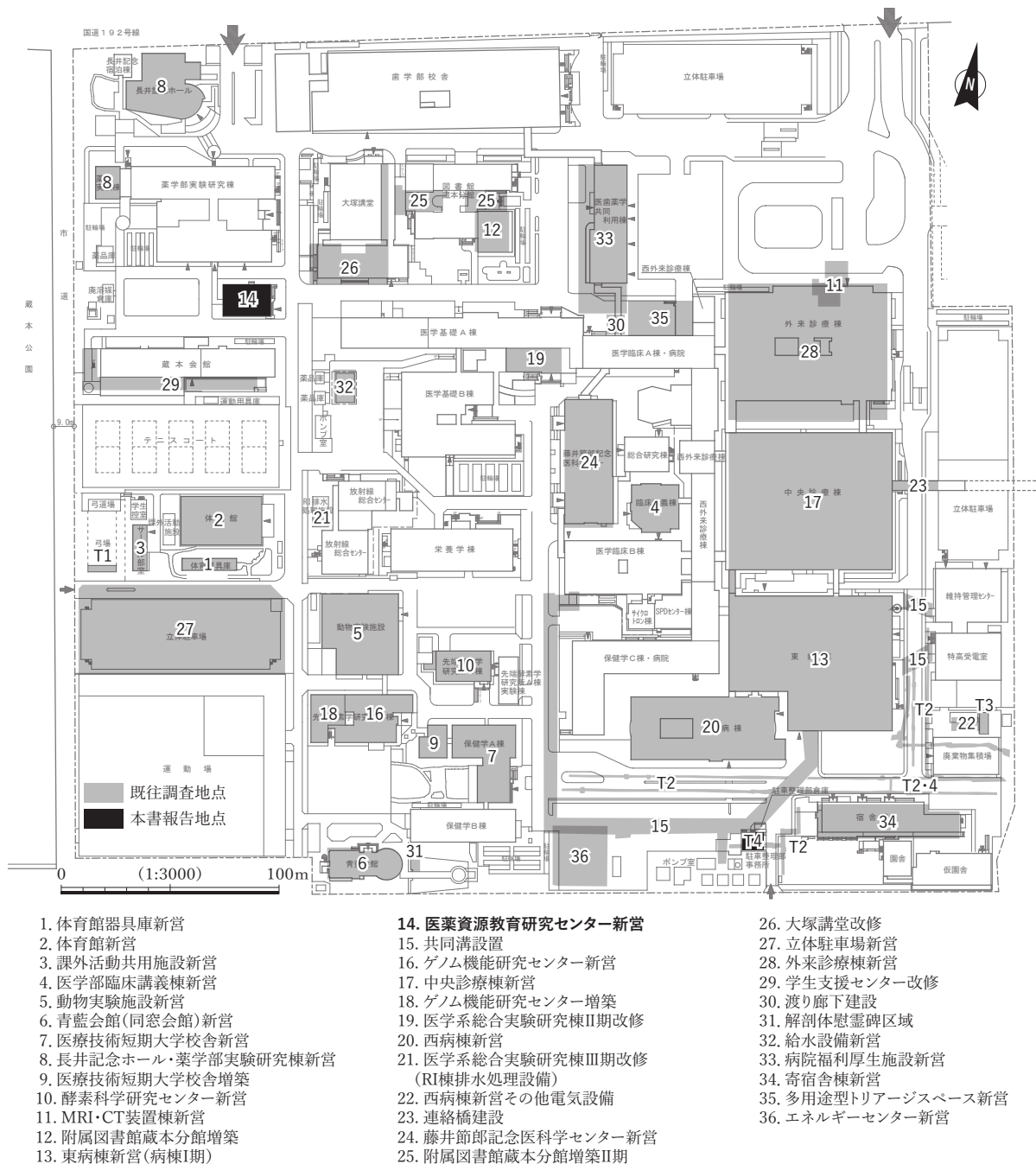


図 1-2 庄・蔵本遺跡における調査地点の位置

刃石斧が出土した。植物遺存体には、イネ・アワ・キビといった栽培植物の炭化種実や、ツルボとされる炭化鱗茎がある。イネ・アワ・キビの炭化種実、畑跡に伴って出土し(第20次調査地点)、炭化鱗茎は土器の内面に付着した状態で出土した(第28次調査地点)。

弥生時代前期末～中期初頭(図1-4) 前時期の集落の多くは洪水砂によって埋没し、結果として形成された中州性微高地上に新たに集落が展開したものと考えられる(中村編2011ほか)。洪水砂上に堆積した弥生時代前期末～中世の土壌化層では、遺構の検出が容易ではなく、この間の集落像について

表 1-1 発掘調査一覧

調査 回数	調査地点	調査 年度	調査期間	調査主体	調査担当者 ※は調査主任	調査面積 (㎡)	文献
1	体育館器具庫新営	1982	1982年11月30日 ～1983年2月5日	徳島県教育委員会	島巡賢二，秋山浩一ほか	147	中村編2010
2	体育館新営	1982・ 1983	1983年1月中旬～ 11月30日	徳島県教育委員会	福家清司，久保脇美朗 ほか	1160	定森・中村編2005，中村編2010
3	課外活動共用施設新営	1984	1984年7月3日～8 月10日	徳島県教育委員会	福家清司，久保脇美朗 ほか	157	中村編2011
4	医学部臨床講義棟新営	1985	1985年4月25日～ 7月14日	徳島県教育委員会	松永住美，大谷泰久ほか	655	中村編2010
5	動物実験施設新営	1985	1985年9月2日～ 12月28日	徳島県教育委員会	松永住美，大谷泰久ほか	1321	中村編2008
6	青藍会館（同窓会館）新営	1986	1986年12月11日 ～1987年3月20日	徳島大学	岡内三眞，河野雄次ほか	540	北條編1998
7	医療技術短期大学校舎新営	1987	1987年4月1日～8 月31日	徳島県教育委員会	羽山久男，久保脇美朗 ほか	870	中村編2011
8	長井記念ホール・薬学部実験研究棟 新営	1990	1990年1月11日～ 2月28日	徳島大学	岡内三眞，桑原久男	1430	北條編1998
9	医療技術短期大学校舎増築	1992	1992年7月11日～ 9月4日	徳島大学	東潮，北條芳隆*	310	北條編1998
10	酵素科学研究センター新営	1993	1993年5月26日～ 9月30日	徳島大学	東潮，北條芳隆*	623	北條編1998
11	MRI・CT装置棟新営	1993	1994年2月18日～ 3月17日	徳島大学	東潮，北條芳隆*	224	端野編2026
12	附属図書館蔵本分館増築	1993	1994年2月25日～ 3月24日	徳島大学	東潮，北條芳隆*	288	端野編2026
13	東病棟新営（病棟Ⅰ期）	1994～ 1996	1995年3月27日～ 1996年7月31日	徳島大学	東潮，北條芳隆*	5000	HPに概要報告書を掲載
14	医薬資源教育研究センター新営	1995	1995年6月21日～ 9月5日	徳島大学	東潮，橋本達也*	300	本書
15	共同溝設置	1996・ 1997	1996年11月1日～ 1997年6月7日	徳島大学	北條芳隆，橋本達也， 中村豊*	1754	HPに概要報告書を掲載
16	ゲノム機能研究センター新営	1998	1998年9月1日～ 1999年2月2日	徳島大学	北條芳隆，橋本達也 *，中村豊	1000	HPに概要報告書を掲載
17	中央診療棟新営	1999	1999年8月1日～ 2000年3月	徳島大学	北條芳隆，中村豊*	5000	HPに概要報告書を掲載
18	ゲノム機能研究センター増築	2001・ 2002	2002年3月11日～ 6月10日	徳島大学	北條芳隆，中村豊*	311	HPに概要報告書を掲載
19	医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修	2006	2006年4月17日～ 7月25日	徳島大学	定森秀夫，中村豊*， 中原計	324	中村2009a
20	西病棟新営	2006	2006年6月27日～ 2007年3月15日	徳島大学	定森秀夫*，中村豊， 中原計	2645	中村2009b
21	医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修（RI 棟排水処理設備）	2007	2007年10月22日 ～11月7日	徳島大学	定森秀夫*，中村豊， 中原計	45	中村2010a
22	西病棟新営その他電気設備	2007	2008年1月9日～2 月14日	徳島大学	定森秀夫，中村豊*	103	中村2010b，端野編2018
23	連絡橋建設	2011	2011年4月4日～4 月18日	徳島大学	中村豊*，遠部慎	100	HPに概要報告書を掲載
24	藤井節郎記念医科学センター新営	2011	2011年10月7日～ 2012年3月14日	徳島大学	中村豊*，遠部慎	1800	三阪編2016
25	附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期	2011	2011年10月6日～ 10月26日	徳島大学	中村豊*，遠部慎	430	三阪編2016
26	大塚講堂改修	2012	2012年4月9日～6 月1日	徳島大学	中村豊，遠部慎*，山 口雄治	1030	三阪編2016
27	立体駐車場新営	2012・ 2013	2012年5月1日～ 2013年4月19日	徳島大学	中村豊，遠部慎，山口 雄治*	3610	端野ほか2015
28	外来診療棟新営	2012	2012年7月2日～ 2013年1月9日	徳島大学	中村豊，遠部慎*，山 口雄治	3688	三阪編2016
29	学生支援センター改修	2011	2012年10月31日 ～2013年2月5日	徳島大学	中村豊*，遠部慎，山 口雄治	554	三阪編2016
30	渡り廊下建設	2016	2016年11月14日 ～12月1日	徳島大学	三阪一徳*	70	端野編2018
31	解剖体慰霊碑区域	2017	2017年8月21日～ 24日	徳島大学	端野晋平*，三阪一徳	20	端野2022
32	給水設備新営	2018	2018年7月31日～ 9月5日	徳島大学	端野晋平*	134	端野2022，端野編2024
33	病院福利厚生施設新営	2018	2018年9月6日～ 12月13日	徳島大学	端野晋平*	1490	端野2022，端野編2024
34	寄宿舎棟新営	2019	2019年7月1日～ 10月7日	徳島大学	端野晋平*	1212	端野2022，端野編2025
35	多用途型トリアージスペース新営	2020	2021年3月2日～4 月6日	徳島大学	端野晋平*	275	端野2022，端野編2025
36	エネルギーセンター新営	2025	2025年4月21日～ 7月28日	徳島大学	端野晋平*	702	HPに概要報告書を掲載

表 1-2 報告書刊行立会調査一覧

調査 回数	調査地点	調査 年度	調査期間	調査主体	調査担当者 *は調査主任	調査面積 (㎡)	文献
T1	弓道場の場	1982	1983年3月	徳島県教育委員会		40	中村編2011
T2	排水管・東側溝・南側溝	1998	1998年3月31日～ 1998年9月2日	徳島大学	橋本達也, 中村豊	970	端野編2022
T3	ボイラータンク	1998	1999年1月	徳島大学	北條芳隆*	81	端野編2018
T4	基幹環境整備・駐車整理部	2016	2016年6月3日～9 月17日	徳島大学	端野晋平, 三阪一徳, 脇山佳奈	220	本書

は断片的な把握にとどまる。

キャンパスの南西部に位置する第27次調査地点では住居跡群, その北側に位置する第1～3次調査地点では貯蔵穴とみられる土坑群や土器溜まりなどが確認されており, この辺りが居住域であったと推定される。これらの調査地点の南東側に位置する第7次調査地点では, 墓の可能性を有する土坑が確認されており, これが墓であれば, この辺りに当時の墓域が展開したこととなる。キャンパス南東部の1998年度立会調査地点T2でも, 住居が確認されており, 西側の居住域とは別に, 東側でも居住域が広がっていたとみられる。第10・36次調査地点では, 土器埋納遺構が確認されている。第2次調査地点では, 土坑から炭化種実(イネ・アワ), 赤色顔料が付着した柱状片刃石斧が出土した。後者は儀器として使用した可能性が指摘されている。第27次調査地点では, 河道からイネの炭化粃塊が出土した。擬朝鮮系無文土器の出土も目立つ。第5次調査地点では河道から円形粘土帯系土器が, 第7次調査地点では溝から松菊里型系土器が, 第29次調査地点では溝から円形粘土帯系土器が出土した。ほかに, 第2次調査地点で出土した松菊里型系土器がある。

弥生時代中期初頭～中葉(図1-5) この時期に属する遺構は極めて少ない。第7・20次調査地点で確認された溝がある。

弥生時代中期中葉～後葉(図1-6) キャンパスの南半部に位置する第2・13・16・20・27次調査地点で, 方形周溝墓が確認された。多くが中期後葉(Ⅳ様式)に属するが, 第27次調査地点の例は, Ⅲ様式前半までさかのぼり, 徳島県域で最古に位置づけられる。そのほか, 第10次調査地点では溝, 土坑が確認された。なお, キャンパスの西方に位置する名東遺跡や南庄遺跡で40軒以上の住居跡が確認されており, この辺りに大規模な集落が形成されていたことが知られている。

弥生時代中期末～後期中葉(図1-7) この時期に属する遺構は極めて少ない。第6次調査地点では溝や土坑が, 第7次調査地点では河道が確認された。

弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉(図1-8) この時期の集落は, キャンパスの南半部にあたる場所に, 鍛冶工房を含めた居住域を置きつつ, 北側まで広く展開していたものと考えられる。それまでキャンパスの南側を東西に走っていた河道は, 第5次調査地点で急激に北へと方向を転じ, 蛇行しながら北東方向へと向かうようになる。キャンパスの南西部に位置する第16・18次調査地点では, 終末期(庄内式後半併行期)の鍛冶遺構をはじめ, 轆の羽口, 鉄器, スラグ, 石鎚や鉄床石(砥石)が出土しており, この地での鉄器生産の存在がうかがえる(中村2003)。同じく南西部に位置する第2・3次調査地点で確認された住居跡もこれに関連する可能性がある。そのすぐ南側に位置する第27次調査地点では後期後葉から終末期の一〇土坑を伴う例を含む住居群や井戸が, 第6次調査地点では終末期の集落内区画溝が確認された。キャンパスの北西部に位置する第26次調査地点では布留0～1式期の井戸が, 東側に位置する第11次調査地点では古墳時代前期前葉の溝が, 第17次調査地点では後期～終末期の溝, 住居, 掘立柱建物が, 第13次調査地点では後期および終末期の住居跡, 溝, 土器棺墓などが確認された。後

期後葉の土器棺墓は、第5次調査地点でも確認された。第14次調査地点では、古墳時代前期前葉～中葉の溝が確認された。第2次調査地点では斜縁鏡片が、第17次調査では異体字銘帯鏡片が、第27次調査地点では突線鈕式銅鐸片が出土した。これらはいずれも当時の社会に有力者が存在したことを示す貴重な資料である。第5次調査地点では、後期後葉～終末期の河道から石杵・木杵・盾といった赤色顔料付着遺物が、第27次調査地点では、河道から終末期の赤色顔料が付着した石杵が出土した。これらを通じて、当時の水銀朱の消費の実態に迫りうる。

古墳時代中期～後期（図1-9） キャンパスの南西部にあたる場所を中心に、集落が展開する。第7次調査地点では、5世紀後葉の溝から須恵器とともに、焼土や勾玉形石製品が出土した。この溝の延長部は第9・16・20次調査地点でも確認され、第9次調査地点では、須恵器とともに、朝顔形埴輪片が出土した。溝は集落や居館の区画溝とみられ、埴輪などを用いた祭祀行為がここで行われたものと考えられる。第27次調査地点では、古墳時代中期～後期にかけての住居跡、井戸が確認された。また、古墳被葬者の副葬品とみられる玉類や石製紡錘車が出土しており、これらの事実は付近にかつて古墳が存在した可能性を示唆する。第10次調査地点でも、住居跡と井戸が確認された。第6次調査地点で確認された墓のなかには、古墳時代中期に属する可能性をもつ石棺墓がある。

古代（図1-10） キャンパスの南西部にあたる場所を中心に、集落が展開したものとみられる。第2次調査地点では、飛鳥時代の溝、10世紀後葉～11世紀前葉の流路、11世紀前葉の木棺墓、掘立柱建物跡が確認された。飛鳥時代の溝は7世紀後葉の須恵器が出土し、ほぼ東西正方位をとる。10世紀後葉～11世紀前葉の流路からは、墨書土器、製塩土器、木製祭祀具、銅製鈐帯などの遺物が確認された。前節で述べたとおり、これらの事実にもとづいて、本遺跡付近を郡衙である名東郡に比定する説が提出されている。10世紀後葉～11世紀前葉の流路の続きは、第3・32次調査地点で確認されている。第12・25・33次調査地点で確認された東西方向の溝は、掘削年代が9世紀後半までさかのぼりうる。W10° Sという方位からみて、条里地割にともなう用水路と推定される。条里地割の施行開始は8世紀中葉とみなされていることから（一山2002、木原2002ほか）、この地での飛鳥時代以来の正方位から条里地割への転換は、8世紀中葉～9世紀後半のどこかということになろう。第14次調査地点では、条里地割と関係する小区画溝が確認された。第6・29次調査地点では、奈良時代の掘立柱建物跡が確認された。第27次調査地点では、古代の住居跡、井戸が確認されており、平安時代の石帯が出土した。

中世（図1-11） 第25・26・33次調査地点では、東西方向の溝が確認された。これらは一連のもので、第33次調査地点の溝で出土した12世紀前半の遺物からみて、古代の条里地割にともなう用水路をこの時期まで継続して利用していたものと考えられる。第2・3・17・24次調査地点では、東西方向と南北方向の溝が確認され、これらも条里地割に関係する用水路とみなしうる。第2・3次調査地点で確認された溝の下限年代は13世紀前半であり、キャンパスの西側に隣接する蔵本公園付近に、中島田遺跡形成前の拠点集落が存在した可能性を示唆する。これらの条里溝のうち、東西方向のものの一部は13世紀前半には埋没し、13世紀後半にやや南側の位置に掘削され直されたものとみられる。第6次調査地点では、鎌倉時代の土墳墓が確認された。

近世（図1-12） 第10次調査地点では木棺墓が、第2・7・9・12・13・14・16・17・18・20・29・33次調査地点などでは中世以前の条里地割を引き継いだ溝が確認された。これらは、江戸時代の絵図に描かれた蔵本村の農民層が残したものとみなせる。木棺墓は江戸時代後期のもので、水田付近への埋葬事例とされる。溝は基本地割の区画線にあたり、用水路として機能したものと推定される。第

17・33次調査地点の溝は、中世以前の条里溝に並行してつくられていた。第33次調査地点では、土坑から人骨の一部が出土した。人骨は周辺の墓から流入したとみられる性別不明・若年(10代)のもので、歯牙には幼少期に環境ストレスを受けたことを示すエナメル質減形成が確認された。蔵本村に居住した農民層の生活の実態を物語る貴重な資料である。

近現代 戦前、現在のキャンパス一帯は、陸軍や病院に関係する建造物が立地したことや、空襲にあったことが知られており、実際に発掘調査や立会調査でも、これらに関連する遺構・遺物がときおり確認されている。第28次調査地点では、徳島大学病院の関係機関である「厚仁会」と記された硬質陶器が出土した。徳島大学史などの復元に貢献する資料である。

第4節 基本層序

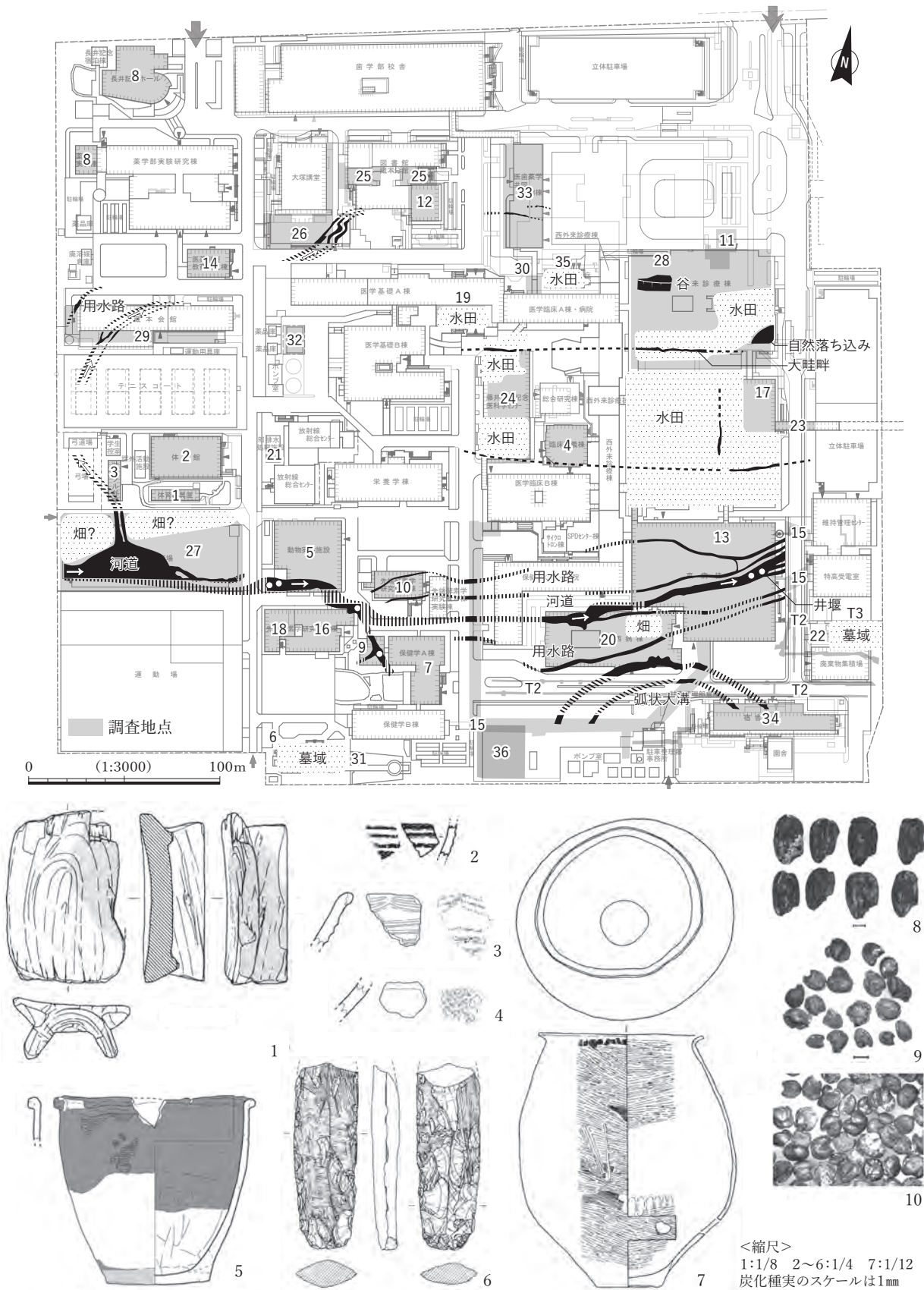
本遺跡の基本層序は、これまでの発掘調査所見(中村2000, 中村編2008, 2010, 2011ほか)をふまえると、おおむね以下のように把握される。

- I層：近代以降の造成土層。陸軍兵営や徳島病院などに関係する遺構・遺物が確認されている。
- II層：幕末～明治時代の水田耕作土層。幕末から近代にかけての陶磁器などが出土する。
- III層：16世紀～江戸時代後期の堆積土層。
- IV層：弥生時代前期末～15世紀の遺物を含む土壌化層(黒褐色シルト層)。遺構の検出は困難である。
- V層：弥生時代前期中葉～末の洪水起源砂層(黄褐色シルト層)。上面から中位にかけて、弥生時代前期末～中世などの遺構が確認されている。地点によっては弥生時代前期中葉～中期初頭の遺物が多量に出土することがある。
- VI層：縄文時代晩期末～弥生時代前期前葉の土壌化層(暗褐色粘質シルト層)。遺物を含むことはきわめて少ない。上面で弥生時代前期前葉～中葉の遺構などが確認されている。

文献

- 東潮・中原計・石村友規・大谷育恵・松浦稔, 2006. 徳島市八人塚古墳測量調査報告. 徳島大学総合科学部人間社会文化研究13, 61-83.
- 石尾和仁, 2002. 中世阿波における集落の展開. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.647-656.
- 一山典, 2002. 阿波国府の考古学的考察. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.595-610.
- 氏家敏之, 2002. 先土器時代(旧石器時代). 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.11-28.
- 岡山真知子編, 1999. 庄遺跡Ⅲ：大蔵省蔵本団地宿舍新営工事(第3期工事)関連埋蔵文化財発掘調査報告. 徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.
- 勝浦康守編, 1990. 名東遺跡発掘調査概要：名東町2丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査. 名東遺跡発掘調査委員会, 徳島.
- 勝浦康守編, 1997. 三谷遺跡：徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査. 徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会, 徳島.
- 木原克司, 2002. 吉野川下流域の条里制施行期と阿波国府の構造. 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.611-627.
- 近藤玲, 2012. 徳島市眉山周辺の弥生集落の動態. 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱10, 31-48.
- 近藤玲編, 2014. 南蔵本遺跡：県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書. 徳島県教育委員会・公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.
- 定森秀夫・中村豊編, 2005. 庄(庄・蔵本)遺跡：徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書. 徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 島田豊彰, 2008. 吉野川流域における中世集落の様相. 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱7, 17-28.

- 徳島県教育委員会文化財課・徳島県埋蔵文化財センター編，徳島県遺跡地図，第2分冊，2006，徳島。
- 徳島県・徳島県埋蔵文化財センター，2021，徳島県徳島市南蔵本遺跡現地説明会資料，徳島県・徳島県埋蔵文化財センター，徳島。
- 徳島県の歴史散歩編集委員会編，2009，徳島県の歴史散歩，歴史散歩36，山川出版社，東京。
- 徳島市教育委員会，1989，平成元年度文化財調査報告資料，徳島市教育委員会，徳島。
- 中村豊，1998，稲作のはじまり：吉野川下流域を中心に，東潮（編），川と人間：吉野川流域史，溪水社，広島，pp.79-100。
- 中村豊，2000，阿波地域における弥生時代前期の土器編年，田崎博之（編），突帯文と遠賀川，土器持寄会論文集刊行会，松山，pp.471-498。
- 中村豊，2002，縄文から弥生へー眉山北麓遺跡群の分析からー，徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学，徳島考古学論集刊行会，徳島，pp.245-258。
- 中村豊，2003，徳島における弥生時代終末期の鉄器生産，青藍1，25-36。
- 中村豊，2009a，医療系総合実験研究棟Ⅱ期改修に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報1，1-10。
- 中村豊，2009b，西病棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報1，11-28。
- 中村豊，2010a，庄・蔵本遺跡・医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修その他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報2，1-9。
- 中村豊，2010b，庄・蔵本遺跡・西病棟新営その他電気設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報2，11-21。
- 中村豊，2016，徳島市三谷遺跡の研究1－徳大1・2次発掘調査成果からー，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要2，3-24。
- 中村豊，2017，徳島市三谷遺跡の研究2－徳大3・4次発掘調査成果からー，中村豊（編），縄文／弥生移行期における農耕の実態解明に関する研究，徳島大学大学院総合科学研究部，徳島，pp.23-43。
- 中村豊編，2008，庄（庄・蔵本）遺跡：徳島大学蔵本団地動物実験施設建設に伴う発掘調査報告書，徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 中村豊編，2010，庄（庄・蔵本）遺跡：徳島大学蔵本団地体育館器具庫・医学部臨床講義棟建設に伴う発掘調査報告書，体育館建設に伴う発掘調査報告書補遺，徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 中村豊編，2011，庄（庄・蔵本）遺跡：徳島大学蔵本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う発掘調査報告書，弓道場建設に伴う立会調査報告書，徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 端野晋平，2022，庄・蔵本遺跡第31～35次調査の成果，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要4，1-69。
- 端野晋平編，2018，庄・蔵本遺跡3－ボイラータンク地点（1998年度立会）・第22・30次調査地点ー，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 端野晋平編，2022，庄・蔵本弥生集落遺跡の研究，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 端野晋平編，2024，庄・蔵本遺跡4－第32・33次調査地点ー，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 端野晋平編，2025，庄・蔵本遺跡5－第34・35次調査地点ー，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 端野晋平編，2026，庄・蔵本遺跡6－第11・12次調査地点ー，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治，2015，庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場地点）の成果，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1，43-97。
- 早瀬隆人，2002，古代阿波における官衙と祭祀，徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学，徳島考古学論集刊行会，徳島，pp.629-648。
- 平井松午，1998，吉野川の河川環境と流域史，東潮（編），川と人間：吉野川流域史，溪水社，広島，pp.3-25。
- 福家清司，2002，中世，徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学，徳島考古学論集刊行会，徳島，pp.135-162。
- 藤川智之，2002，古代，徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学，徳島考古学論集刊行会，徳島，pp.115-134。
- 藤川智之，2015，徳島県における律令期腰帯具と出土遺跡，徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱11，71-84。
- 藤川智之編，2002，観音寺遺跡Ⅰ（観音寺遺跡木簡編）：一般国道192号徳島南環状道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター，徳島。
- ふるさと徳島編集委員会編，1991，ふるさと徳島，ふるさと徳島編集委員会，徳島。
- 古田昇，1996，徳島県吉野川・鮎喰川下流域平野の沖積層の形成過程，立命館地理学8，61-72。
- 古田昇，2005，多様性をもつ中央構造線沿いの徳島平野，平野の環境歴史学，古今書院，東京，pp.209-246。
- 北條芳隆編，1998，庄・蔵本遺跡1：徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査，徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 三阪一徳編，2016，庄・蔵本遺跡2－藤井節郎記念医科学センター新営，附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期，大塚講堂改修，外来診療棟新営，学生支援センター改修ー，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 山川浩實，1995，戦争から豊かな未来へ，徳島県立博物館，徳島。
- 湯浅利彦，2002，縄文時代，徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学，徳島考古学論集刊行会，徳島，pp.29-61。



1. 木製腰掛け(9次) 2. 浮線網状文系土器(998年度立会T2) 5. 円形粘土系土器(1998年度立会T2)
6. 石製刺突武器(9次) 7. 松菊里型系土器(6次) 3・4. 浮線網状文系土器(1998年度立会T2) 8. イネ炭化種実(20次) 9. キビ炭化種実(20次) 10. アワ炭化種実(20次)

図1-3 弥生時代前期前葉～中葉の主要遺構・遺物

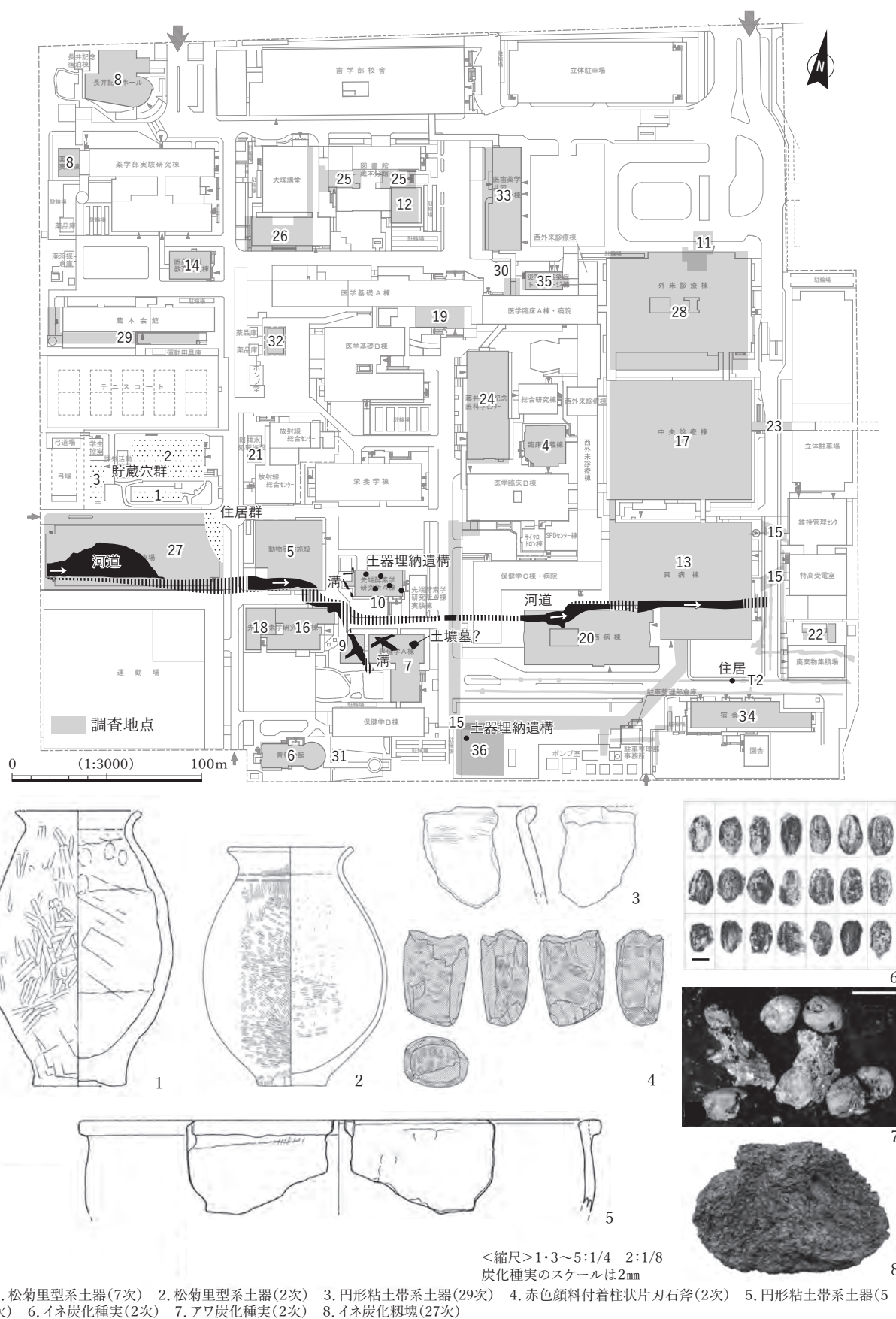


図 1-4 弥生時代前期末～中期初頭の主要遺構・遺物

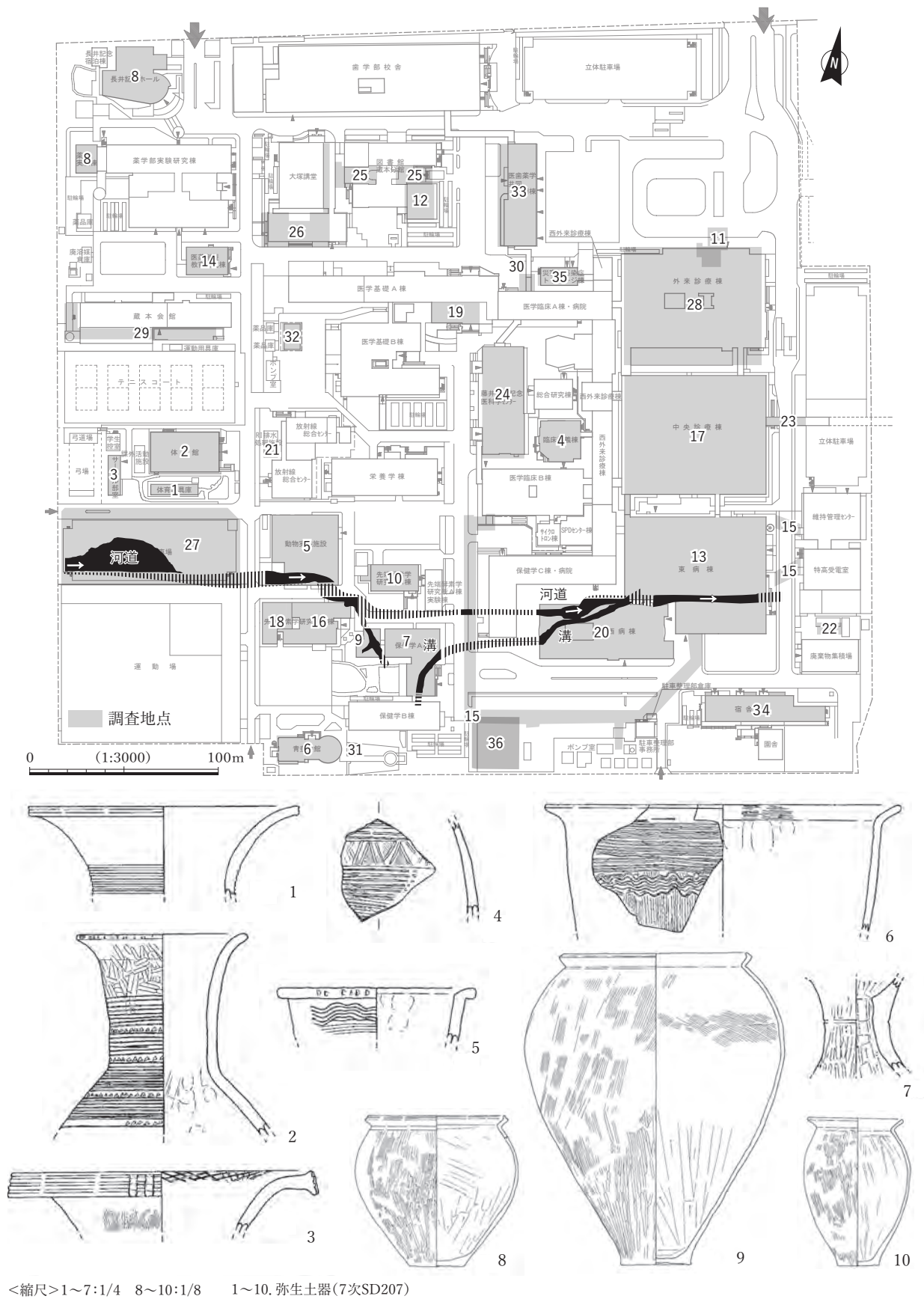


図 1-5 弥生時代中期初頭～中葉の主要遺構・遺物

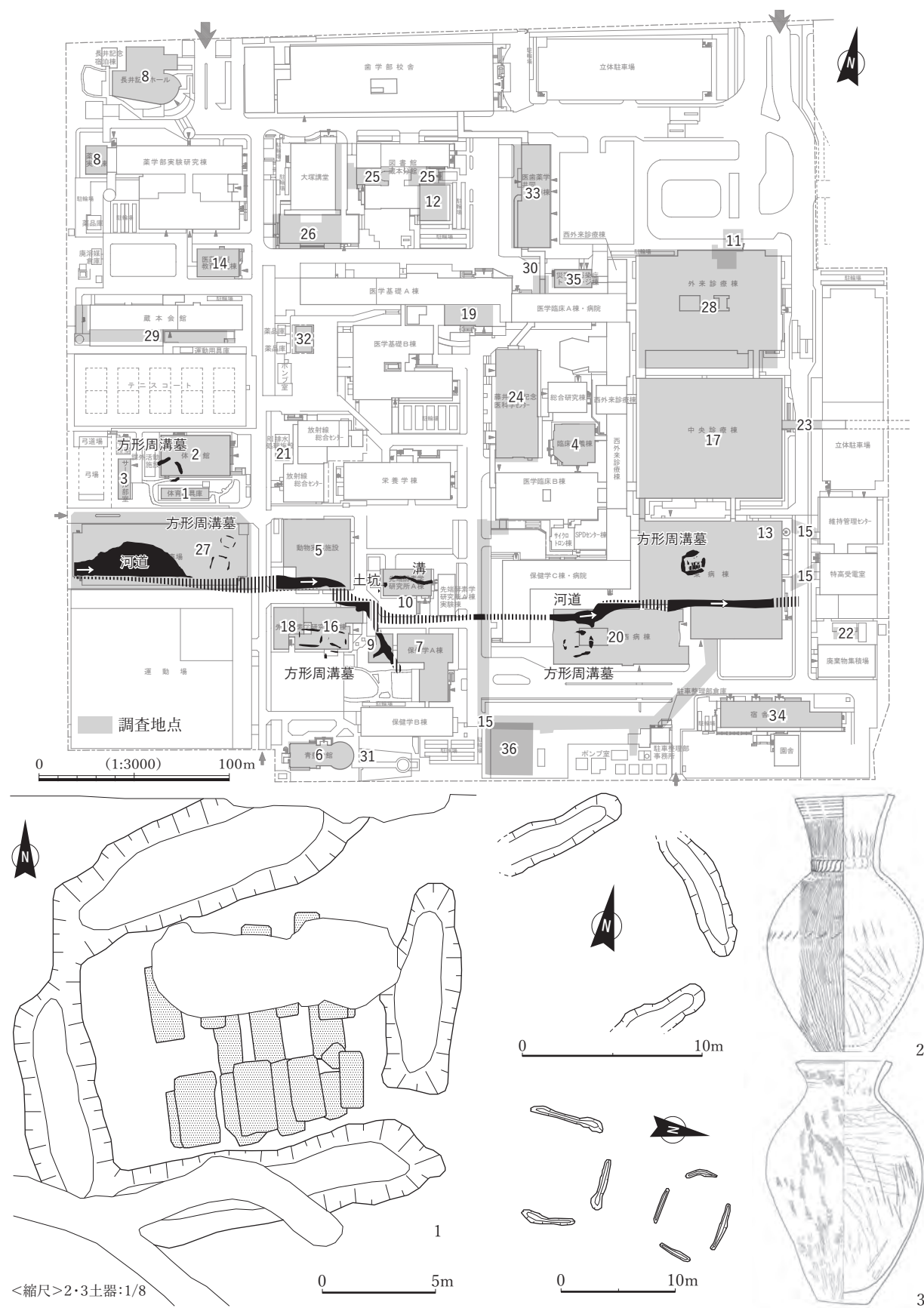


図 1-6 弥生時代中期中葉～後葉の主要遺構・遺物

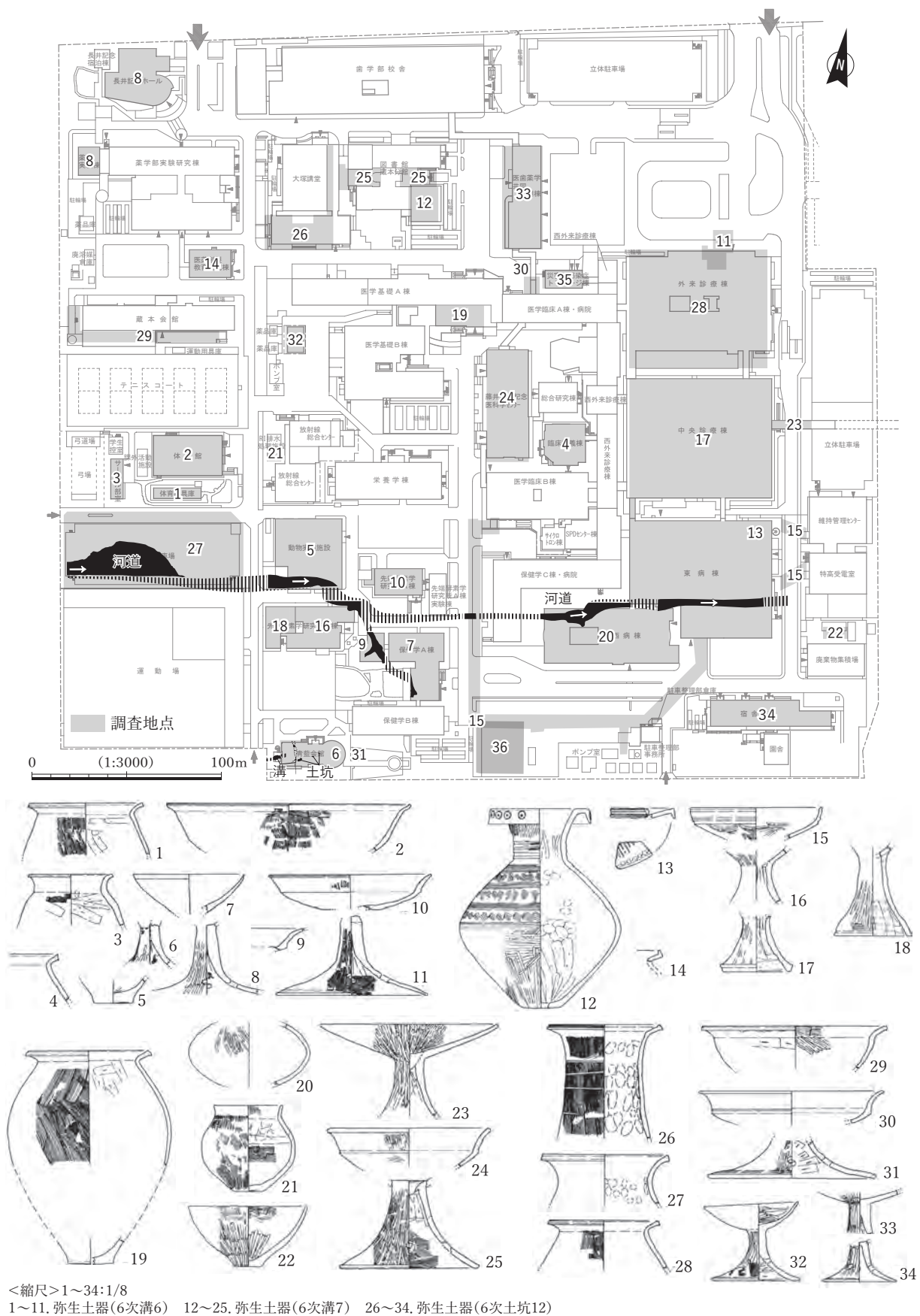


図 1-7 弥生時代中期末～後期中葉の主要遺構・遺物

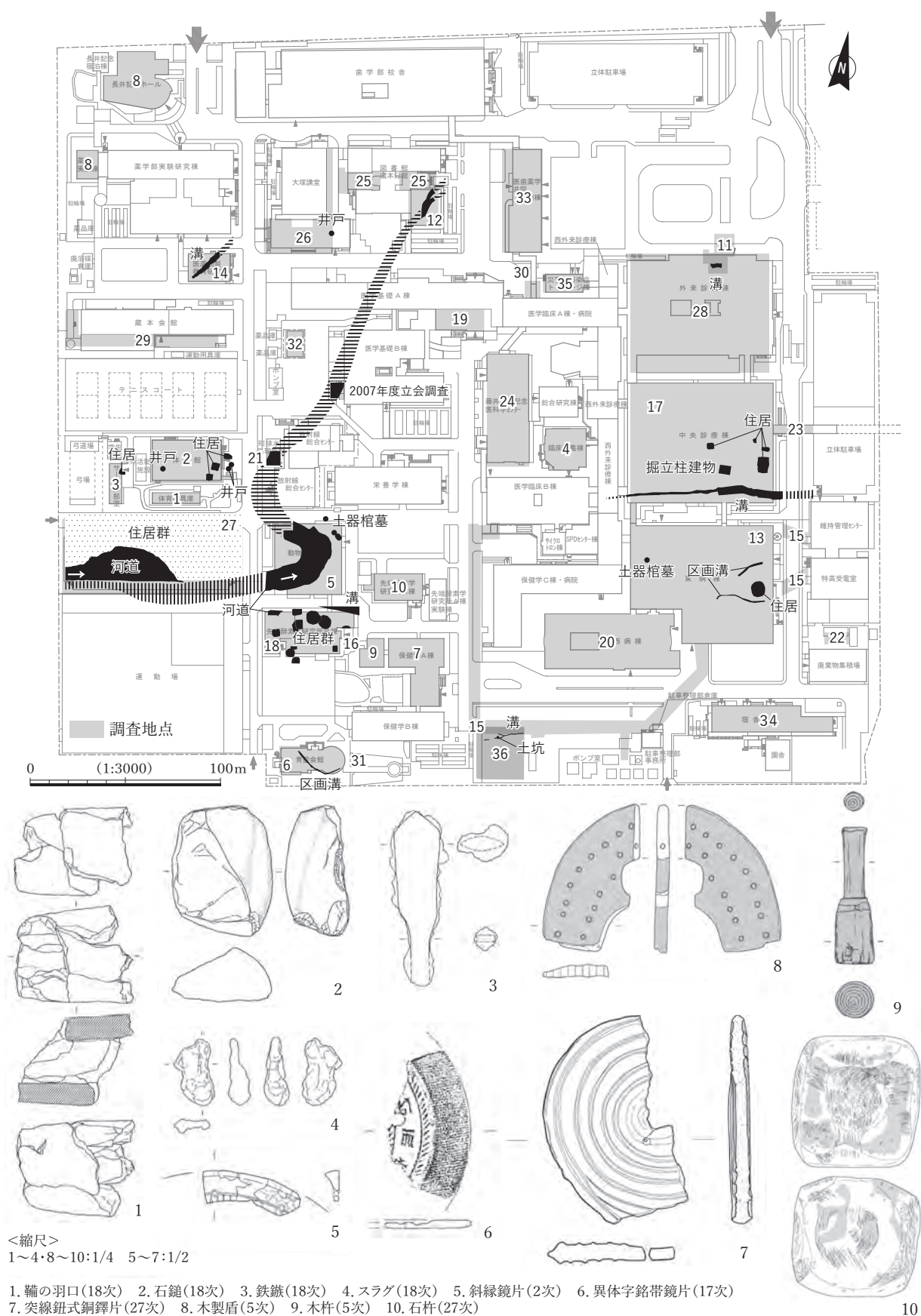


図 1-8 弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉の主要遺構・遺物

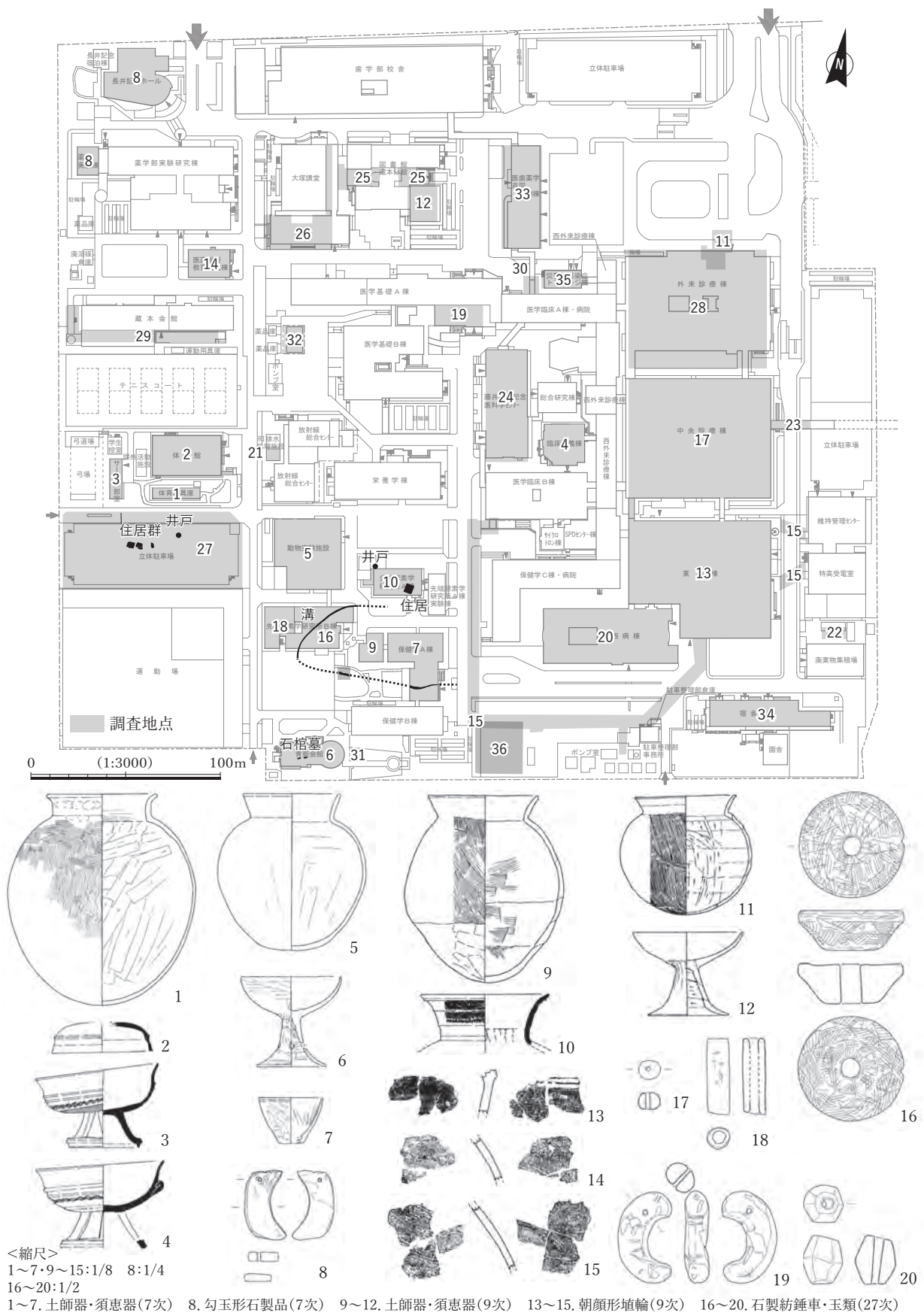


図 1-9 古墳時代中期～後期の主要遺構・遺物

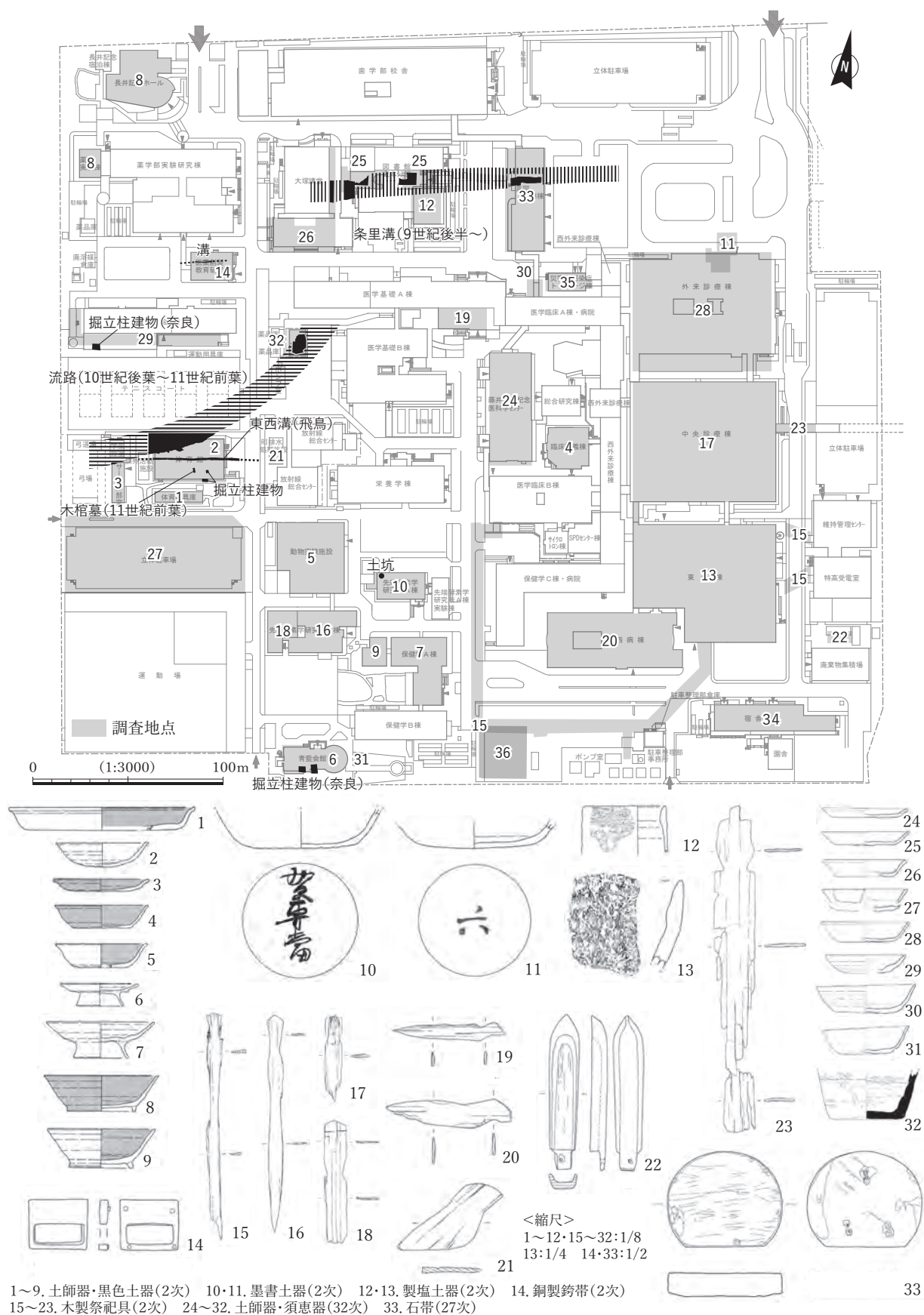


図 1-10 古代の主要遺構・遺物

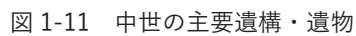


図 1-11 中世の主要遺構・遺物

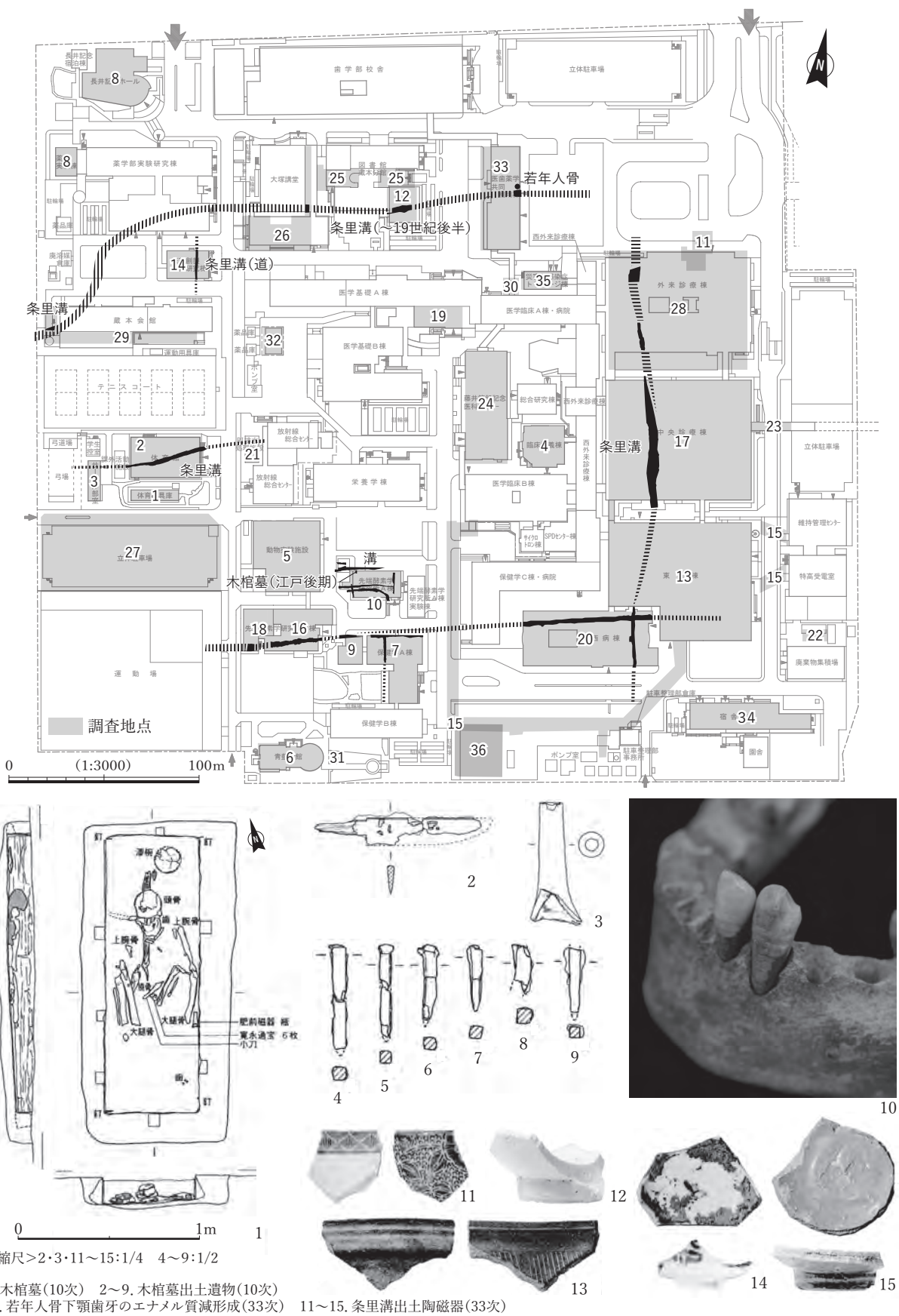


図 1-12 近世の主要遺構・遺物

第2章 第14次調査（医薬資源教育研究センター地点）

第1節 調査にいたる経緯・経過

1. 調査にいたる経緯

1995年度、蔵本キャンパスの北西部に位置する地点に、徳島大学薬学部医薬資源教育研究センターを建設することとなった。北西に位置する第8次発掘調査（長井記念ホール地点）で明確な遺構を確認しえなかったため、当初はこの地点でも遺構密度が低いことが予想された。しかし、試掘調査の結果、包含層の遺存と弥生～古墳時代の溝の可能性のある落ち込みが確認され、この時期の遺構・遺物が予定地の範囲に広がっていることを想定しえた。そこで、建設工事に先立って、調査員1名による発掘調査を実施した。調査面積は約300 m²、調査期間は1995年6月21日～9月5日である（図版1）。

2. 調査の体制

調査主体 徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・東潮）

調査員 橋本達也

調査補助員 上田淑子・新谷多賀子・北條ゆうこ・山本愛子（施設マネジメント部・技術補佐員）

3. 調査地点の位置と区割り（図2-1）

本調査地点は、徳島大学蔵本キャンパス内の北西部に位置する。北東側には弥生時代前期中葉の用水路、古墳時代前期の井戸、中世の条里溝などが確認された第26次調査（大塚講堂改修）地点、南西側には弥生時代前期中葉の用水路、弥生時代前期末～中期初頭の円形粘土帯系土器、奈良時代の掘立柱建物、近世の条里溝などが確認された第29次調査（学生支援センター改修）地点がある。調査にあたっては、調査区外の北西側に原点をとり、そこから建物予定範囲の辺に沿って南方向にA・B・C・D、東方向に1・2・3・4という順に5 mメッシュのグリッドを設定した。グリッドの南北主軸は、平面直角座標系の座標北から10度、西へ振れている。

4. 調査の経過

試掘調査により、予定地の東半部は大規模な攪乱を受けていることが確認され、調査範囲を西半部に限った。ところが、調査を進める過程で、東へ向かって延びる古墳時代の溝を検出したため、その広がりを確認するため、あらためて調査区を東へ5 mほど拡張した。

第2節 調査の記録

1. 層序

調査区の東・西・南・北の各壁において、土層の観察・記録を実施した（図2-2～2-5、図版1・2）。A-A'・C-C'土層断面（図2-2・2-4）にもとづいて、本調査地点での層序を以下、詳述する。

1層：淡黄色（2.5Y8/4）粘土。上面の標高は約3.00 m、厚さは約10 cmを測る。

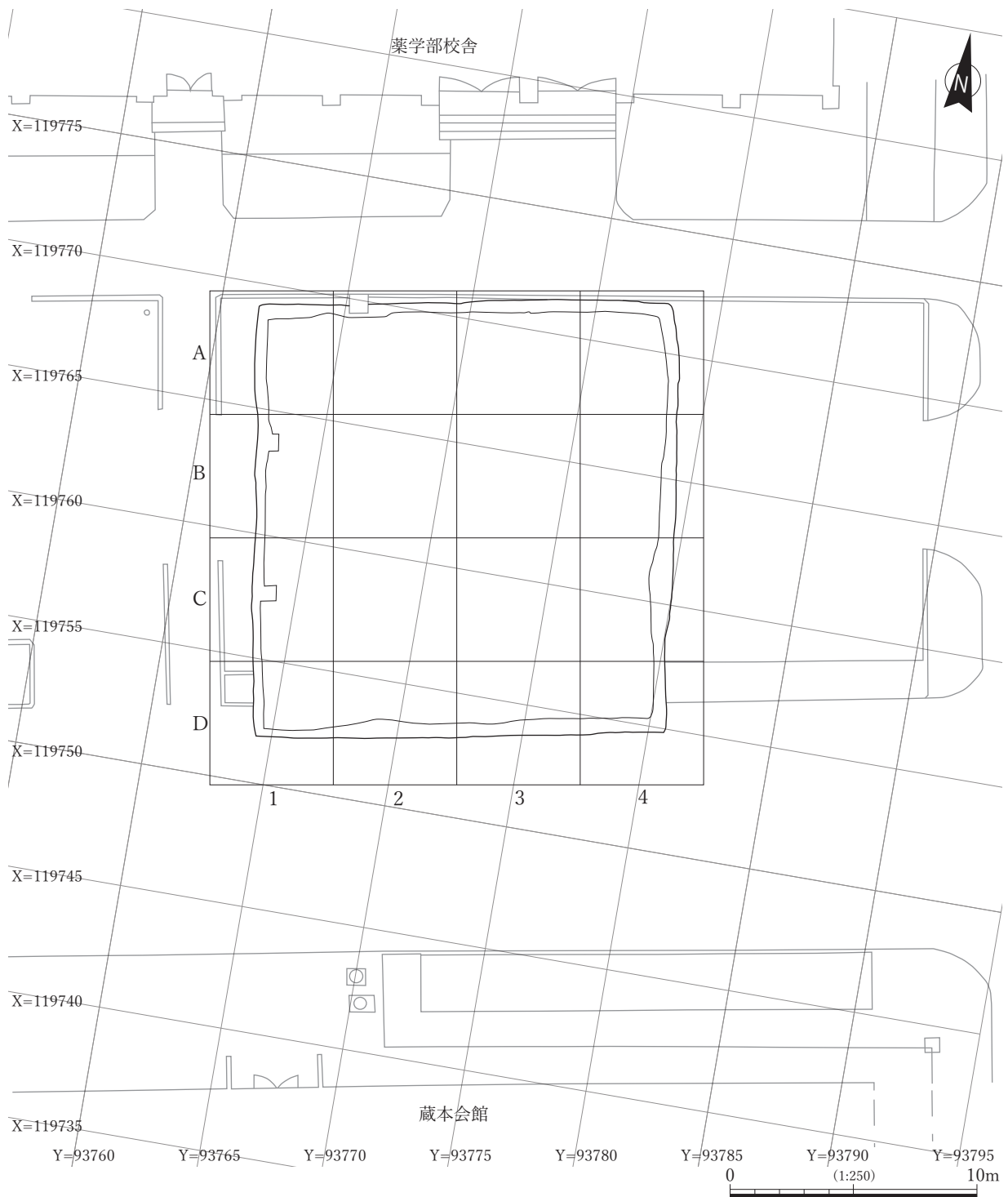


図 2-1 調査地点の位置と区割り

2層：灰色（5Y5/1）シルト質粘土。上面の標高は約 2.85 m，厚さは 5 ～ 10 cmを測る。

3層：浅黄色（7.5Y7/3）粘土。上面の標高は約 2.80 m，厚さは約 5 cmを測る。

4層：明黄褐色（2.5Y7/6）粘土。上面の標高は約 2.75 m，厚さは 5 ～ 10 cmを測る。

5層：にぶい黄色（2.5Y6/3）粘土。上面の標高は約 2.70 m，厚さは 10 ～ 20 cmを測る。

6層：明黄褐色（10YR6/8）粘土。上面の標高は約 2.60 m，厚さは約 5 cmを測る。

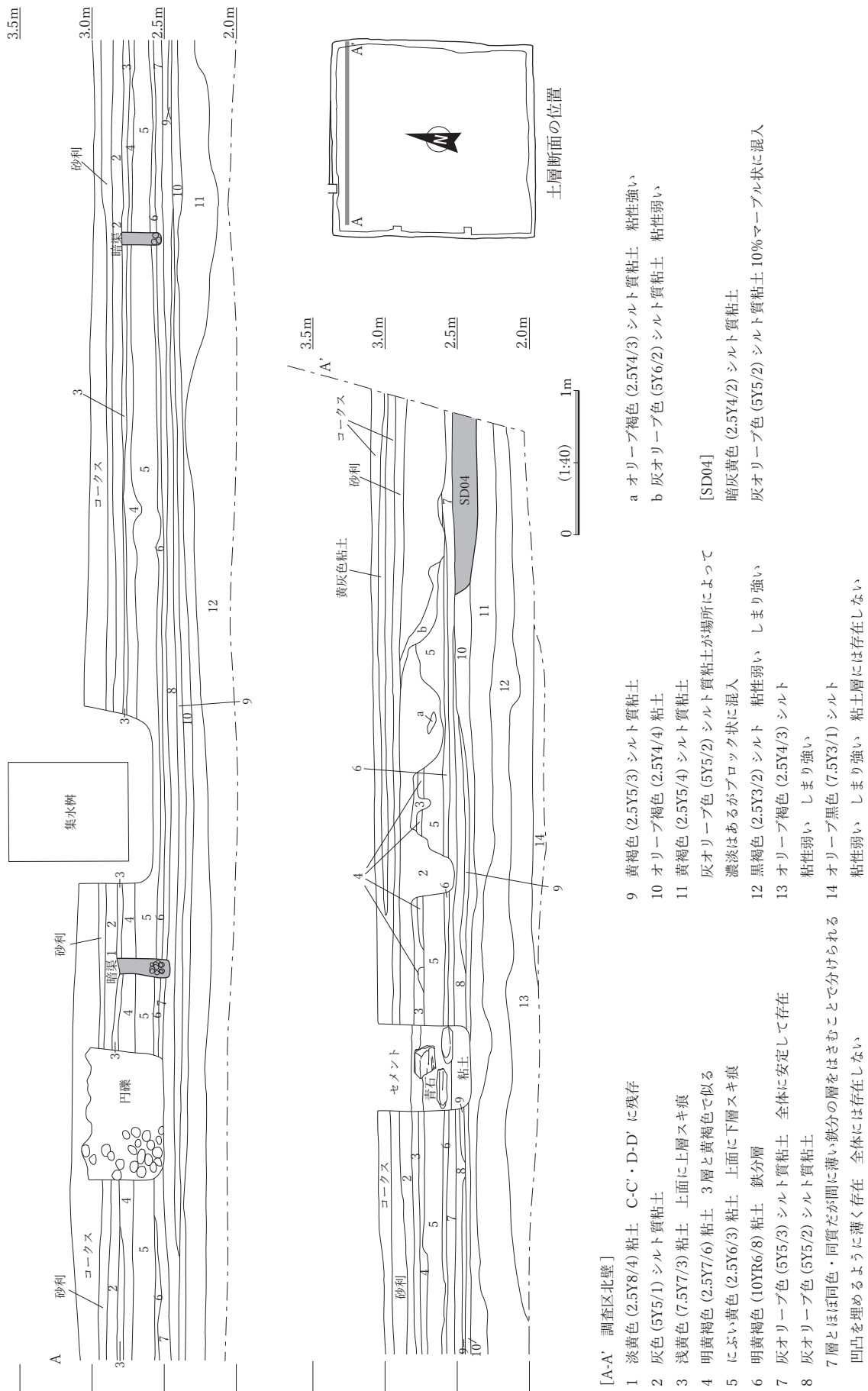
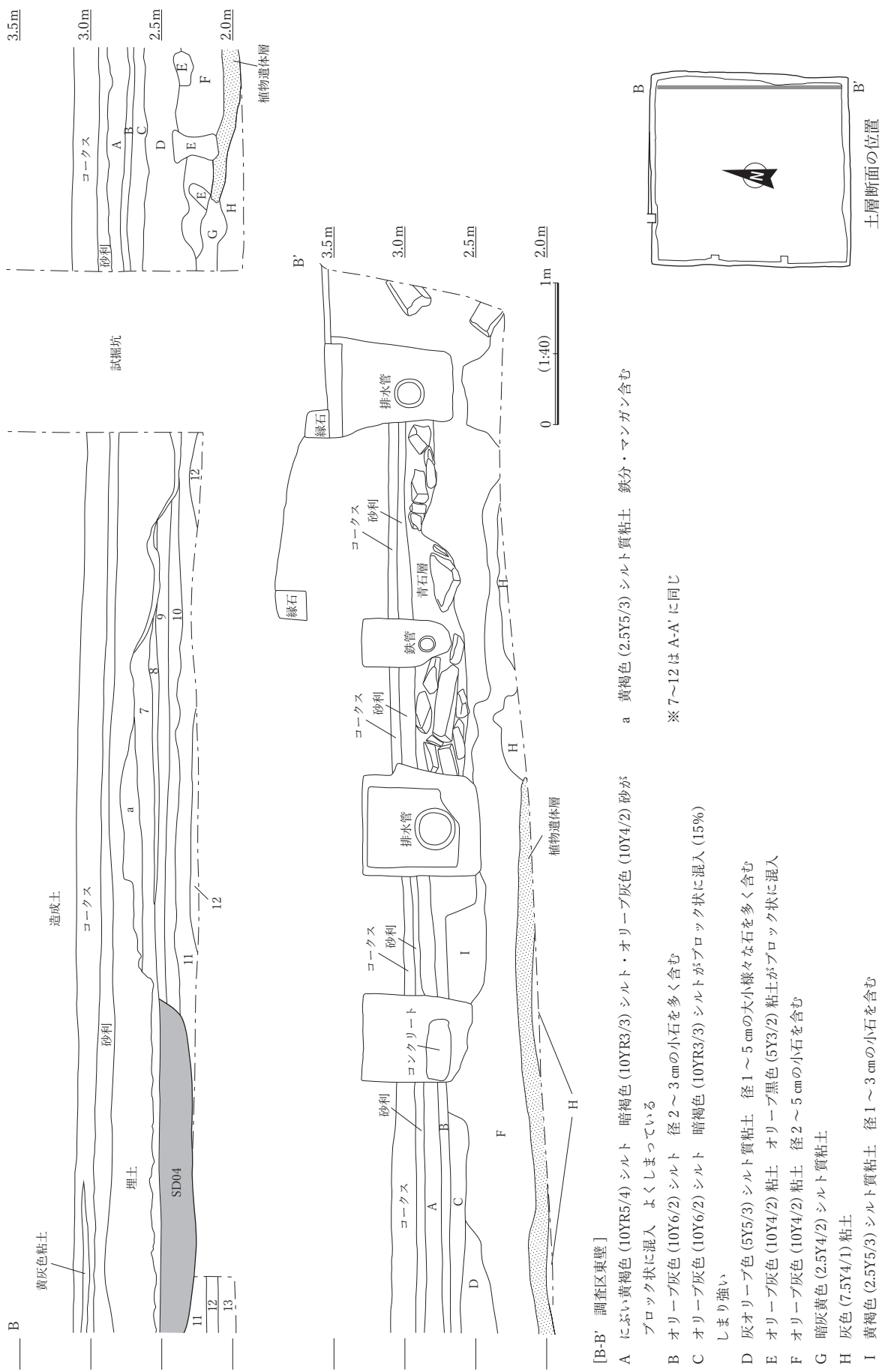


図 2-2 土層断面図 (1)



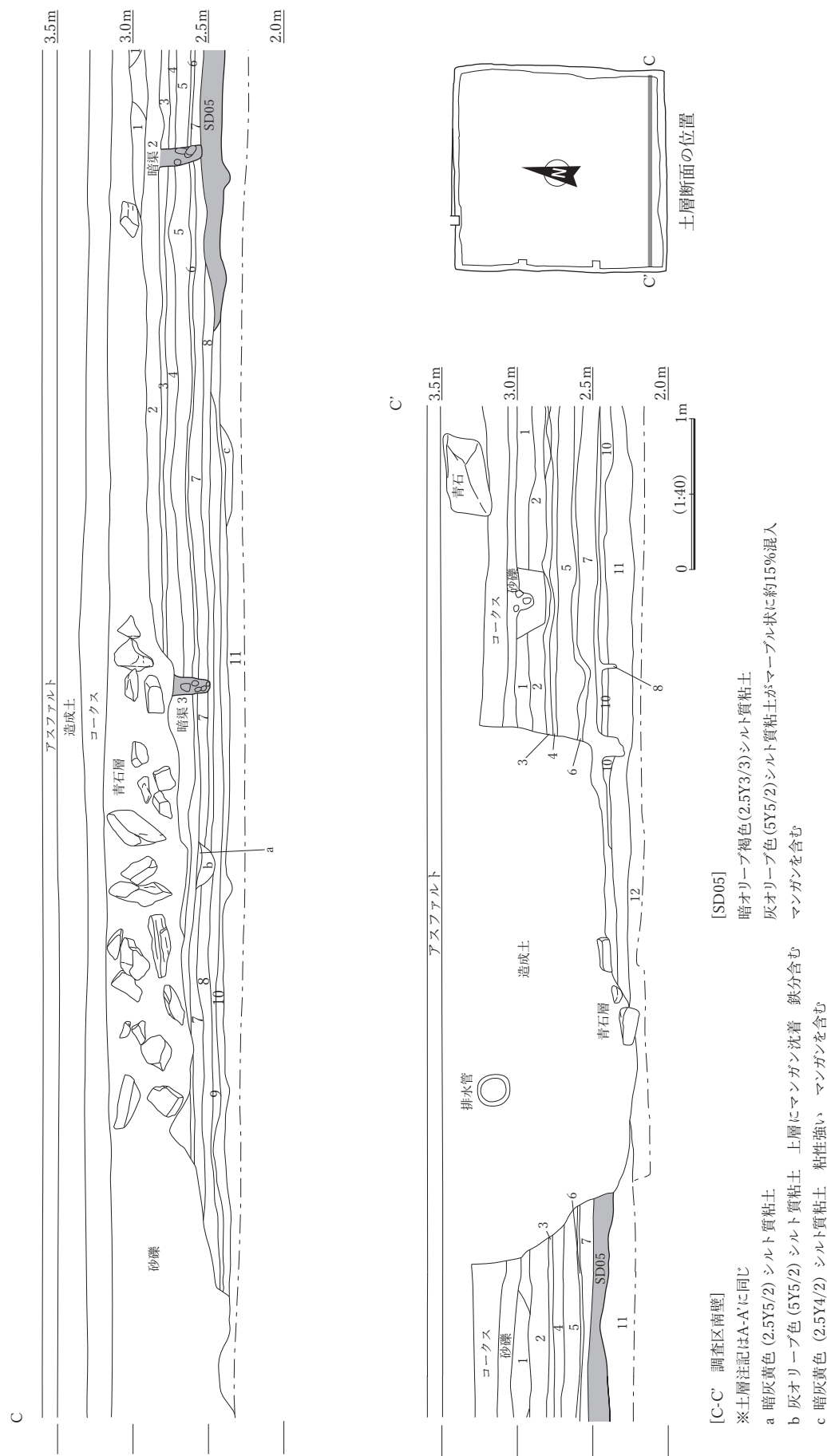


図 2-4 土層断面図 (3)

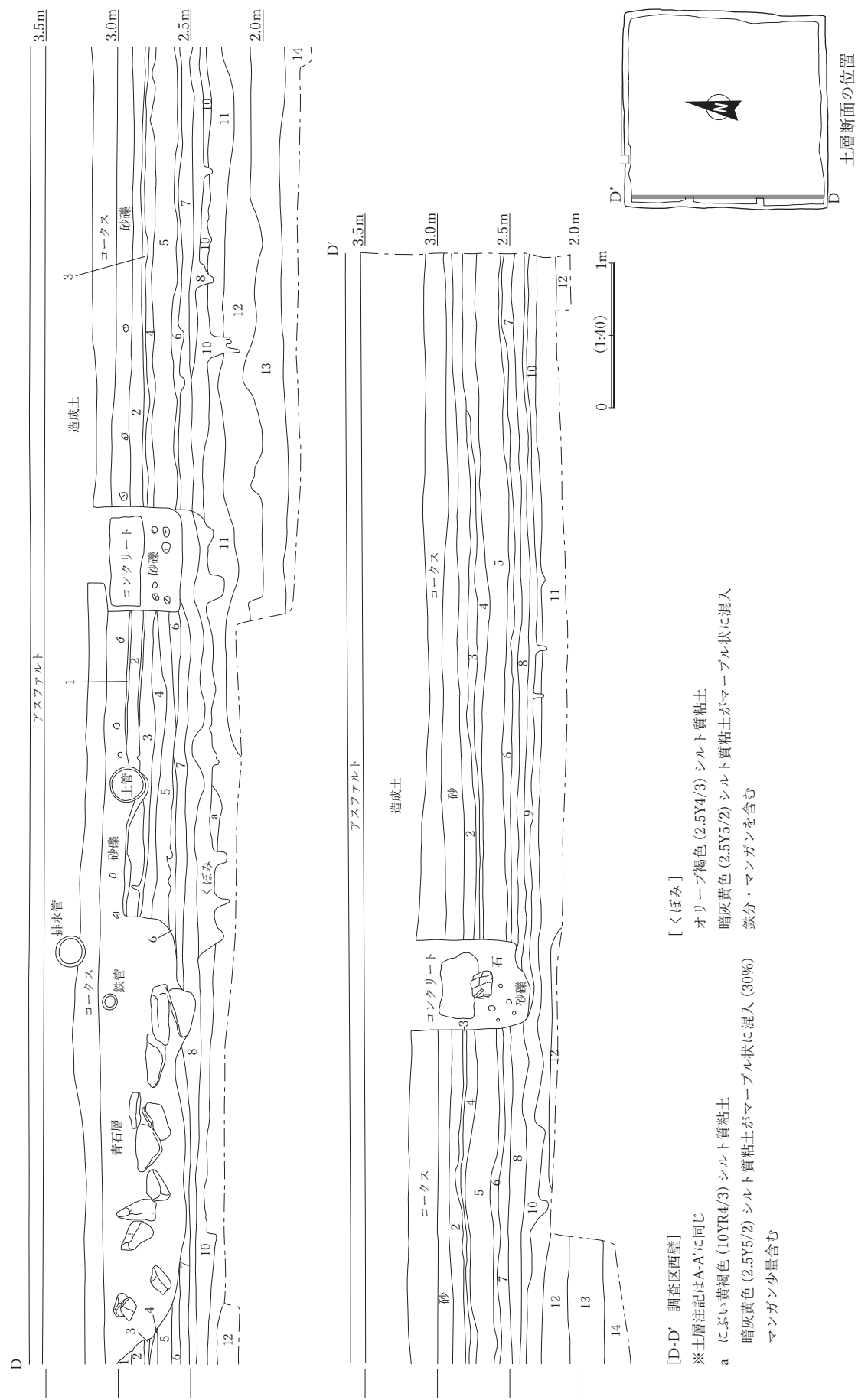


図 2-5 土層断面図 (4)

- 7層：灰オリーブ色（5Y5/3）シルト質粘土。上面の標高は2.50～2.55 m，厚さは5～10 cmを測る。
 8層：灰オリーブ色（5Y5/2）シルト質粘土。上面の標高は2.45～2.50 m，厚さは5～10 cmを測る。
 9層：黄褐色（2.5Y5/3）シルト質粘土。上面の標高は約2.45 m，厚さは約5 cmを測る。
 10層：オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘土。上面の標高は2.40～2.45 m，厚さは5～10 cmを測る。
 11層：黄褐色（2.5Y5/4）シルト質粘土。上面の標高は2.35～2.40 m，厚さは5～30 cmを測る。
 12層：黒褐色（2.5Y3/2）シルト。上面の標高は2.20～2.35 m，厚さは10～35 cm以上を測る。
 13層：オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト。上面の標高は約2.10 m，厚さは10～20 cm以上を測る。
 14層：オリーブ黒色（7.5Y3/1）シルト。上面の標高は約2.00 mを測る。

以上の層と遺跡全体の基本層序との関係については、1層がⅠ層（近代以降の造成土層）、2層がⅡ層（幕末～明治時代の水田耕作土層）、3～5層がⅢ層（16世紀～江戸時代後期の堆積土層）、6～8層がⅣ層（弥生時代前期末～15世紀の遺物を含む土壌化層）、9～11層がⅤ層（弥生時代前期中葉～末の洪水起源砂層）、12～14層がⅥ層（縄文時代晩期末～弥生時代前期前葉の土壌化層）にそれぞれ対応するものと考えられる。本調査地点では、1・3・5・7・9・10・12層の各上面を遺構面として調査を実施した。

2. 遺構

【12層上面】（図2-6，図版3）

溝状落ち込み1基，くぼみ1基が確認された。溝状落ち込みは調査区の西半部に位置し，北東－南西方向に走る。幅は約1.5 mを測り，長さは約16 m分検出した。所属時期は検出層位からみて，弥生時代前期以降と判断される。北東に位置する第26次調査地点，南西に位置する第29次調査地点では弥生時代前期中葉の用水路が確認されていることから，これもまたこの時期の用水路の可能性がある。くぼみは調査区の中央部に位置する。平面形は長軸を北東－南西方向にとる楕円形で，検出部位で長さ約6.5m，約3.4mを測る。これも弥生時代前期中葉に属する可能性がある。

【10層上面】（図2-7，図版4）

弥生時代の掘立柱建物跡1軒が確認された。掘立柱建物跡は，調査区南西部の西壁際に位置し，SP01・SP02・SP03の三つの柱穴からなる（図2-8）。SP02とSP03を結ぶ線を主軸とみると，主軸はおおむね北西－南東方向を向いている。建物プランは調査区の西側に延びる可能性がある。柱穴間の距離はSP01・SP03間で1.45m，SP02・SP03間で1.70mを測る。柱穴の平面形は円形ないし楕円形で，その規模は径40～50 cmを測る。断面形はU字形をなし，深さは30 cm程度である。柱痕跡は柱穴の中心付近かやや壁際に寄った場所に位置し，その規模は径10 cm程度を測る。検出層位からみて，古墳時代以前の弥生時代とみられるが，詳細な時期は決定しがたい。建物跡の南側からは，短冊形の鉄器片がその短辺を下方に向けた状態で出土した（図2-9）。掘り方は未検出である。

【9層上面】（図2-10，図版5・6）

古墳時代の溝2条と土坑1基が確認された。SD04は調査区の北東部から南西部にかけて検出された溝である（図2-11）。北東－南西方向に走る。最大幅3.20 mを測り，長さは18.80 m分検出した。断面形はレンズ形で，深さは0.20 mを測る。埋土は褐色ないし黄褐色系シルト質粘土1層からなる。内部からはほぼ完形の土師器・甕や多数の土師器片が出土した。土師器・甕は古墳時代前期前葉～中葉に属するもので，溝の底面近くから，大きく二つに分かれた状態で出土した（図2-12）。この溝の所属時

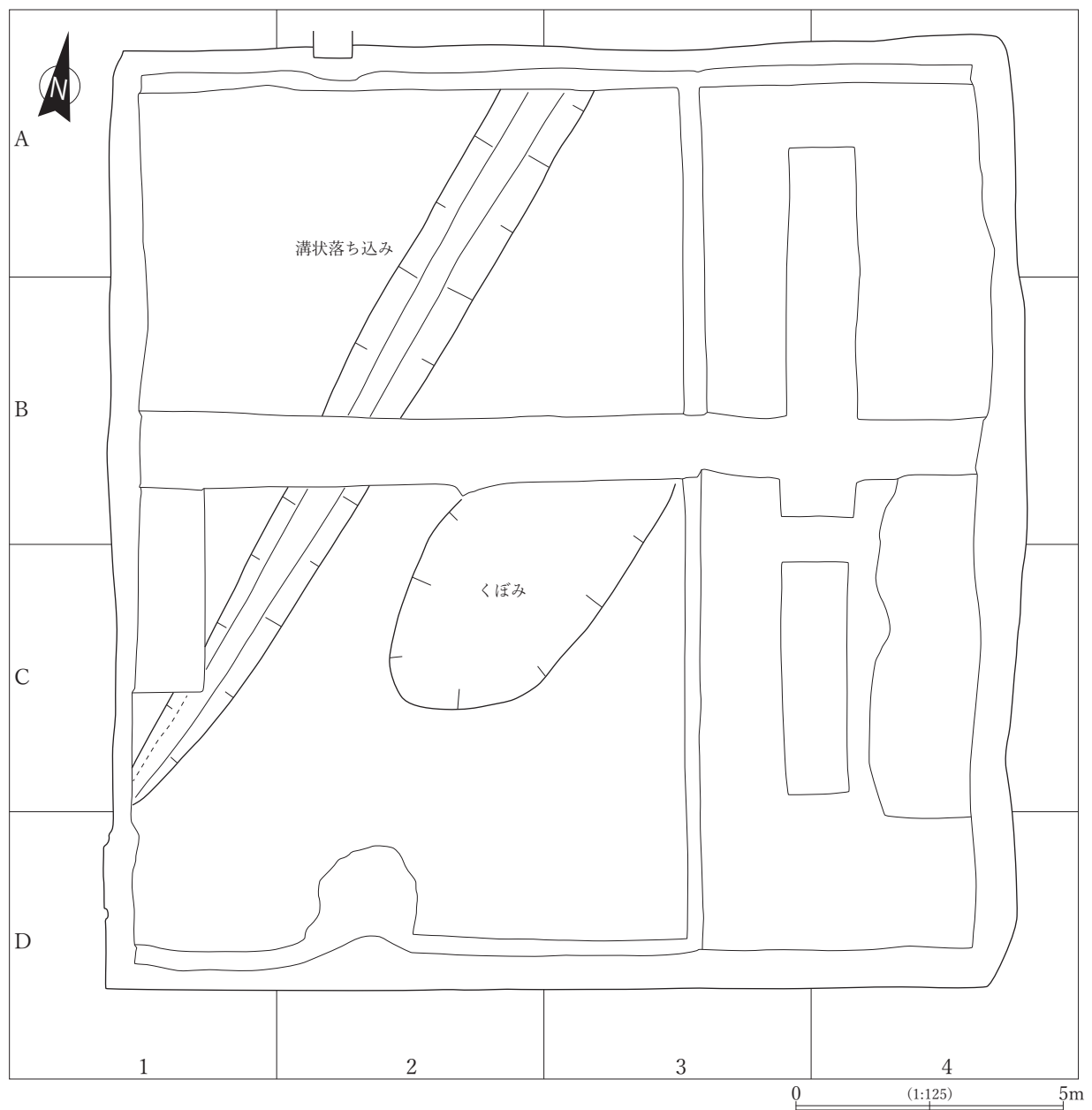


図 2-6 12 層上面遺構全体図

期は検出層位と出土遺物からみて、古墳時代前期前葉～中葉の所産と判断される。SD05 は調査区の南西部で検出された溝で、その北端部を SD04 と接している（図 2-13）。北西－南東方向に走る。最大幅 2.40 m を測り、長さは 7.00 m 分検出した。断面形はレンズ形で、深さは 0.10 m を測る。埋土は褐色ないし黄褐色系シルト質粘土 1 層からなる。SK02 は調査区の南西部で検出された土坑で、すぐ東側には SD04 が位置する（図 2-13）。平面形は長楕円形をなし、長軸は南北方向をとる。検出部位で長さ 1.80 m、幅 1.0 m を測る。断面形はレンズ形で、深さは 0.10 m を測る。埋土は褐色系シルト質粘土 1 層からなる。SD05・SK02 とともに、SD04 と同系統の埋土であることから、同時期の所産とみておきたい。

【7 層上面】（図 2-14，図版 7）

古代の溝 3 条，土坑 1 基が確認された。SD01・SD02・SD03 は，調査区の中央部にかけて検出され

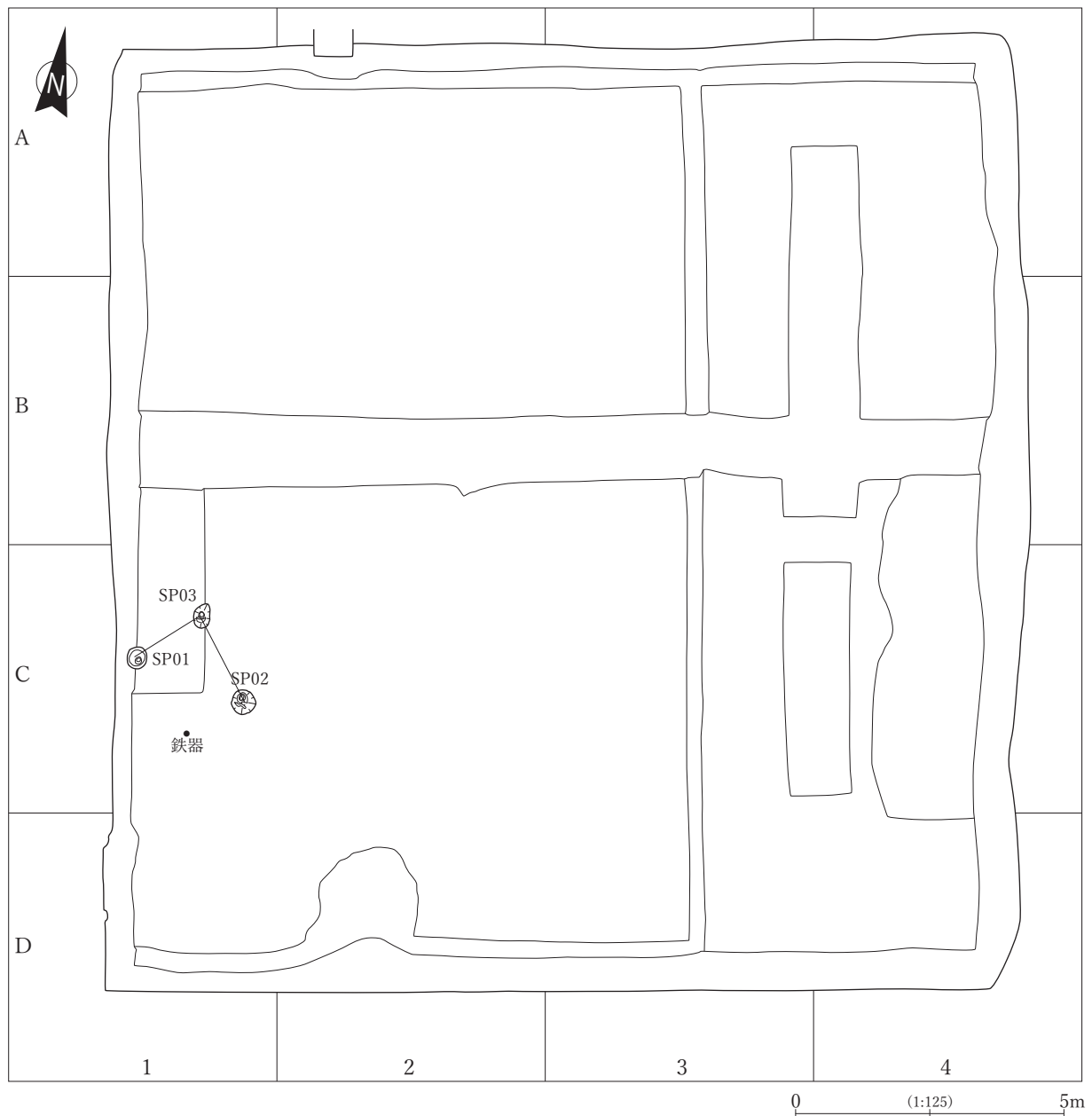


図 2-7 10 層上面遺構全体図

た溝で、東西方向に走る（図 2-15）。これらは幅 0.20 ～ 0.30 m を測り、8.90m 分を検出した。SD01 と SD02 は東側で接する。SD02 と SD03 は東側では接しながら、西にいくにつれ、交わり、一つの溝となる。断面形は U 字形ないし箱形で、深さは 0.10m を測る。埋土は灰黄色シルト 1 層からなる。これらの主軸方位はおおむね W10° S で、本遺跡でこれまで確認されてきた条里地割にともなう東西溝の方位と一致する。この付近での条里地割の施行年代は、8 世紀中葉～9 世紀後半のどこかと考えられることから（端野 2026）、これらの溝は、条里地割と関係する小区画溝とみなしうる。いずれも同規模で重複することから、本来は 1 条であった溝を数度にわたって掘り直した結果とみられる。SK01 は調査区の南側中央部付近で検出された土坑で、検出は一部にとどまるため、平面形は不明である。検出部位で、東西長 2.20m、南北長 1.00m を測る。深さは 0.10 m である。

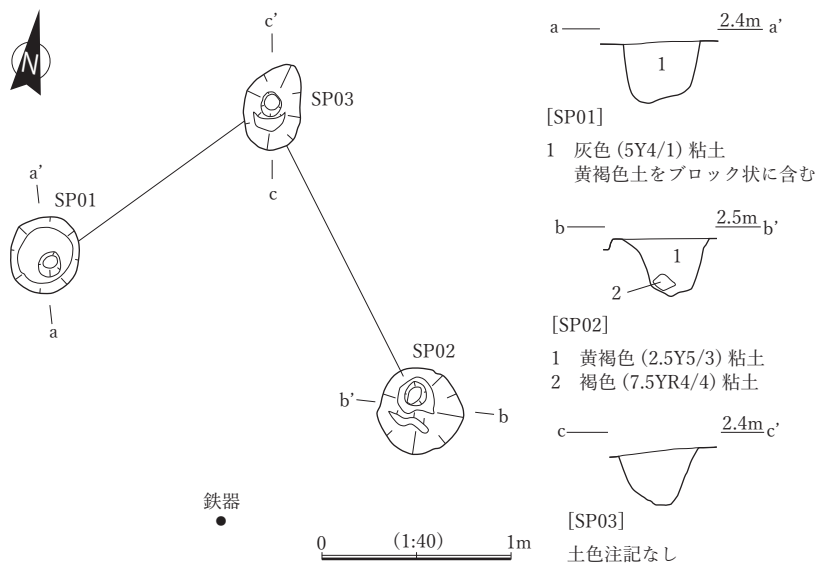


図 2-8 掘立柱建物跡

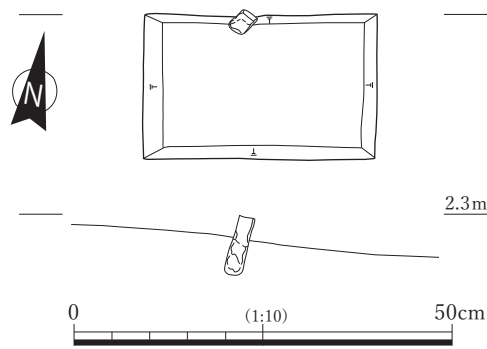


図 2-9 鉄器出土状況

に走る。幅は 0.40 ～ 0.50 m を測り、15.80 m 分を検出した。これらの主軸方位はおおむね N 10° W で、本遺跡でこれまで確認されてきた条里地割にともなう南北溝の方位と一致し、近世絵図に描かれた水路とも合致する（第 4 章）。したがって、これらも条里地割にともなう溝の一部とみなしうる。なお、2 条溝の間にあたる幅 0.30 ～ 0.50 m の空白部は、道として機能した可能性がある。主軸を南北方向にとる暗渠 4 条（暗渠 1 ～ 4）が調査区の全域にわたって検出された（図 2-18）。幅は 0.15 ～ 0.30 m を測る。断面

は U 字形で、深さは 0.20 ～ 0.30 m を測る。埋土は灰色ないし灰オリーブ色シルトなどからなる。底面にまず竹・木を、さらにその上に石を敷き詰めていた。幕末以降に、田畑の水はけをよくするために、床土下層部分に埋設された施設と考えられる。調査区のほぼ全域にわたって、多数の鋤痕が確認された。すべてが主軸を南北方向にとる。SP1 ～ 17 は、調査区全域で確認された柱穴群である（図 2-19）。柱穴は南北方向に 1.25 ～ 2.50 m、東西方向に 2.50 m の間隔をあけ、検出された。柱穴群は南北方向に規則正しく 3 列をなしている。柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、その規模は径 20 ～ 70 cm を測る。一部の柱穴からは近代の磁器片が出土した。旧陸軍練兵場時代に関係する遺構であろうか。

3. 遺物（図 2-20、表 2-1・2-2、図版 10）

本調査地点では、コンテナ 18 箱分の遺物が出土した。ここでは遺存状態の良好なものについて報告する。1 は SD04 から出土したほぼ完形の土師器の甕である。外反する口縁部と丸底の底部をもつ。大久保（2002）の編年で、古墳時代前期前葉～中葉に位置づけられる。2 は 9 ～ 11 層（黒褐色土層）から出土した弥生土器の壺の頸部片である。6 条沈線を施す。I - 3・4 様式に該当する。3 は黒褐色土層から出土した土師器の口縁部片である。4 ～ 11 は 7 層から出土した土師器・須恵器・土製品である。4 は土師器の羽釜の破片で、古代～中世の所産である。5 は土師器の甕ないし大型鉢の取手片で、古墳

【5層上面】（図 2-16、図版 8）

調査区のほぼ全域にわたって、多数の鋤痕が確認された。中世から近世にかけての畑作にともなう耕作痕跡と考えられる。ほとんどが主軸を南北方向にとる。

【3層上面】（図 2-17、図版 8・9）

近世の溝（SD06・SD07）2 条、暗渠 4 条、鋤痕、近代の柱穴群が確認された。SD06・SD07 は調査区の東側で検出された溝で、南北方向

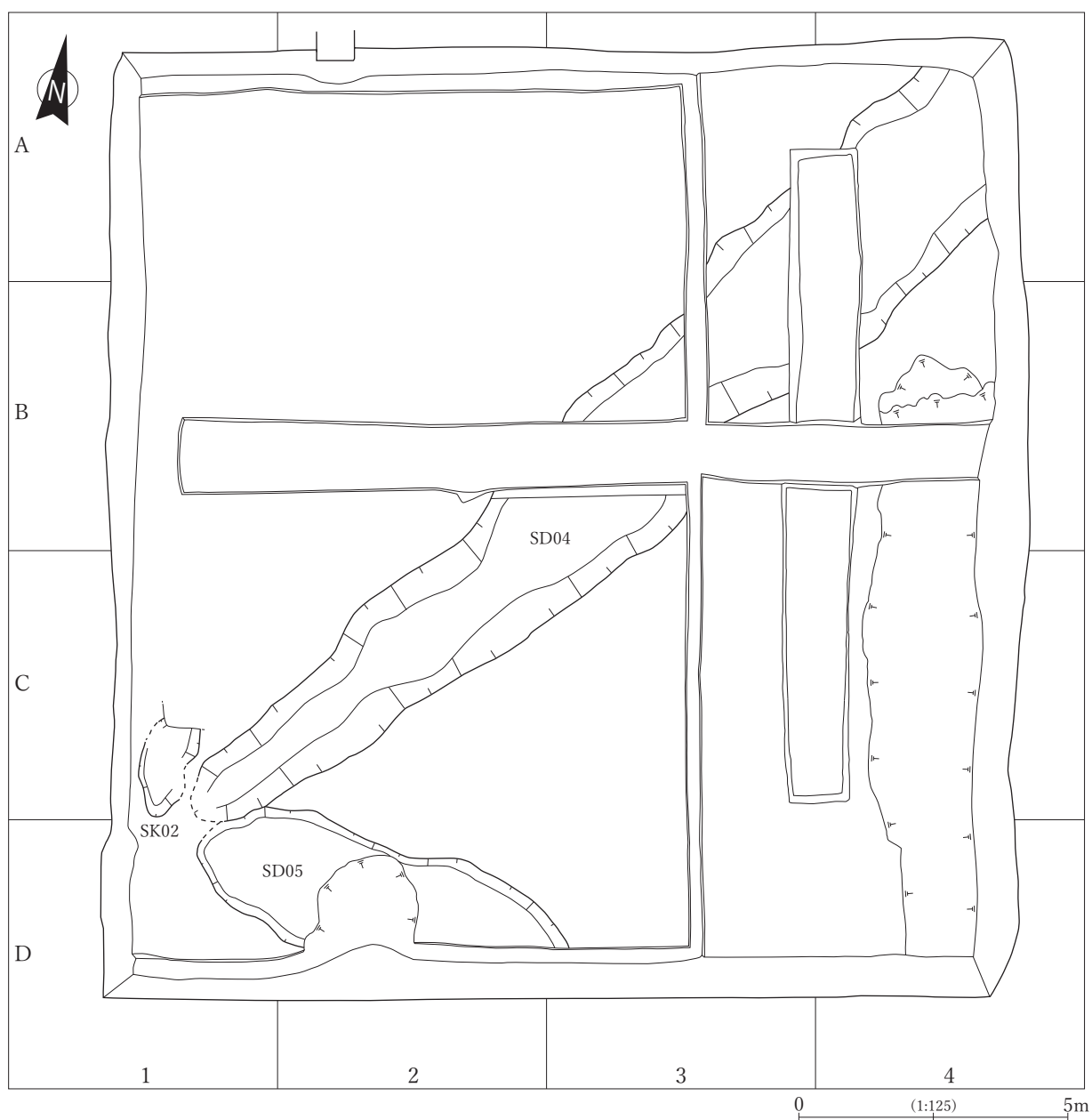


図 2-10 9層上面遺構全体図

時代中期～古代の所産である。6は土師器の碗で、古代の所産である。7は黒色土器A（内黒）で、9世紀後半～10世紀後半の所産である。8・9は土師器の碗で、8は中世～近世、9は近世の所産であろうか。10は須恵器のはそうで、古代の所産である。11は円盤形土製品である。12はSD06から出土した鉄製の釘である。13は8～9層から出土した砂岩製敲石である。14～16は9～10層、8層、灰オリーブシルト質粘土それぞれから出土したサヌカイト製打製石鏃である。

文献

大久保徹也, 2002. 中国・四国地方の土器. 赤塚次郎（編）, 考古資料大観第2巻 弥生・古墳時代 土器Ⅱ. 小学館, 東京, pp.159-168.
 端野晋平, 2026. 総括. 端野晋平（編）, 庄・蔵本遺跡6－第11・12次調査地点－. 徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島, pp.51-69.

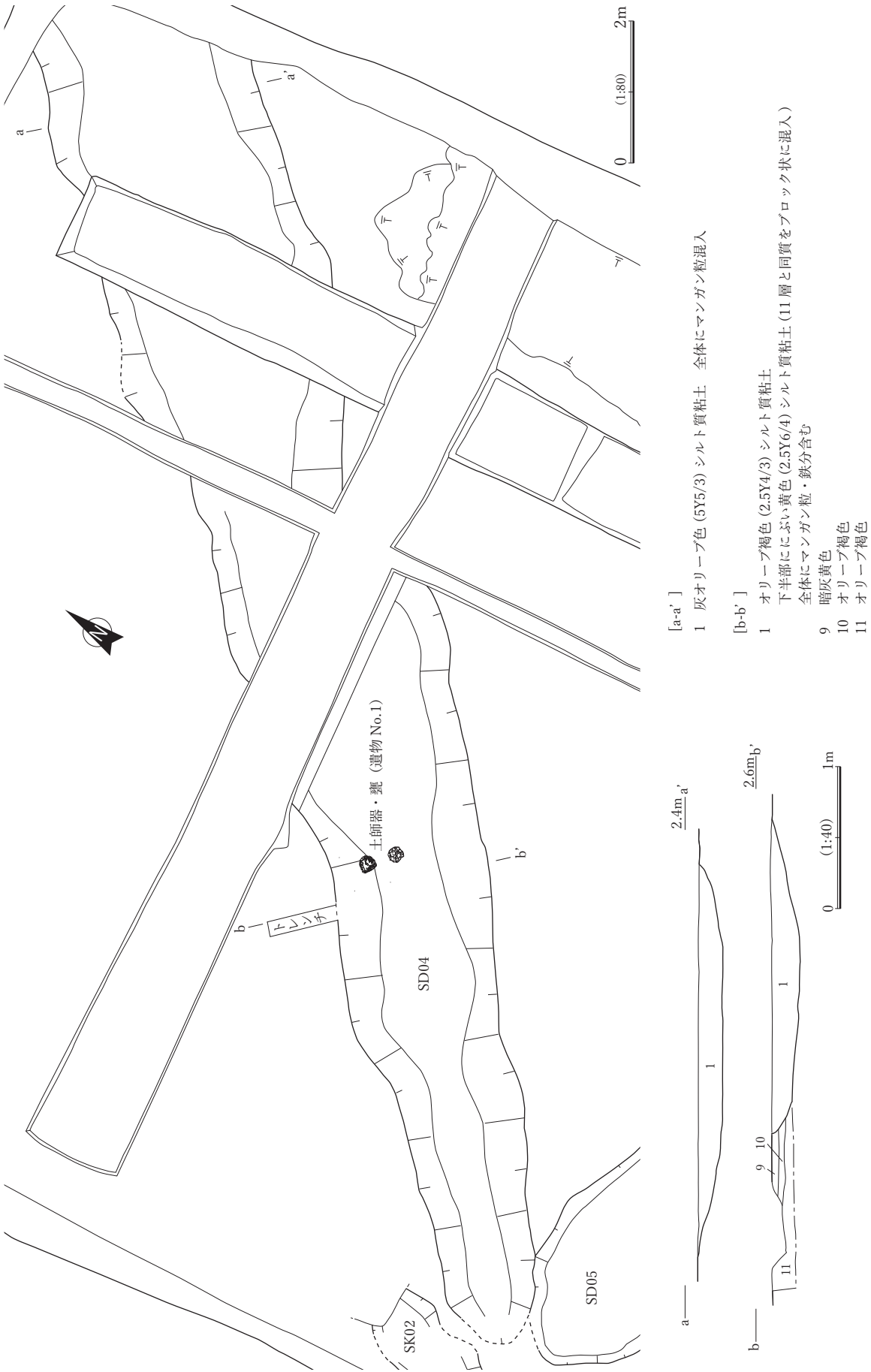


図 2-11 SD04

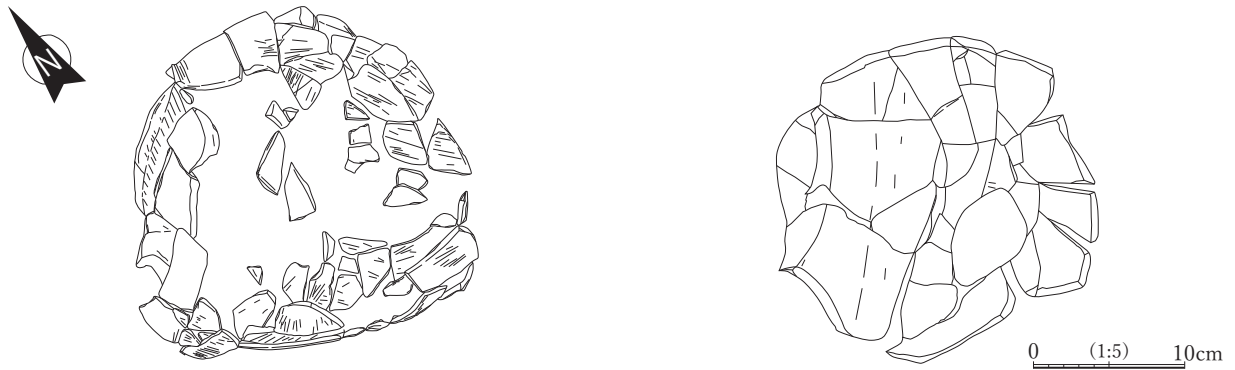


図 2-12 土師器・甕出土状況

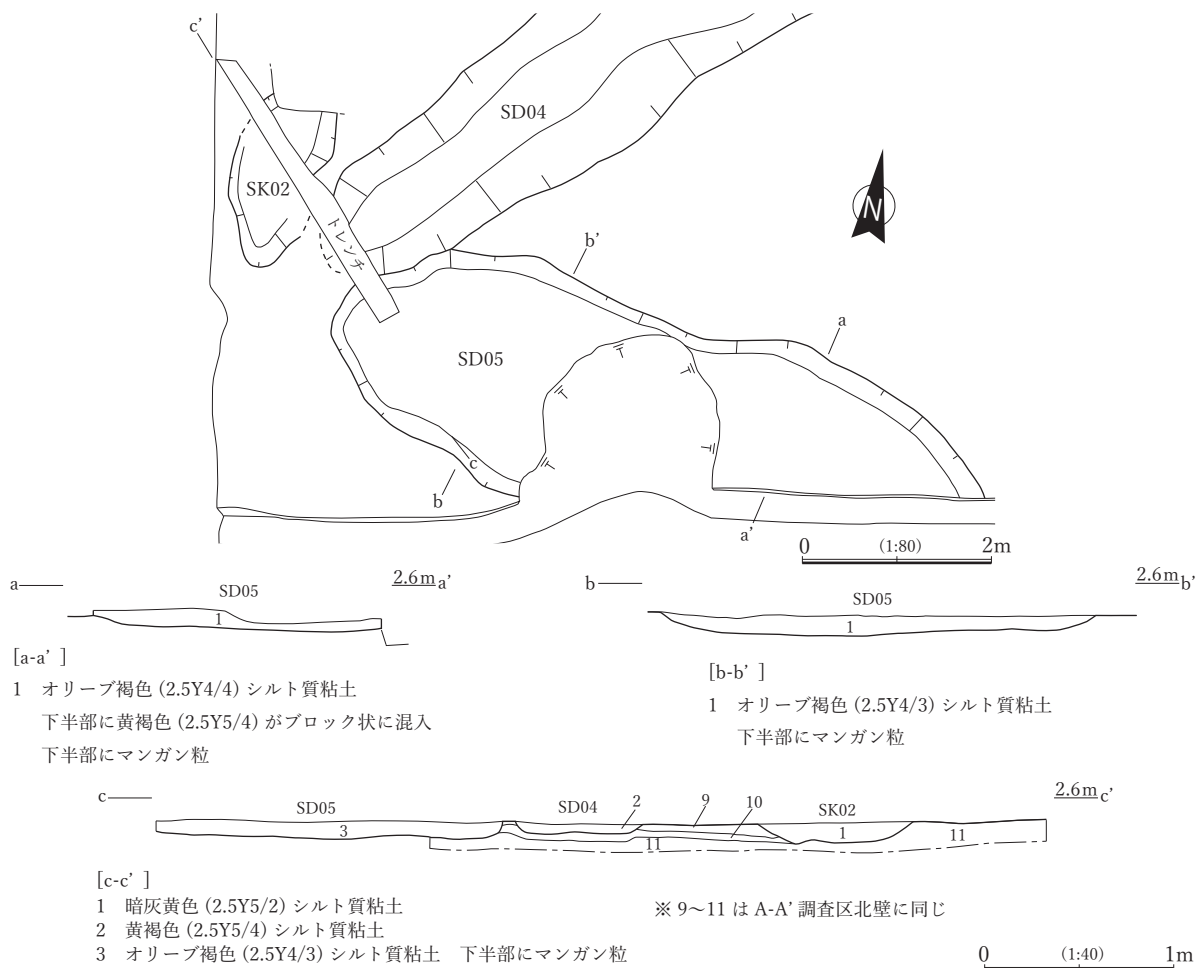


図 2-13 SK02・SD04・SD05

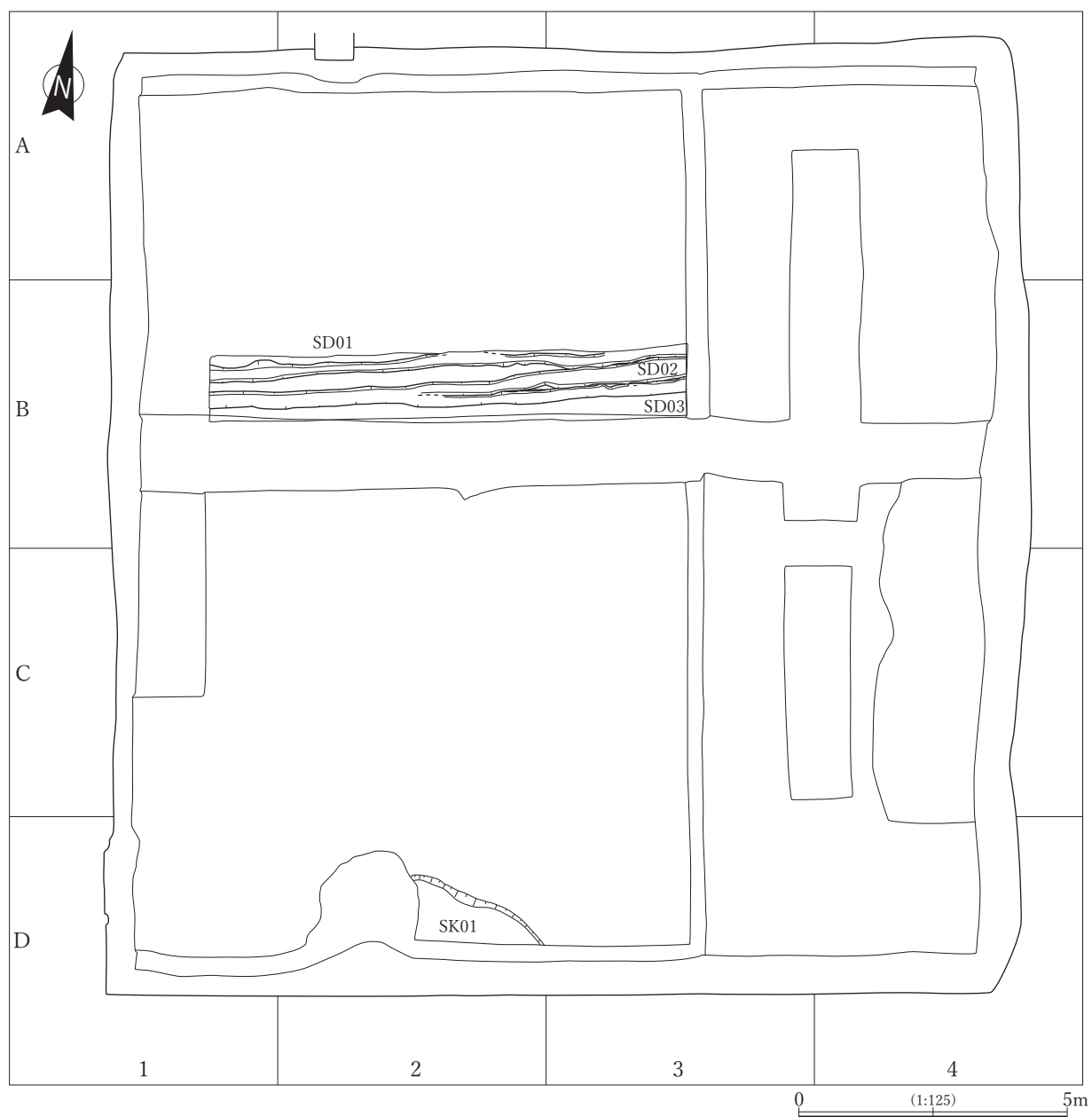


图 2-14 7 層上面遺構全体図

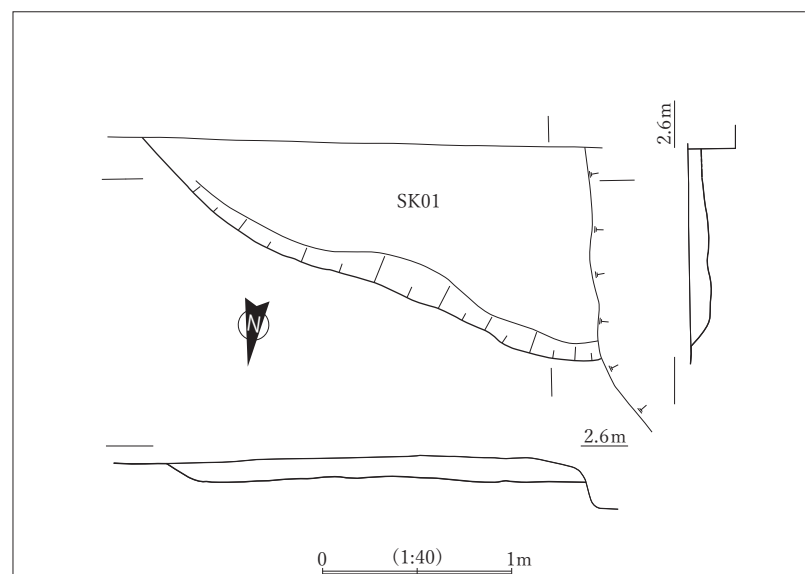
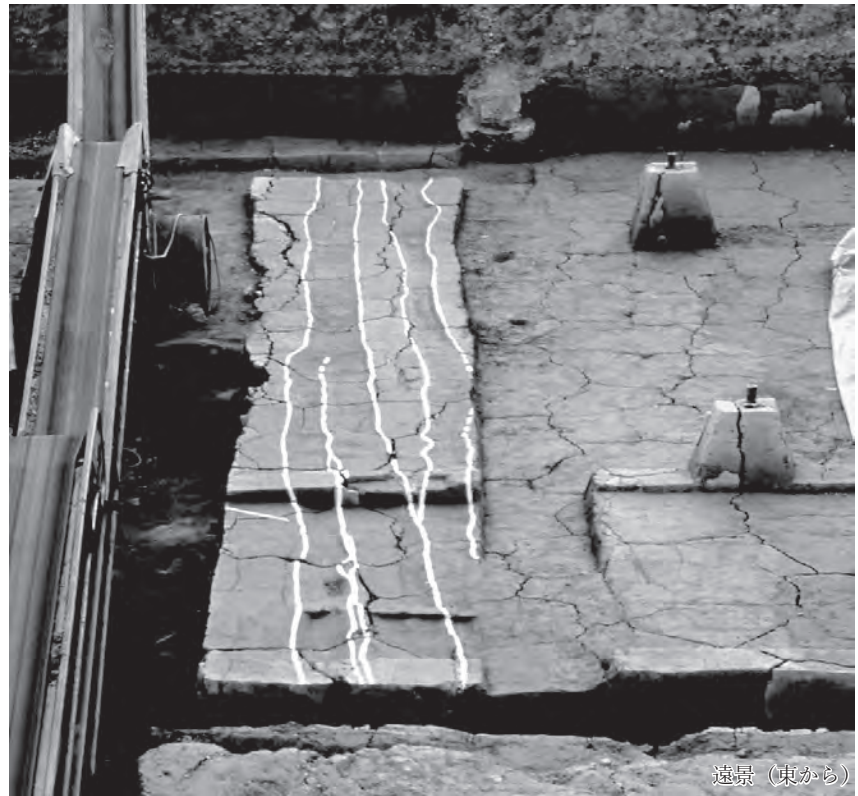
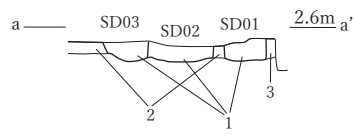


図 2-15 SD01・SD02・SD03・SK01



图 2-16 5 層上面遺構全体図

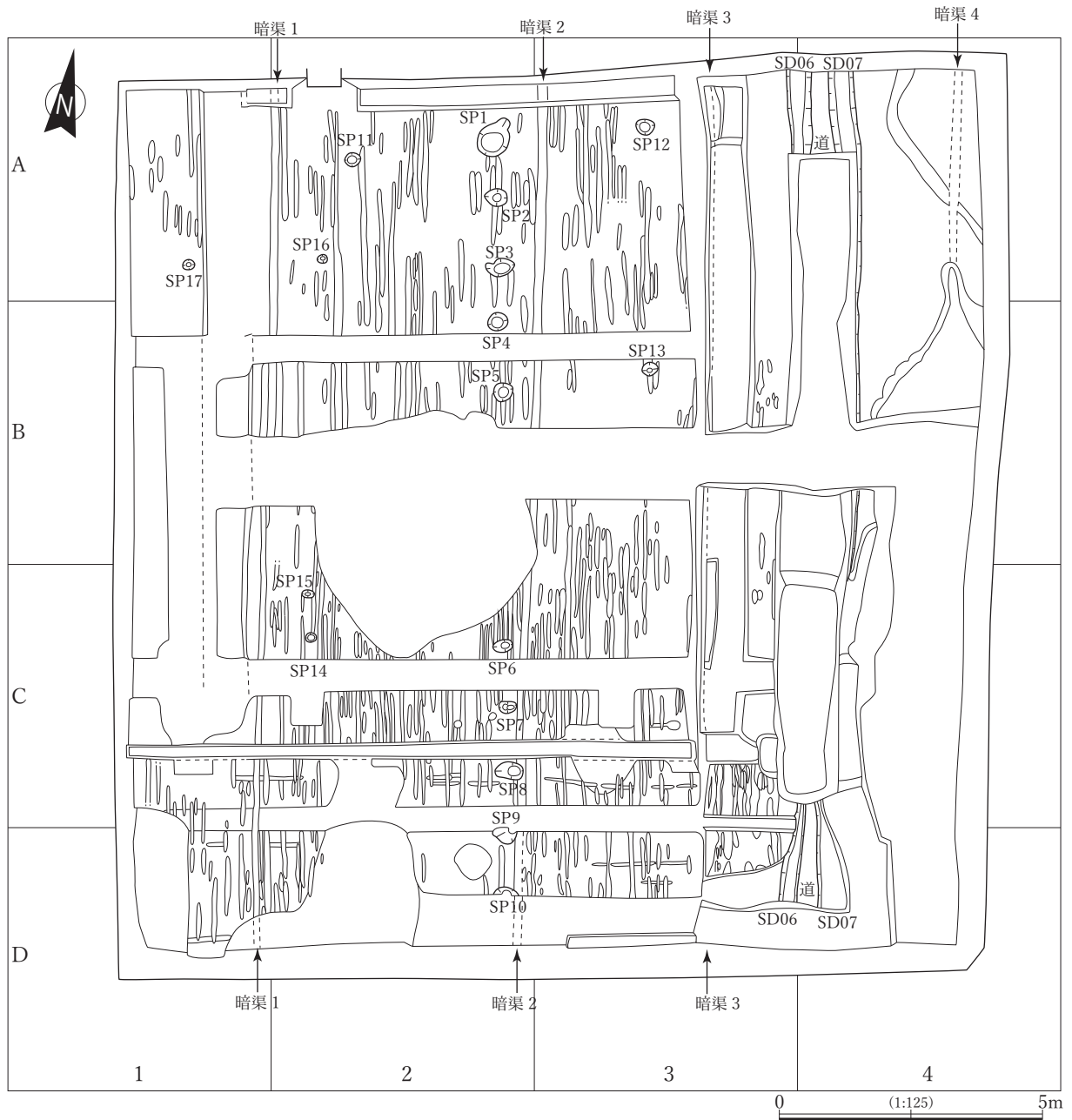


図 2-17 3 層上面遺構全体図

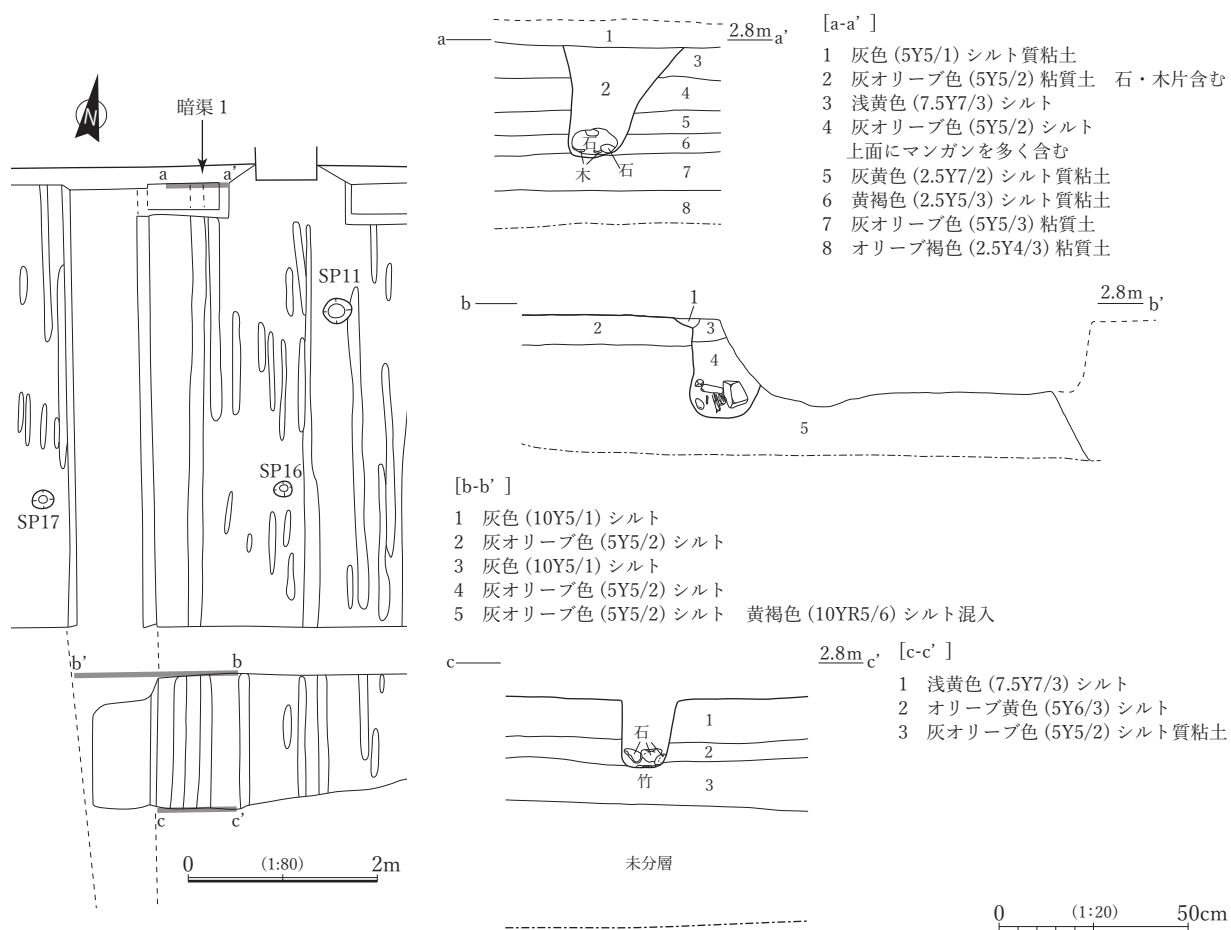


図 2-18 暗渠 1

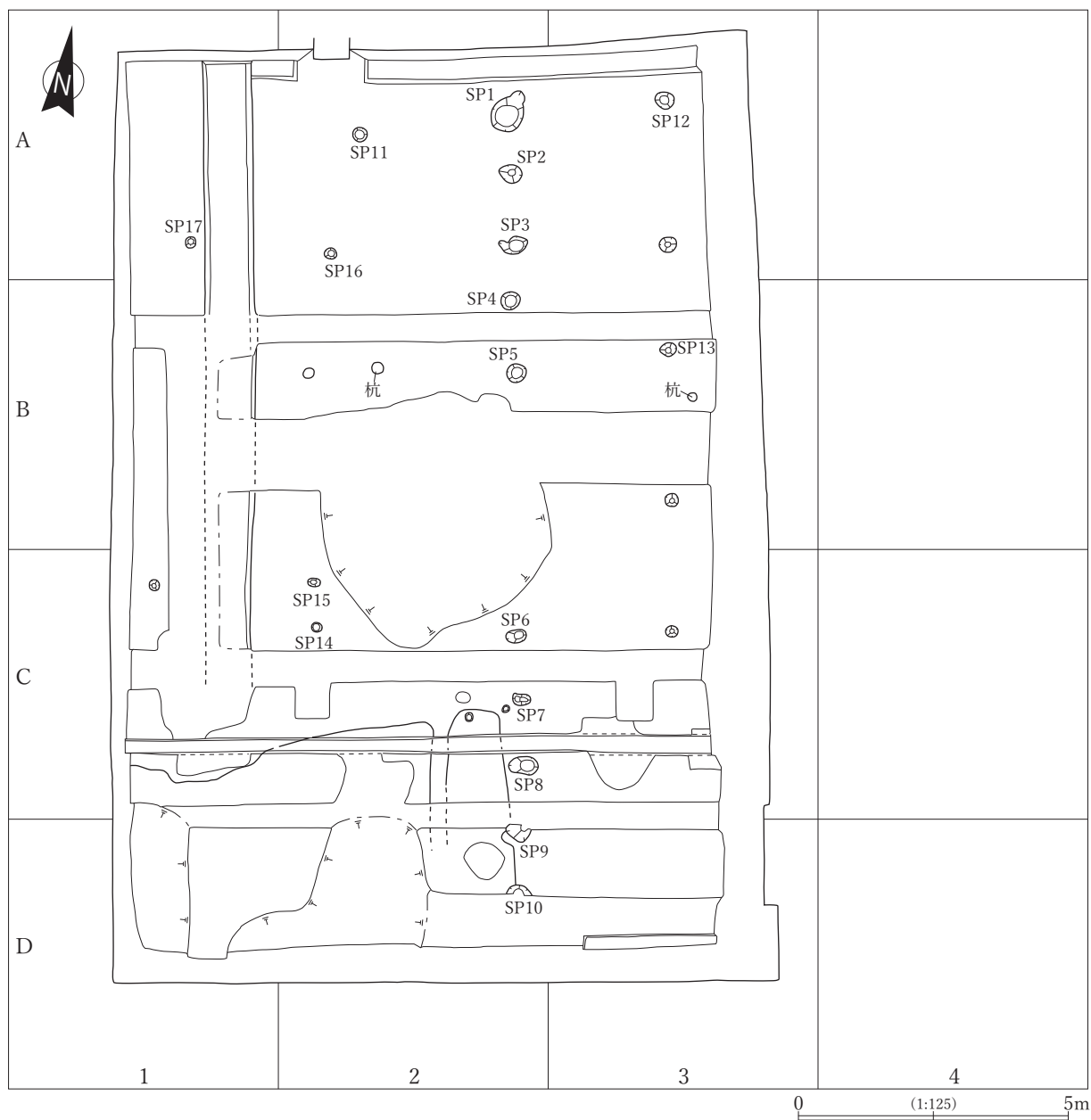


図 2-19 柱穴群

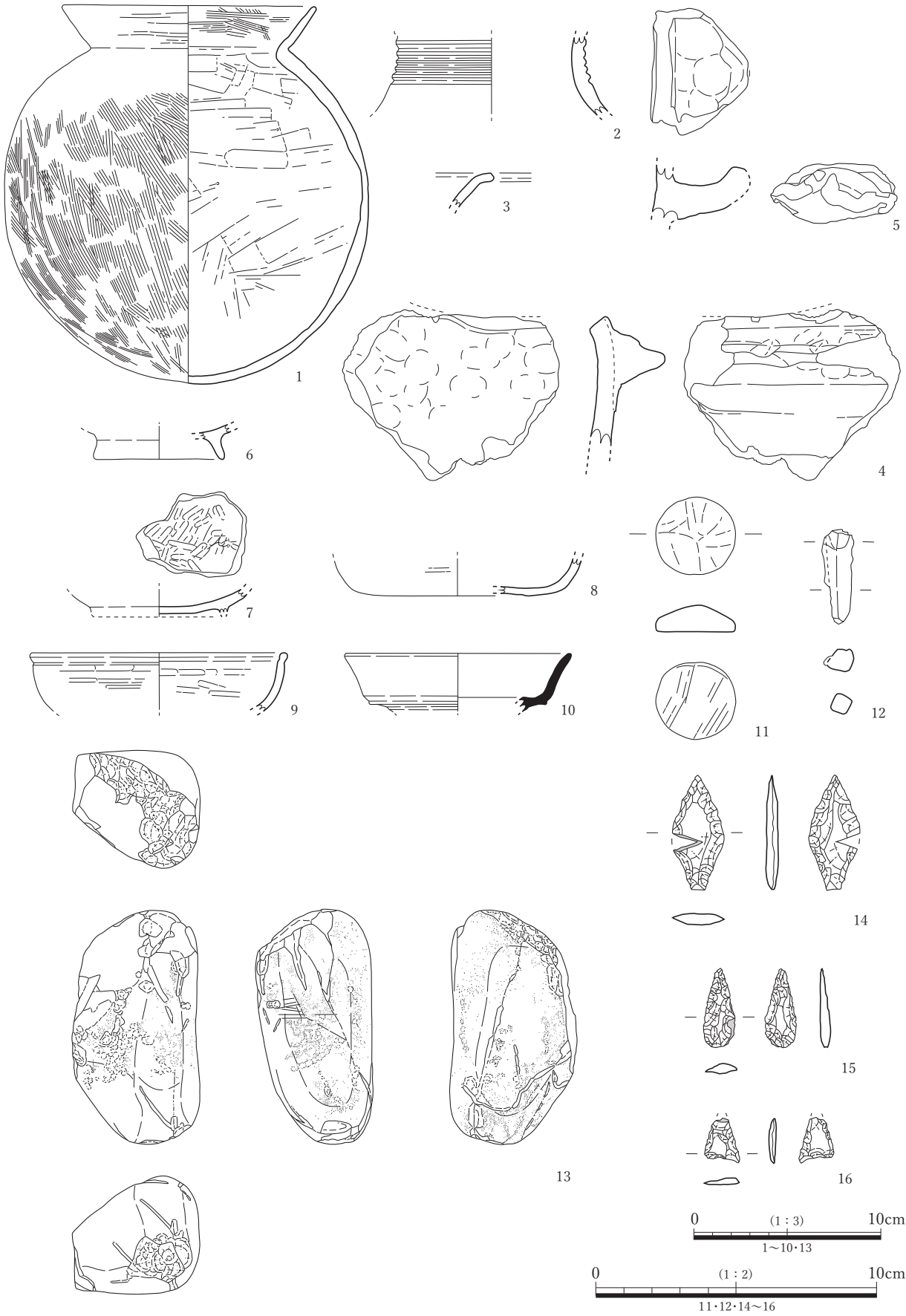


图 2-20 出土遺物

表 2-1 土器・土製品観察表

No.	地点	遺構・層位	種類・器種	法量 (cm)			文様・調整 (外/内)	色調 (外/内)	含有鉱物	時期	備考
				口径	底径	器高					
1	C-2	SD04	土師器・甕	(13.6)		20.2	口縁部ヨコナデ、上位剥離・風化、中・下位ハケメ/口縁部ハケメ・ナデ、上位～下位ケズリ・板ナデ・風化	7.5YR7/4にぶい橙色/10YR7/4にぶい黄橙色	石英	古墳前期前葉～中葉	外面中位スス付着
2	A-2	9～11層（黒褐色土層）	弥生土器・壺				6条沈線・風化/ナデ・風化・剥離	7.5YR7/4にぶい橙色/7.5YR6/3にぶい褐色	石英・黒色砂粒・金雲母	1 - 3・4 様式	
3	C・D-1 区西壁際	黒褐色土層	土師器・口縁部				ヨコナデ・風化/ナデ・風化	7.5YR7/4にぶい橙色/7.5YR7/4にぶい褐色	石英・金雲母		
4	C-3	7層（黒褐色土層）	土師器・羽釜				ヨコナデ・ユビオサエ・板ナデ/ユビオサエ	10YR8/3浅黄橙色/10YR8/3浅黄橙色	石英・黒色砂粒・金雲母	古代～中世	
5	C-3	7層	土師器・甗 or 大型鉢 取手				ユビオサエ・ナデ/風化	10YR8/4浅黄橙色/10YR8/2灰白色	石英・金雲母	古墳中期～古代	
6	C-3	7層	土師器・碗		(7.0)		ヨコナデ・風化/ヨコナデ・風化	5YR6/6橙色/10YR5/2灰黄褐色	金雲母	古代	
7	拡張区 B-3	7層	土師器・黒色土器		(7.2)		風化/ミガキ・ナデ	5YR6/6橙色/2.5Y3/1黒褐色	石英・金雲母	9世紀後半～10世紀後半	黒色土器A（内黒）
8	A-4	7層	土師器・碗		(11.4)		回転ナデ・ミガキ、底面ナデ・剥離/回転ナデ	7.5YR7/3にぶい橙色/7.5YR8/3浅黄褐色		中～近世？	
9	A-2	7層	土師器・碗	(13.6)			回転ナデ・ミガキ/回転ナデ・ミガキ	7.5YR7/3にぶい橙色/7.5YR8/4浅黄褐色	石英	近世？	
10	C-1	7層	須恵器・はそう	(12.1)			回転ナデ・風化/回転ナデ・風化	N8/灰白色/N7/灰白色	金雲母	古代	
11	C-1	7層	土製品・円盤形土製品	(最大長) 2.8	(最大幅) 2.85	(最大厚) 0.9	ナデ/ハケメ・ナデ	5Y6/1灰色/5Y6/1灰色	金雲母		

表 2-2 石器・金属製品観察表

No.	地点	遺構・層位	種類	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材・材質
12	D-3	SD06	金属製品	釘	(3.4)	(1.1)	(0.8)	4.09	鉄
13	D-1	8～9層	石器	敲石	12.5	(6.8)	6.3	749.9	砂岩
14	A-4	9～10層	石器	打製石鏃	4.1	(1.8)	0.4	3.05	サヌカイト
15	D-1	8層	石器	打製石鏃	(2.8)	(1.2)	0.4	0.93	サヌカイト
16	C-1	灰オリーブシルト質粘土	石器	打製石鏃	(1.6)	1.3	0.3	0.49	サヌカイト

第3章 2016年度立会調査（基幹環境整備地点・駐車整理部地点）

第1節 調査にいたる経緯

1. 調査にいたる経緯

2016年度、蔵本キャンパスの南東部に位置する地点で、基幹環境整備工事および、駐車整理部事務所建設工事が実施されることとなった（以下、それぞれの調査地点を基幹環境整備地点、駐車整理部地点と呼称する）。それ以前に、調査予定地の周辺に位置する第13・15・20・22次調査地点では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されており、これらに関する遺構・遺物が予定地の範囲まで広がっている可能性を想定しえた。しかし、掘削範囲が狭小との認識から、立会で対応することとなった。立会は調査員3名により実施し、調査面積は220 m²（基幹環境整備地点152 m²，駐車整理部地点68 m²），調査期間は基幹環境整備地点が2016年6月3～17日，駐車整理部地点が同年8月9日～9月17日であった（図3-1）。本章では工事掘削時に作成しえた掘削範囲・土層断面の記録，収集された遺物を報告する。

2. 調査の体制

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）

調査員 端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈

調査補助員 岸本多美子，久米淑子，中原尚子，板東美幸，前田千夏，山本愛子（施設マネジメント部・技術補佐員）

第2節 調査の記録

1. 層序

【基幹環境整備地点】（図3-2）

調査区北壁の9か所で、土層の観察・記録を実施した。これにもとづいて、本地点の層序を以下，詳述する。

1層：黄灰色（2.5Y5/1）シルト質粘土。上面の標高は約2.75 m，厚さは約10 cmを測る。

2層：褐灰色（7.5YR4/1）砂質土。上面の標高は2.60～2.80 m，厚さは10～25 cmを測る。

3層：にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土。上面の標高は2.50～2.75 m，厚さは25～40 cmを測る。

4層：明黄褐色（2.5Y7/6）細砂。上面の標高は2.40～2.45 m，厚さは約20 cmを測る。

5層：灰色（5Y6/1）粘土。上面の標高は約2.20 mを測る。

以上の層と遺跡全体の基本層序との関係については，1層がV層（弥生時代前期中葉～末の洪水起源砂層），2層がVI層（縄文時代晩期末～弥生時代前期前葉の土壌化層）にそれぞれ対応するものと考えられる。

【駐車整理部地点】（図3-3）

調査区東壁の1か所(A-A')で、土層の観察・記録を実施した。これにもとづいて、本地点の層序を以下，

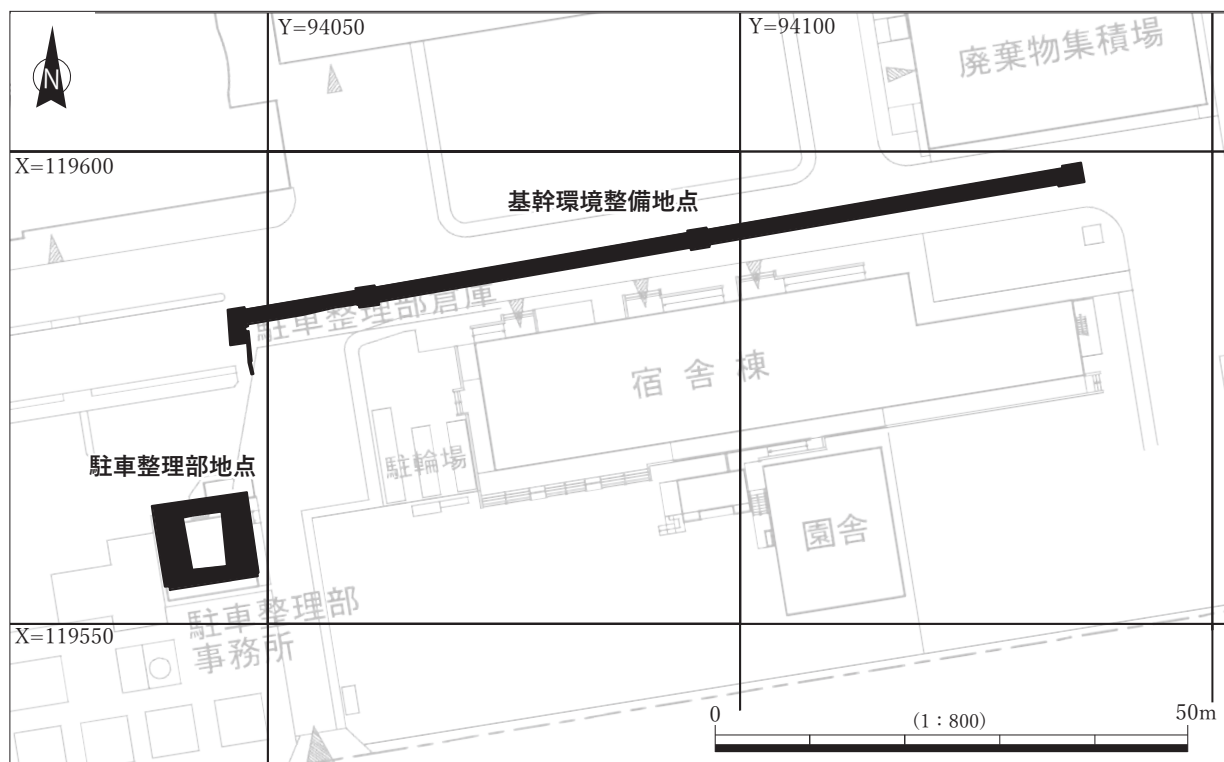


図 3-1 調査地点の位置

詳述する。

1層：緑灰色（10G5/1）シルト。上面の標高は 3.00 ～ 3.10 m，厚さは 10 ～ 20 cmを測る。

3層：灰オリーブ色（5Y6/2）シルト。上面の標高は 2.90 ～ 2.95 m，厚さは 10 ～ 20 cmを測る。

6層：黄褐色（2.5Y5/4）シルト。上面の標高は 2.70 ～ 2.80 m，厚さは 5 ～ 20 cmを測る。

7層：黄灰色（2.5Y5/1）シルト質粘土。上面の標高は 2.50 ～ 2.75 m，厚さは 15 ～ 25 cmを測る。

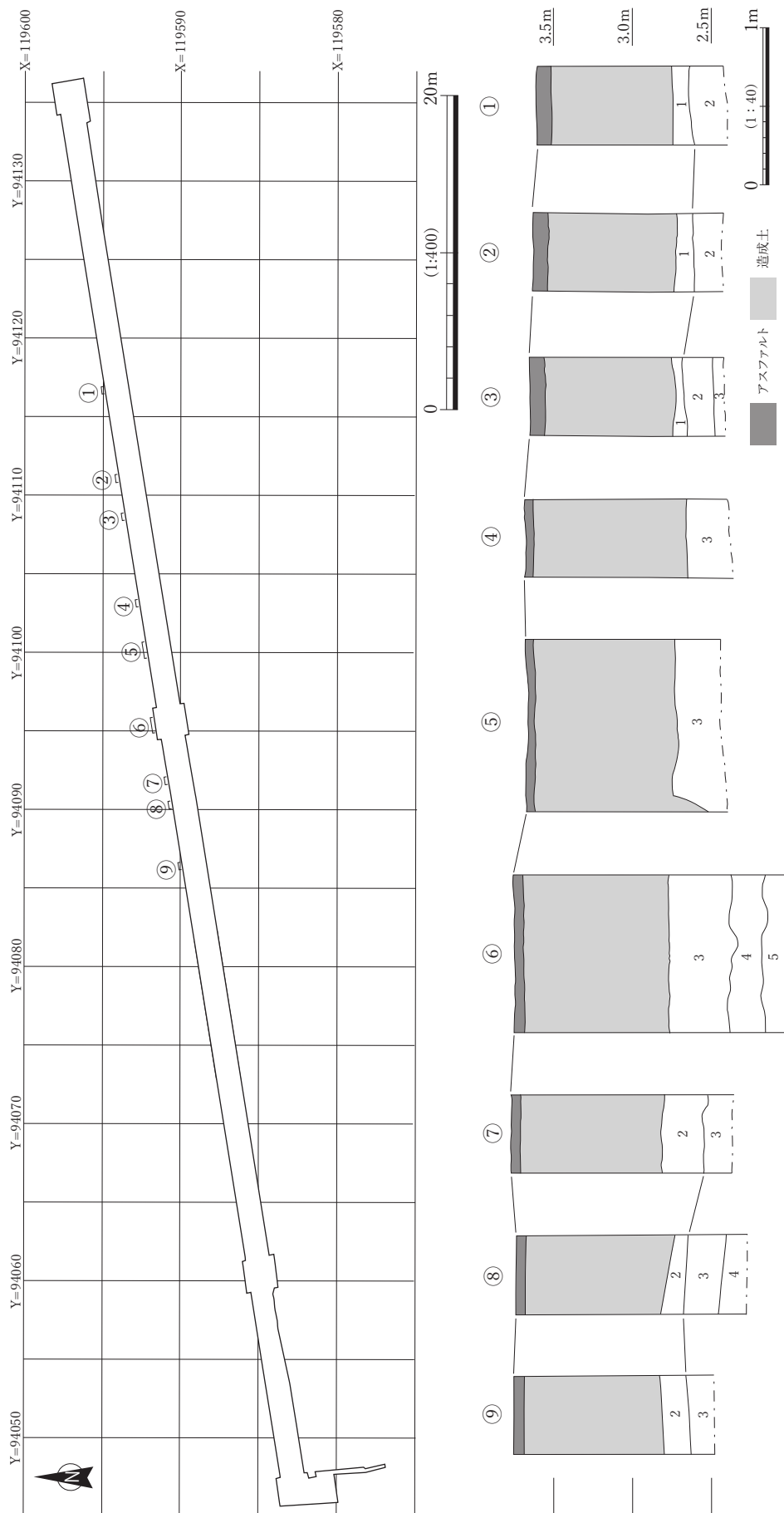
8層：橙色（7.5YR7/6）粘質土。上面の標高は 2.45 ～ 2.60 mを測る。

以上の層と遺跡全体の基本層序との関係については，6層がV層（弥生時代前期中葉～末の洪水起源砂層），7層がVI層（縄文時代晩期末～弥生時代前期前葉の土壌化層）にそれぞれ対応するものと考えられる。

2. 遺物（図 3-4 ～ 3-8，表 3-1・3-2，図版 11 ～ 14）

駐車整理部地点で収集した弥生土器と石器類を以下，報告する。

弥生土器は壺・甕などからなり，時期はI様式の幅に収まる。3はI-1（新）ないし2様式に該当する甕の口縁部片で，口縁部の下に1条の沈線と削出突帯を施す。11はI-1（新）ないし2様式に該当する壺の肩部片で，頸胴部界に4条の沈線を施す。12はI-4様式に該当する甕の胴部片で，3条の沈線と刺突文を施す。13はI-3・4様式に該当する壺の小片で，貼付突帯をもつ。21はI-3・4様式に該当する小片で，貼付突帯をもつ。30～32はI-1（新）・2様式に該当する大型壺で，口頸部界に3条以上の沈線，胴部に4～5条の沈線を施す。37はI-3・4様式に該当する壺の頸部片で，5条の沈線を施す。38はI-1（新）・2様式に該当する壺の頸胴部片で，4条の沈線を施す。43



【柱状土層断面①～⑨】

- 1 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト質粘土 黄褐色 (10YR5/6) シルトが混入 遺物含まない
- 2 褐灰色 (7.5YR4/1) 砂質土 径5mm橙色 (5YR6/6) シルト粒を含む 土器細片を多く含む
- 3 にぶい、黄褐色 (10YR5/4) 砂質土 オリーブ灰色 (2.5GY5/1) シルト、にぶい、赤褐色 (2.5YR5/4) シルト粒を含む 土器片ほとんど含まない
- 4 明黄褐色 (2.5Y7/6) 細砂 径5mm灰黄褐色 (10YR5/2) シルトをブロック状に含む 一部縦溝状にグライ化 遺物含まない
- 5 灰色 (5Y6/1) 粘土 遺物含まない

図 3-2 基幹環境整備地点土層断面

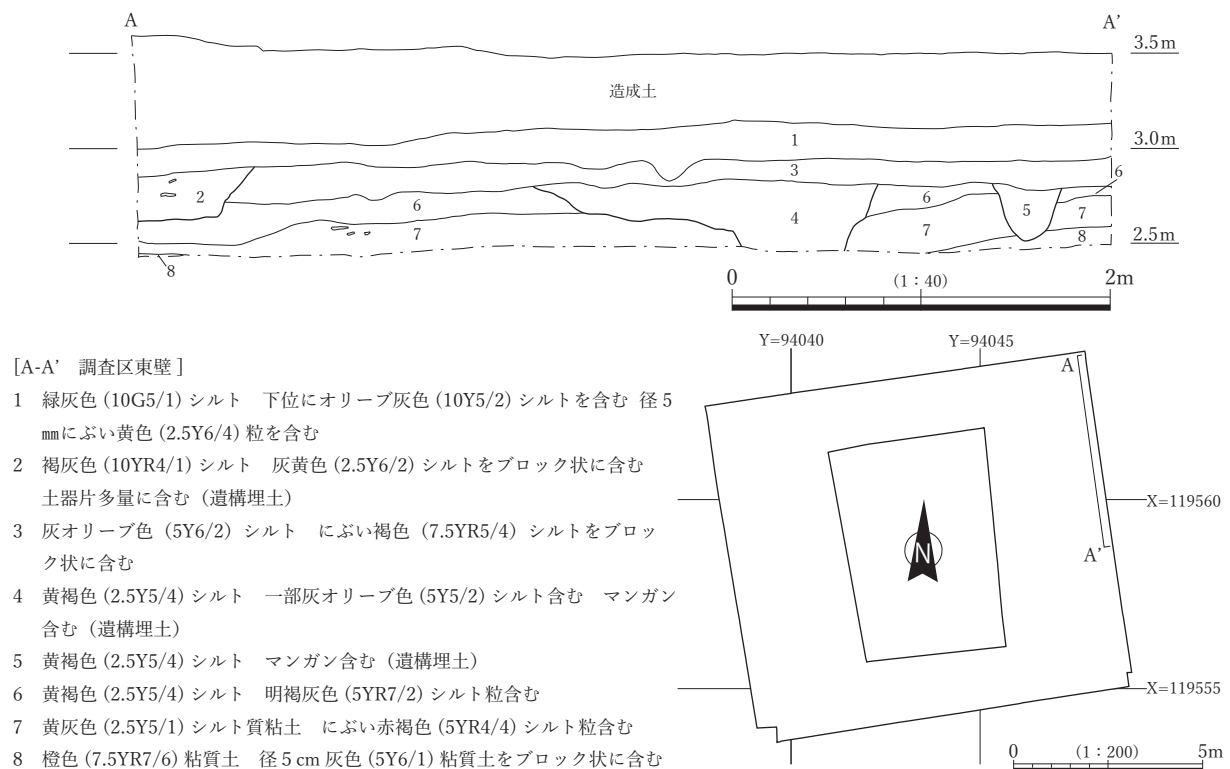


図 3-3 駐車整理部地点土層断面

は I-1 (古) 様式に該当する甕の口縁部片で、口縁端部に刻目、口縁部に突帯文をもつ。44 は I-3・4 様式に該当する壺の口縁部片で、口縁端部に沈線、口縁部に 4 条の沈線を施す。47 は I-3・4 様式に該当する小片で、2 条沈線と 3 条沈線の間に連続爪形文を施す。48 は I-1 様式に該当する壺の胴部片で、上下 2 組の 1 条沈線の間に山形文を施す。50 は I-1 (新)・2 様式に該当する壺の胴部片で、3 条の沈線と木葉文を施す。

石器類は敲石・磨石・粗製剥片石器・棒形石器などからなる。59 は珪質片岩製の敲石である。60 は硬質砂岩製の磨石で、赤色顔料が付着している。61 は用途不明石器で、頁岩製である。62～66・68・71～73 は剥片で、石質はチャート・石英・サヌカイトからなる。67 は硬質砂岩製の敲石である。69 は緑色片岩製の粗製剥片石器である。70 は頁岩製の棒形石器で、用途は不明である。

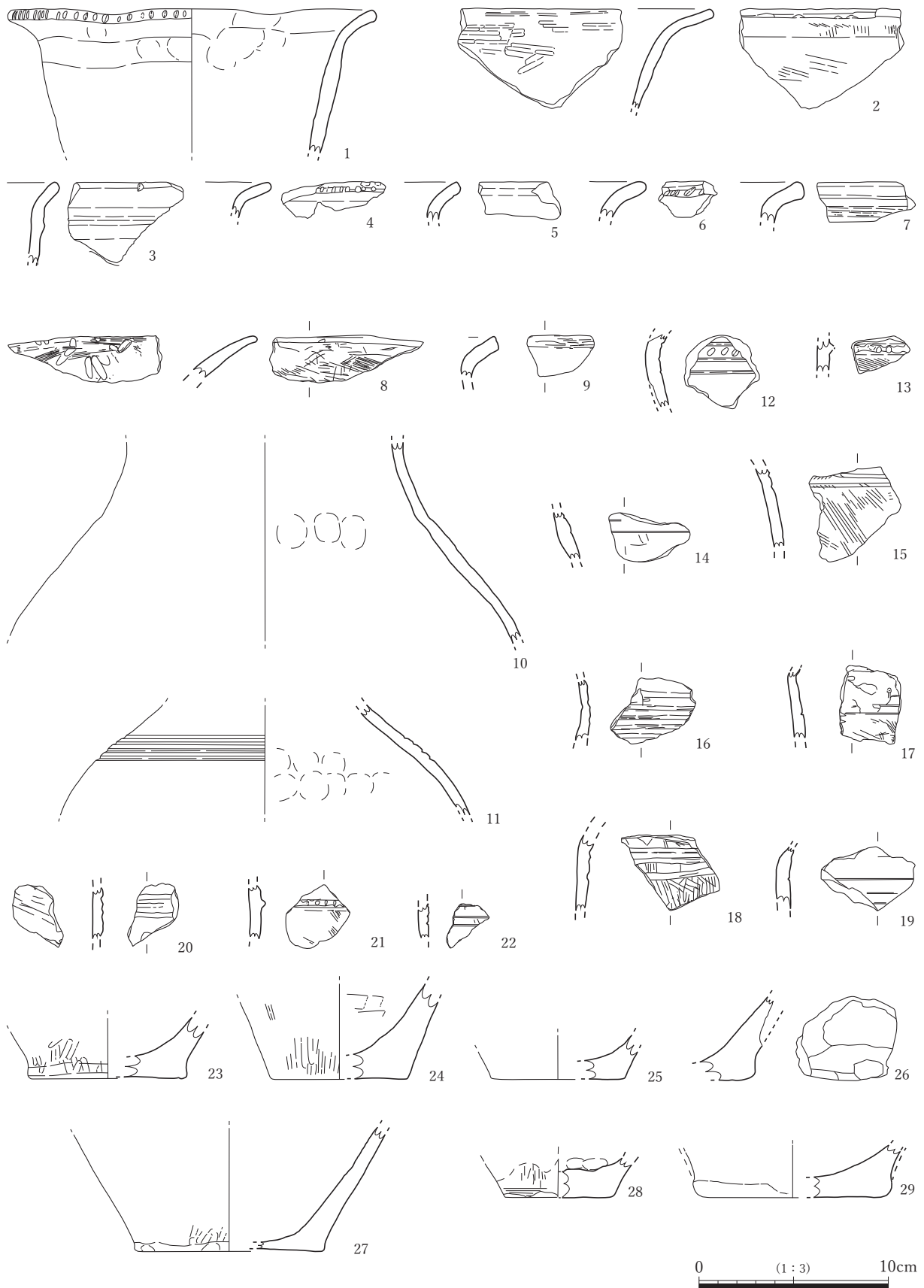


図 3-4 出土遺物 (1)

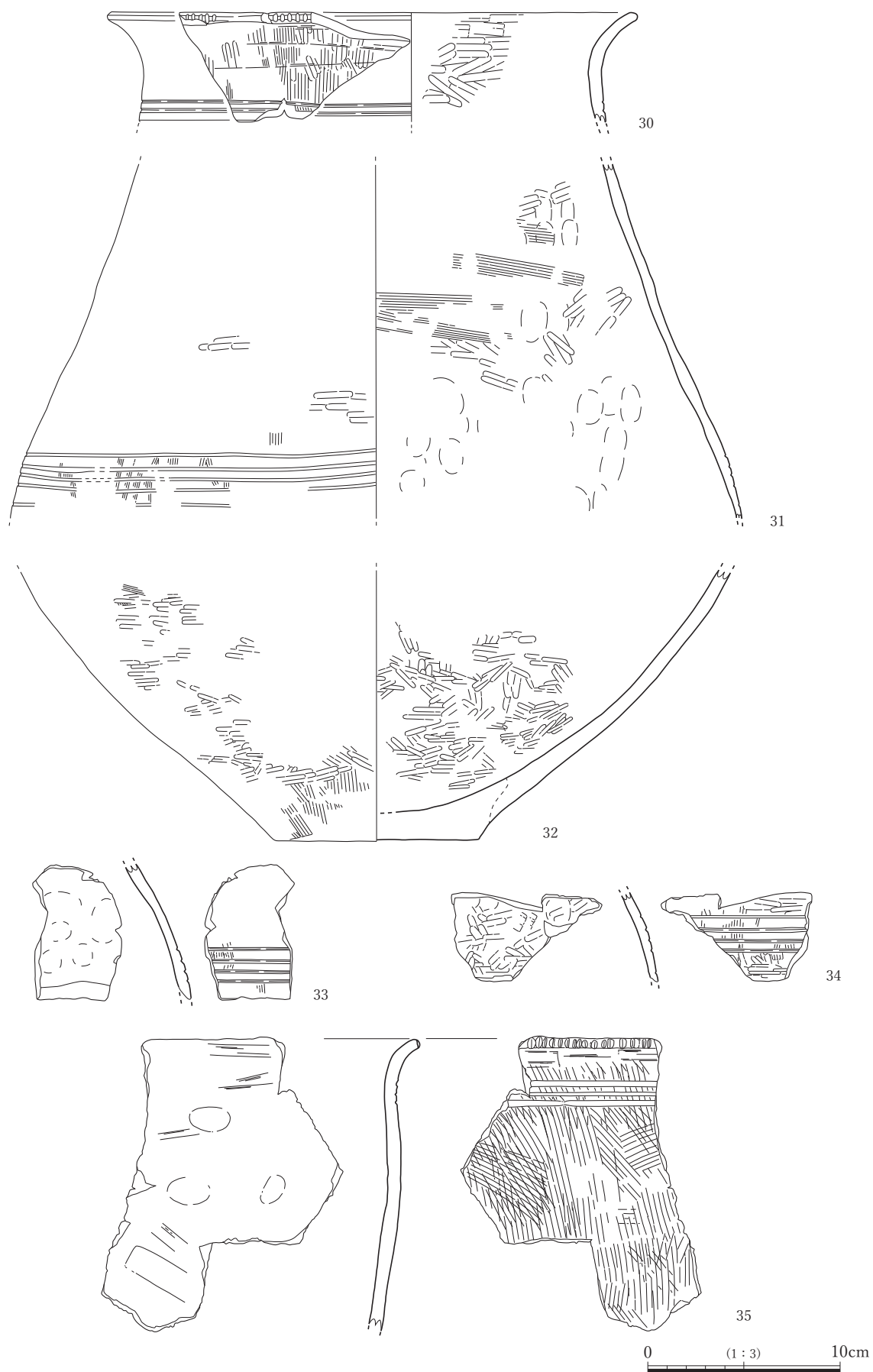


图 3-5 出土遺物 (2)

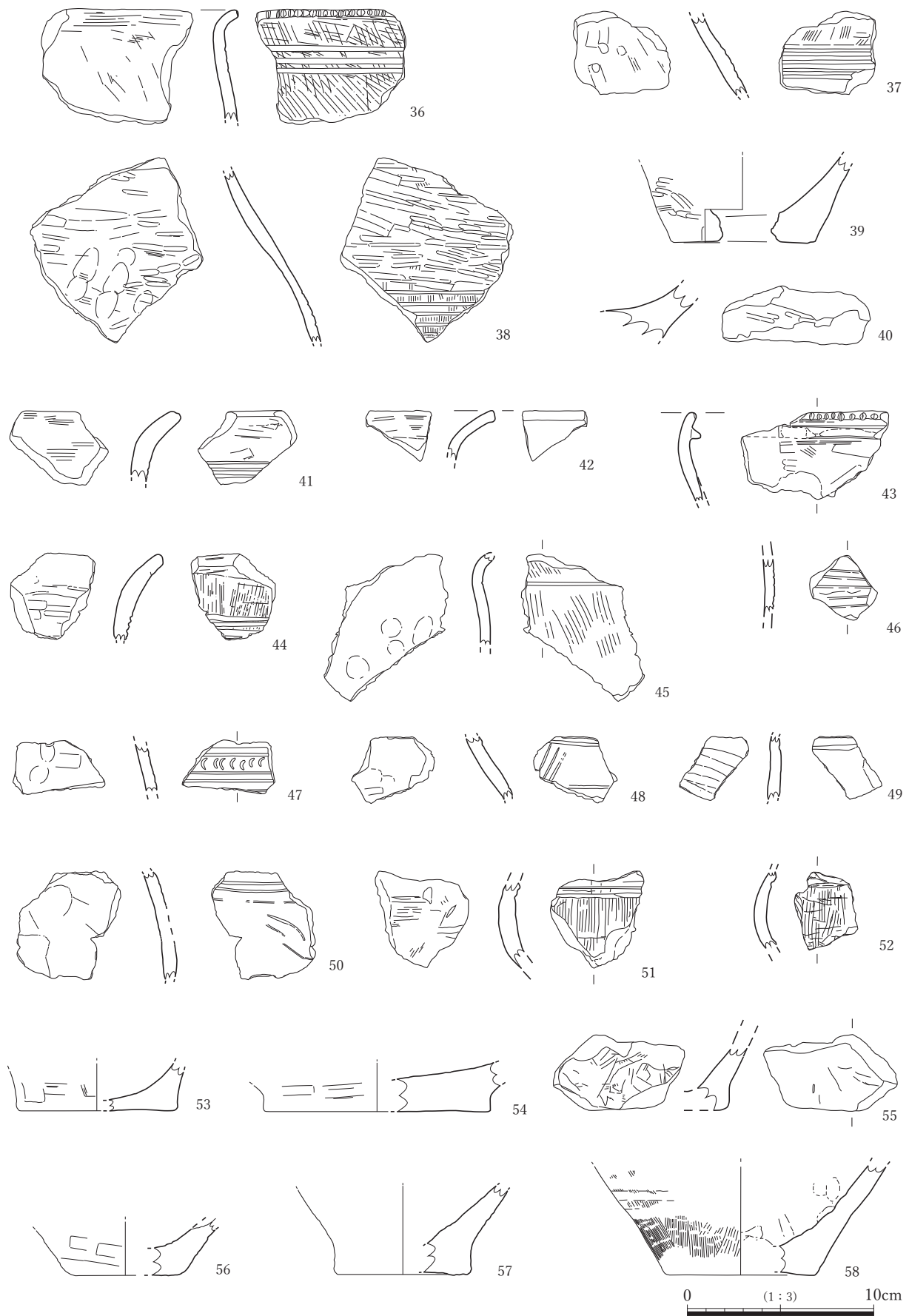


図 3-6 出土遺物 (3)

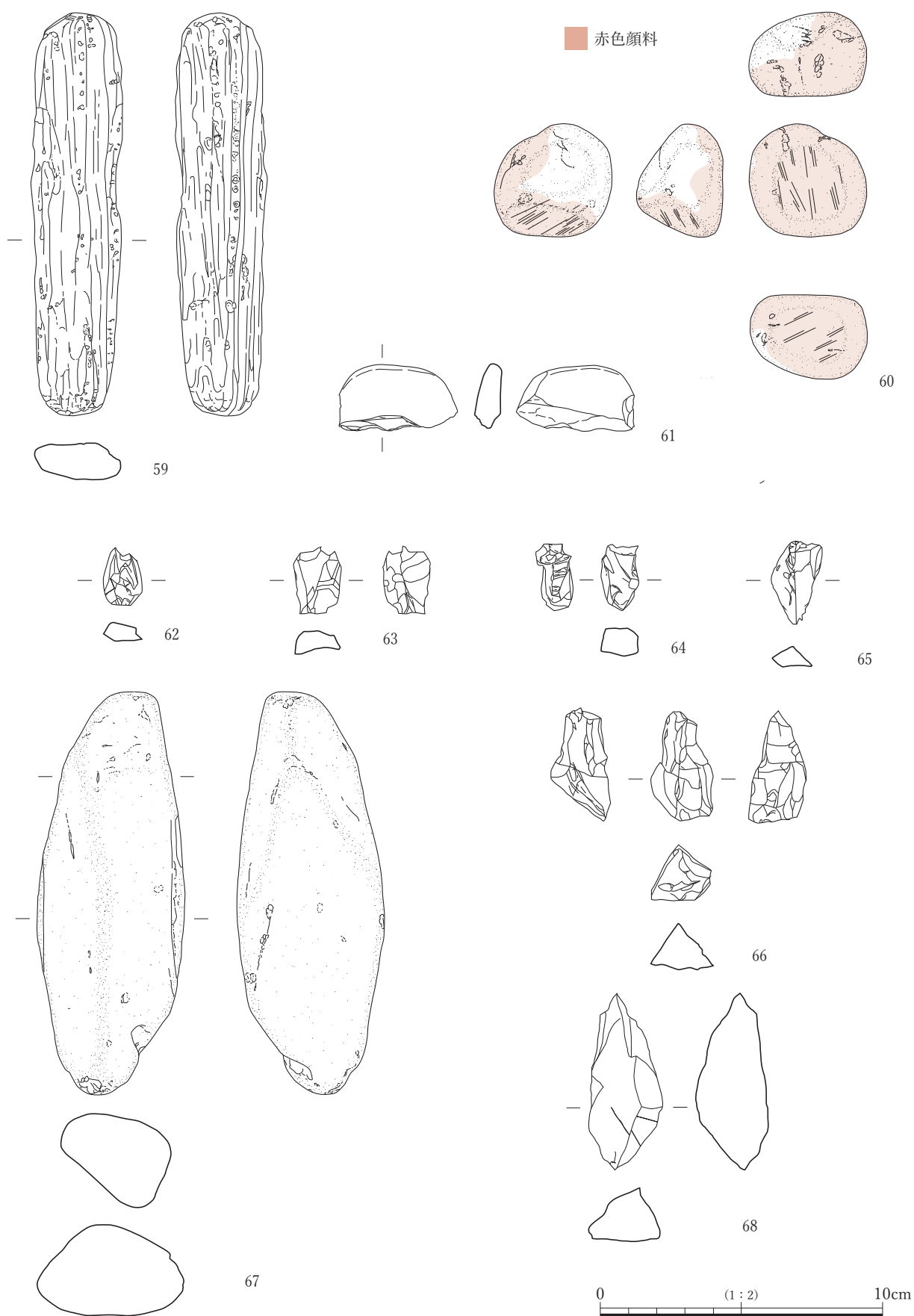


图 3-7 出土遺物 (4)

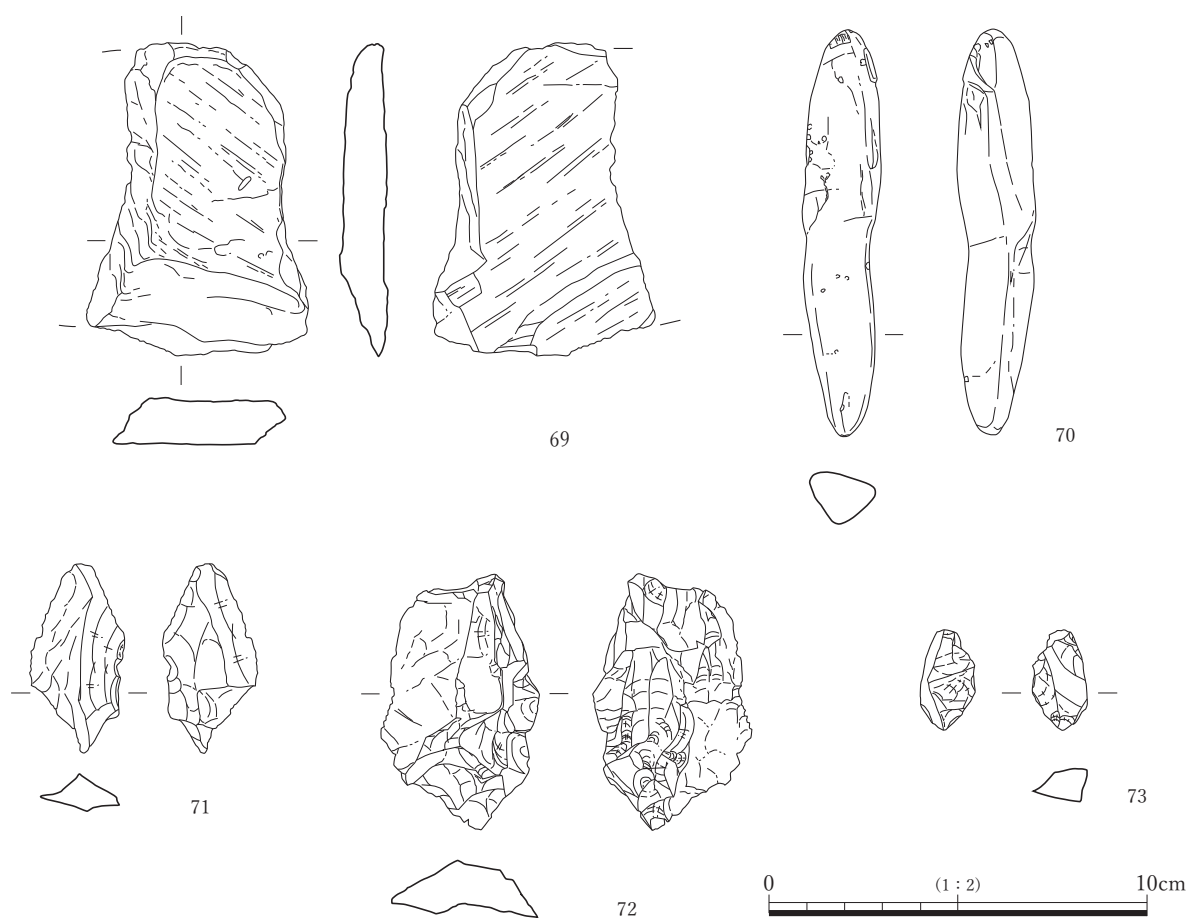


図3-8 出土遺物 (5)

表 3-1 土器観察表

No.	種類・器種	法量 (cm)			文様・調整 (外/内)	色調 (外/内)	含有鉱物等	時期	備考
		口径	底径	器高					
1	弥生土器・甕	(19.4)			口縁端部刻目・頸部～胴部ユビオサエ・ナデ／ユビオサエ	橙色5YR6/6／橙色5YR6/6	石英・長石・黒色砂粒	I	
2	弥生土器・鉢?				ハケメ・風化／ハケメ・ミガキ・風化	にぶい橙色5YR6/4／にぶい橙色5YR6/4	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I	
3	弥生土器・甕				口縁端部刻目・頸部～胴部沈線1条・削出突帯／	橙色5YR6/6／橙色5YR6/6	長石・黒色砂粒	I - 1 (新)・2	
4	弥生土器・甕				口縁端部刻目・ナデ・風化／ナデ・風化	明褐色7.5YR7/2／にぶい橙色7.5YR7/3	石英・黒色砂粒	I	
5	弥生土器・口縁部				ナデ・風化／風化	にぶい黄褐色10YR6/3／にぶい黄褐色10YR7/2	石英・黒色砂粒・金雲母	I	
6	弥生土器・甕				口縁端部刻目・ナデ／ナデ・風化	にぶい橙色5YR6/4／灰褐色7.5YR6/2	石英・黒色砂粒・金雲母	I	
7	弥生土器・口縁部				ヨコナデ・ハケメ／ナデ・風化	にぶい褐色7.5YR5/3／にぶい褐色7.5YR7/4	石英・結晶片岩		
8	弥生土器・壺				ハケメ・ナデ／ミガキ・ナデ	にぶい橙色5YR6/4／褐色7.5YR4/1	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I - 1 (新)～4	
9	弥生土器・口縁部				ナデ／ナデ	橙色5YR6/6／橙色2.5YR6/8	石英・長石・黒色砂粒・金雲母		
10	弥生土器・壺				風化・剥離／ナデ・ユビオサエ・風化・剥離	にぶい橙色5YR6/4／にぶい褐色7.5YR7/3	石英・黒色砂粒	I	
11	弥生土器・壺				沈線4条・風化/ユビオサエ・風化	にぶい褐色7.5YR6/4／橙色7.5YR6/6	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I - 1 (新)・2	
12	弥生土器・甕				沈線3条・刺突文・風化／風化・剥離	にぶい褐色7.5YR6/4／にぶい褐色5YR6/4	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I - 4	
13	弥生土器・壺				貼付突帯・ハケメ／風化	にぶい赤褐色5YR5/3／褐色5YR6/6	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I - 3・4	
14	弥生土器				沈線2条～／不明	褐色5YR6/6／にぶい褐色7.5YR6/4	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I - 1 (新)～4	
15	弥生土器				沈線2条～・ハケメ・ナデ／ユビオサエ	にぶい褐色7.5YR6/4／にぶい褐色7.5YR6/4	長石・黒色砂粒	I - 1 (新)～4	
16	弥生土器				沈線4条～・ハケメ・ナデ／ナデ	褐色5YR6/6／にぶい赤褐色5YR5/3	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I - 1 (新)～4	
17	弥生土器・甕				沈線3条～・ハケメ・ナデ／ナデ	褐色5YR6/6／明赤褐色5YR5/6	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I - 1 (新)～4	
18	弥生土器・甕				沈線3条・ハケメ・ナデ／ナデ	にぶい褐色7.5YR6/3／にぶい褐色5YR6/4	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I - 1 (新)～4	

No.	種類・器種	法量 (cm)			文様・調整 (外/内)	色調 (外/内)	含有鉱物等	時期	備考
		口径	底径	器高					
19	弥生土器				沈線3条～・ナデ／ナデ	にぶい褐色 7.5YR6/3／明赤褐色 2.5YR5/6	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I-1(新)～4	
20	弥生土器				沈線3条～・ナデ／ナデ	にぶい橙色 7.5YR7/4／にぶい 橙色7.5YR7/3	石英・長石・黒色砂粒	I-1(新)～4	
21	弥生土器				貼付突帯・ハケメ・ナデ／ナデ	にぶい褐色 7.5YR5/4／橙色 7.5YR6/6	黒色砂粒・金雲母	I-3・4	
22	弥生土器				沈線3条～・ナデ／	にぶい橙色 7.5YR6/4／にぶい 褐色7.5YR6/3	石英・黒色砂粒	I-1(新)～4	
23	弥生土器・底部		(8.4)		ナデ・ミガキ・ユビオサエ／ナデ	灰褐色7.5YR6/2／ にぶい黄褐色 10YR7/2	石英・黒色砂粒・金雲母		
24	弥生土器・底部		(7.2)		ナデ・板ナデ／板ナデ・風化	灰黄褐色10YR6/2／ にぶい褐色 7.5YR6/3	石英・長石・黒色砂粒・金雲母		
25	弥生土器・底部		(7.1)		風化／風化	にぶい橙色5YR6/4／ 橙色5YR6/6	石英・長石・黒色砂粒・金雲母		
26	弥生土器・底部				風化／風化	にぶい褐色 7.5YR5/3／灰黄褐色 10YR5/2	長石・黒色砂粒・金雲母		
27	弥生土器・底部		10.0		板ナデ・ミガキ・風化／風化	灰褐色7.5YR6/2／ にぶい褐色 7.5YR7/3	石英・長石・黒色砂粒・金雲母		
28	弥生土器・底部		(5.8)		ハケメ・ナデ／ユビオサエ・ナデ	にぶい赤褐色 5YR5/4／明赤褐色 5YR5/6	石英・黒色砂粒・金雲母		
29	弥生土器・底部		(9.8)		剥離／不明	明赤褐色5YR5/6／ 灰色5Y6/1と褐灰色 10YR4/1が半々	石英・長石・黒色砂粒・金雲母		摩耗激しい
30	弥生土器・壺	(27.6)			口縁端部刻目・沈線3条～・ハケメ・ミガキ・板ナデ／ミガキ・板ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/4／にぶい 褐色7.5YR7/3	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I-1(新)・2	30～32同一個体
31	弥生土器・壺				沈線4～5条・ミガキ・ハケメ・風化／ミガキ・ハケメ・ユビオサエ・風化	にぶい褐色 7.5YR7/3／にぶい 黄褐色10YR7/3	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I-1(新)・2	30～32同一個体
32	弥生土器・壺		10.5		ミガキ・ハケメ／ミガキ	にぶい褐色 7.5YR7/4／にぶい 黄褐色10YR7/3	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I-1(新)・2	30～32同一個体
33	弥生土器・壺				沈線4条・ミガキ・風化／ユビオサエ・風化	にぶい褐色 7.5YR7/4／にぶい 黄褐色10YR7/2	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I-1(新)～4	
34	弥生土器・壺				沈線4～5条・ミガキ・ハケメ／ミガキ・ユビオサエ・板ナデ・剥離	にぶい黄褐色 10YR7/3／にぶい 褐色10YR6/3	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I-1(新)～4	
35	弥生土器・甕				口縁端部刻目・口縁～胴部沈線3条・ハケメ・ナデ／ユビオサエ・ナデ	灰黄褐色10YR4/2／ にぶい褐色 7.5YR5/3	石英・黒色砂粒・金雲母	I-1(新)～4	

No.	種類・器種	法量 (cm)			文様・調整 (外/内)	色調 (外/内)	含有鉱物等	時期	備考
		口径	底径	器高					
36	弥生土器・甕				口縁端部刻目・口縁～胴部沈線3条・ハケメ／ハケメ・ナデ	にぶい褐色 7.5YR6/3／にぶい褐色7.5YR5/3	石英・黒色砂粒・金雲母	I - 1 (新) ~ 4	
37	弥生土器・壺				沈線5条・ハケメ・ナデ・ミガキ／ナデ	にぶい赤褐色 5YR5/4／にぶい橙色7.5YR6/4	石英・黒色砂粒・金雲母	I - 3・4	
38	弥生土器・壺				沈線4条・ハケメ・ナデ・ミガキ／ミガキ・ユビオサエ・ナデ	にぶい橙色5YR6/4／にぶい黄橙色10YR7/3	石英・黒色砂粒・金雲母	I - 1 (新)・2	
39	弥生土器・底部		7.7		ハケメ・ミガキ・ナデ／ハケメ・ナデ	にぶい橙色 7.5YR6/4／にぶい橙色7.5YR6/4	石英・長石・黒色砂粒・金雲母		摩耗激しい
40	弥生土器・底部				ミガキ・風化／板ナデ	にぶい橙色5YR6/4／にぶい橙色7.5YR7/4	石英・黒色砂粒・金雲母		
41	弥生土器・口縁部				口縁端部ごく浅い沈線・口縁部沈線3条・ヨコナデ／ハケメ	にぶい橙色 7.5YR6/4／にぶい橙色5YR6/4	石英・黒色砂粒・金雲母	I - 1 (新) ~ 4	
42	弥生土器・口縁部				ナデ／ハケメ	橙色5YR6/6／橙色5YR6/6	石英・長石・黒色砂粒・金雲母		摩耗激しい
43	弥生土器・甕				口縁端部刻目・口縁部突帯文・ナデ・ミガキ／ナデ	灰黄褐色10YR6/2／にぶい黄橙色10YR7/3	石英・黒色砂粒	I - 1 (古)	突帯文欠損激しい
44	弥生土器・壺				口縁端部沈線・口縁部沈線4条・ハケメ・ナデ／ミガキ・ナデ	にぶい赤褐色 5YR5/3／灰褐色7.5YR4/2	石英・黒色砂粒・金雲母	I - 3・4	
45	弥生土器・甕				沈線1条・ハケメ／ユビオサエ・ナデ	にぶい橙色 7.5YR7/4／橙色5YR6/6	石英・黒色砂粒	I - 1 (新) ~ 4	摩耗激しい
46	弥生土器				沈線5条・ナデ／ナデ	橙色5YR6/6／橙色5YR6/6	石英・黒色砂粒・金雲母	I - 2 ~ 4	
47	弥生土器				沈線2条と沈線3条の間に連続爪形文／ユビオサエ・ナデ	褐灰色10YR5/1／橙色5YR6/6		I - 3・4	摩耗激しい
48	弥生土器・壺				上下2組の沈線1条の間に山形文・ナデ／ナデ	黄褐色10YR7/3／黒褐色10YR3/1	石英・黒色砂粒・金雲母	I - 1	
49	弥生土器				沈線1条～・ナデ／オサエ?・ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/4／にぶい黄褐色10YR6/3	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I - 1 (新) ~ 4	
50	弥生土器・壺				沈線3条・木葉文・ナデ／ユビオサエ・ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/3／橙色7.5YR6/6	石英・長石・黒色砂粒	I - 1 (新)・2	
51	弥生土器				沈線2条～・ハケメ・ナデ／ハケメ・ナデ	明赤褐色5YR5/6／明赤褐色5YR5/6	石英・長石・黒色砂粒・金雲母	I - 1 (新) ~ 4	
52	弥生土器				沈線1条～・ハケメ・ナデ／ナデ	明赤褐色5YR5/6／褐灰色5YR4/1	石英・黒色砂粒・金雲母		
53	弥生土器・底部		(8.4)		ナデ／不明	明赤褐色5YR5/6／橙色5YR6/6	石英・長石・黒色砂粒・金雲母		摩耗激しい

表 3-2 石器類観察表

No.	種類・器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	石材・材質	備考
59	敲石	14.2	3.1	1.3	94.1	珪質片岩	
60	磨石	3.95	4.25	3.0	63.3	硬質砂岩	赤色顔料付着
61	用途不明石器	2.3	4.2	0.9	11.2	頁岩	
62	剥片	2.0	1.5	0.6	1.6	チャート	
63	剥片	2.3	1.7	0.75	2.7	チャート	
64	剥片	2.2	1.3	0.95	3.8	チャート	
65	剥片	2.9	1.7	0.7	2.8	チャート	
66	剥片	3.8	2.2	1.6	11.5	チャート	
67	敲石	14.2	5.2	3.2	317.8	硬質砂岩	
68	剥片	6.2	2.5	1.9	25.0	石英	
69	粗製剥片石器	8.3	5.8	1.3	84.6	緑色片岩	
70	棒形石器	10.7	2.0	1.4	36.5	頁岩	
71	剥片	5.0	2.5	1.0	7.2	サヌカイト	
72	剥片	6.7	3.9	1.2	33.3	チャート	
73	剥片	2.7	1.4	0.9	3.9	チャート	

第4章 総括

本書で取り上げた各調査地点の成果をまとめると、以下の通りである。

第14次調査（医療資源教育研究センター地点）の成果 本調査地点では、弥生時代前期中葉に属する可能性がある溝状落ち込み1基、くぼみ1基、弥生時代の掘立柱建物跡1軒、古墳時代の溝2条、土坑1基、古代の溝3条、土坑1基、中世～近世の鋤痕、近世の溝2条、暗渠4条、鋤痕、近代の柱穴群が確認された。弥生時代前期中葉に属する可能性がある溝状落ち込みは、周辺の調査地点での成果からみて、東部に位置する水田に給水するための用水路の可能性がある。弥生時代の掘立柱建物跡の詳細な時期とプランは明らかではない。南側からは短冊形の鉄器片が出土した。古墳時代前期前葉～中葉に属するSD04は北東－南西方向に走る。古代の溝SD01・SD02・SD03の主軸方位は、本遺跡でこれまで確認されてきた条里地割にともなう東西溝の方位と一致する。したがって、条里地割と関係する小区画溝とみなしうる。中世～近世の鋤痕は、畑作にともなう耕作痕跡と考えられる。近世の溝SD06・SD07は、主軸方位からみて、条里地割にともなう南北溝とみなしうる。二つの溝のあいだの部分は道であった可能性がある。暗渠1～4は、幕末以降に田畑の水はけをよくするために設置されたものと考えられ、多数検出された鋤痕もこうした耕作活動にともなうものとみられる。近代の柱穴群は旧陸軍練兵場時代に関係するものであろうか。遺物は、古墳時代前期前葉～中葉の土師器をはじめ、I－3・4様式に該当する弥生土器、古墳時代～中世の土師器、古代の須恵器、土製品・金属製品・石器などが出土した。

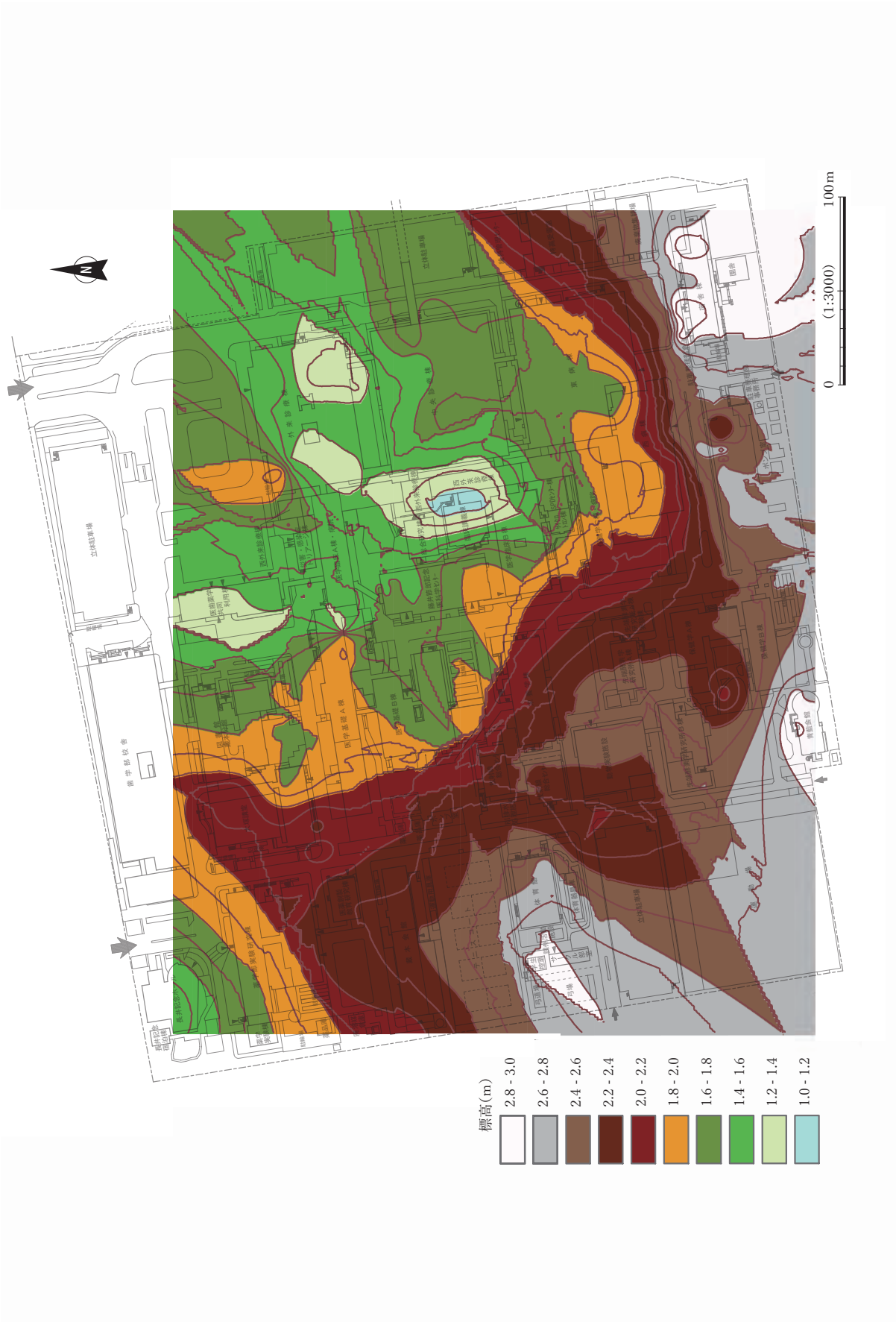
2016年度立会調査（基幹環境整備地点・駐車整理部地点）の成果 基幹環境整備地点・駐車整理部地点双方の壁面で、基本土層V層（弥生時代前期中葉～末の洪水起源砂層）、VI層（縄文時代晩期末～弥生時代前期前葉の土壌化層）が確認された。駐車整理部地点では、多数の弥生土器、石器類が収集された。弥生土器はI様式の幅に収まる。周辺の調査地点では、この時期の居住域に関する遺構が確認されており、本調査地点で得られた遺物もやはりそれを裏づける証拠といえる。

以上の成果をふまえ、本遺跡の基本土層にもとづいて作成した微地形図（端野 2025）と各時代・時期の主要遺構図とを重ね合わせたものが図4-1～4-13である。弥生時代前期前葉～中葉は微地形図C、弥生時代前期末～古墳時代前期初頭は微地形図B、古墳時代中期以降は微地形図Aを用いた。さらに、各時期の微地形をより明確にイメージするための助けとして、ArcGIS（ESRI社製）により、各微地形図を3次元化したものが図4-14である。

最後に、これまでの調査成果を整理すると、表4-1のとおりである。

文献

端野晋平，2025．発掘調査データによる微地形の復元．端野晋平（編），庄・蔵本遺跡5－第34・35次調査地点－，徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島，pp.159-174．



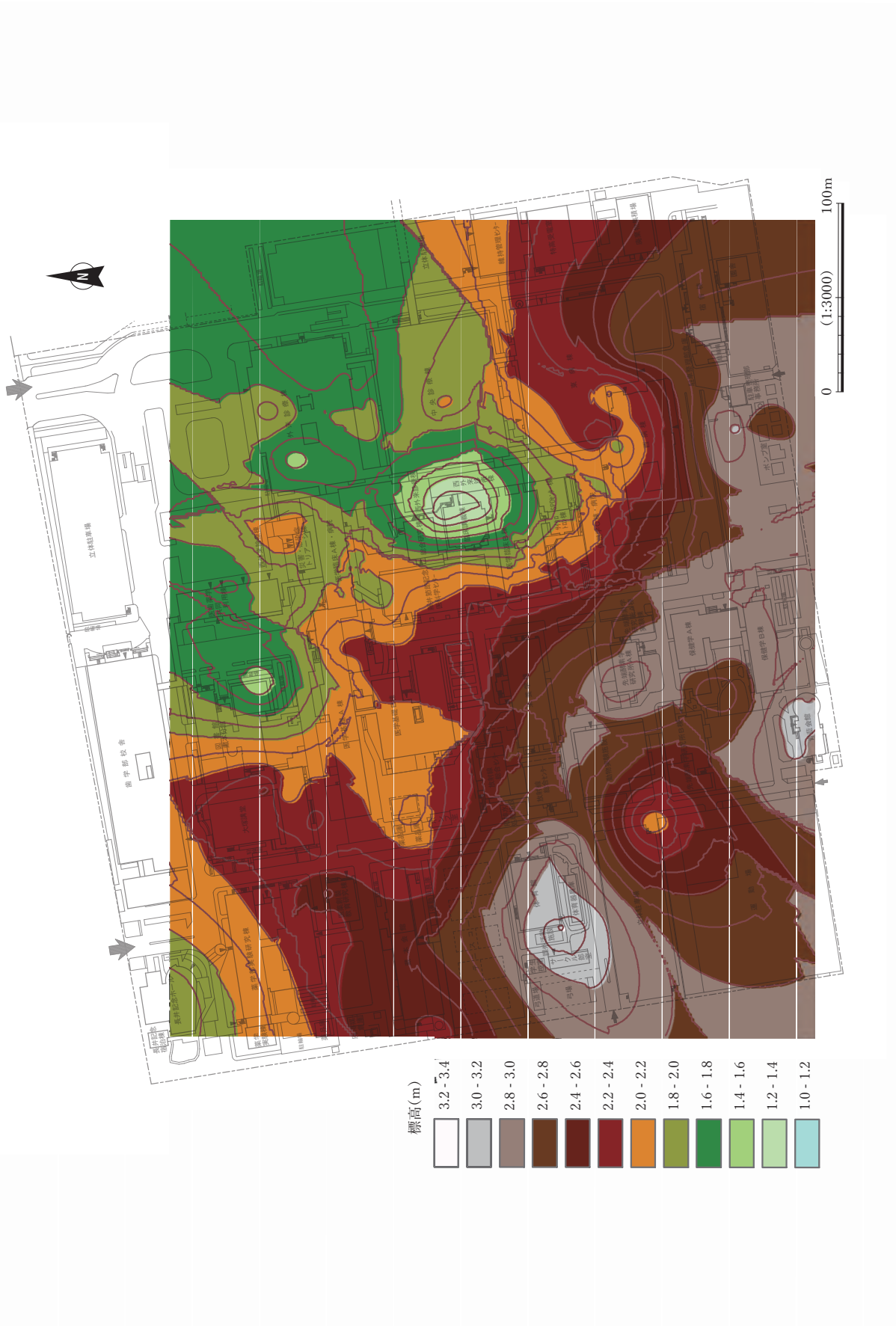


図 4-2 微地形図 B (黄褐色シルト層上面)

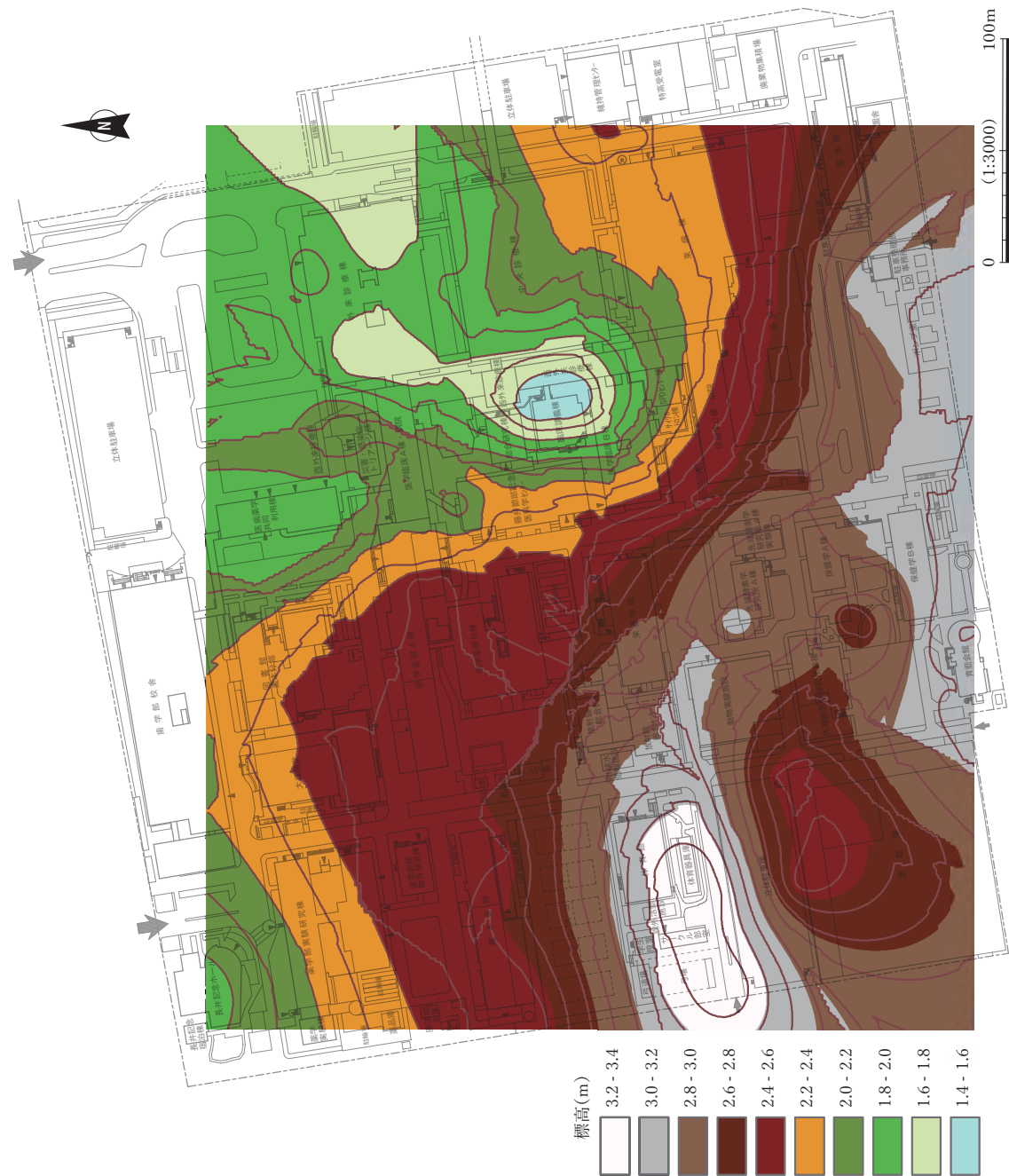


図 4-3 微地形図 A (黒褐色シルト層上面)

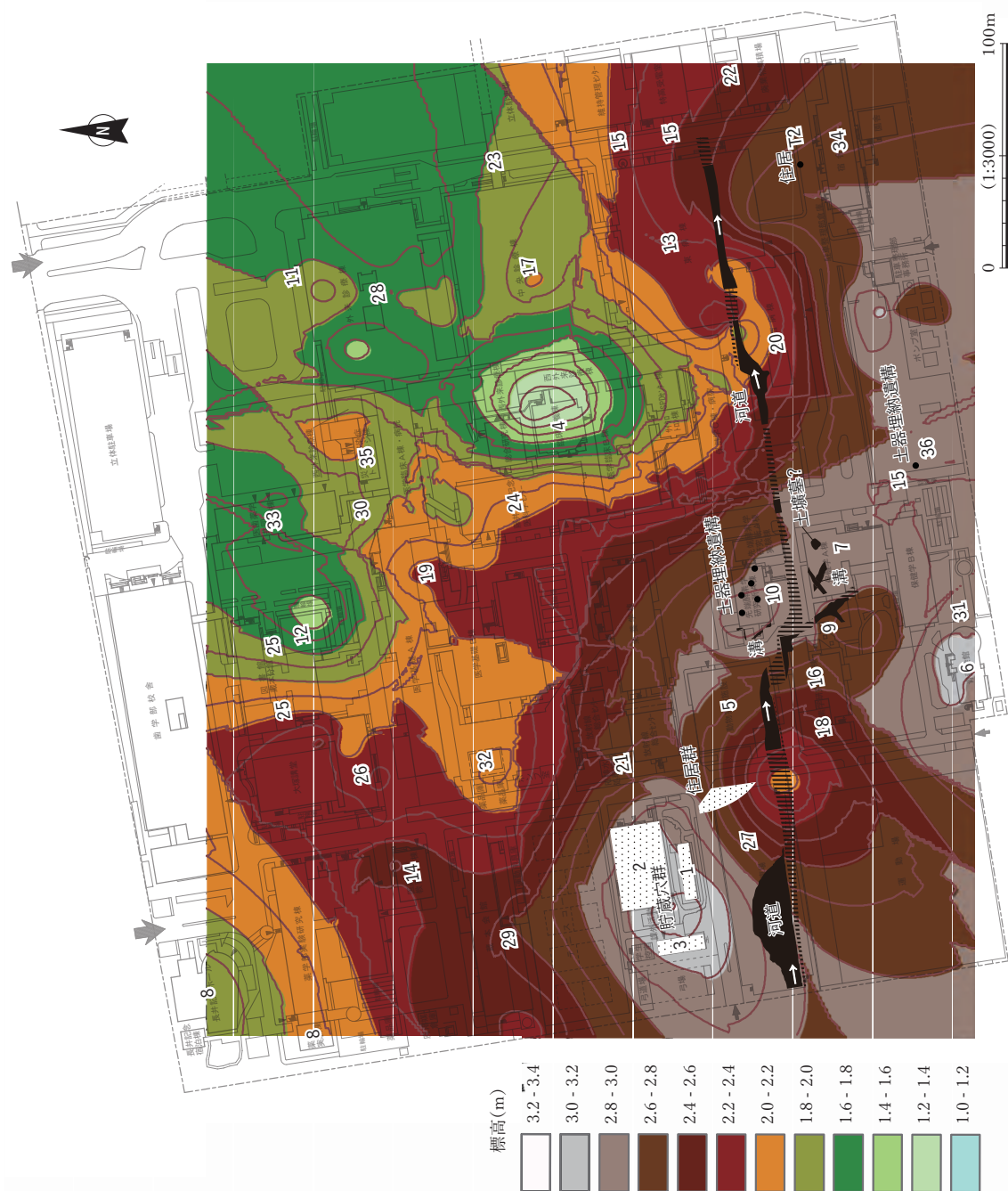


図4-5 弥生時代前期末～中期初頭の微地形と主要遺構

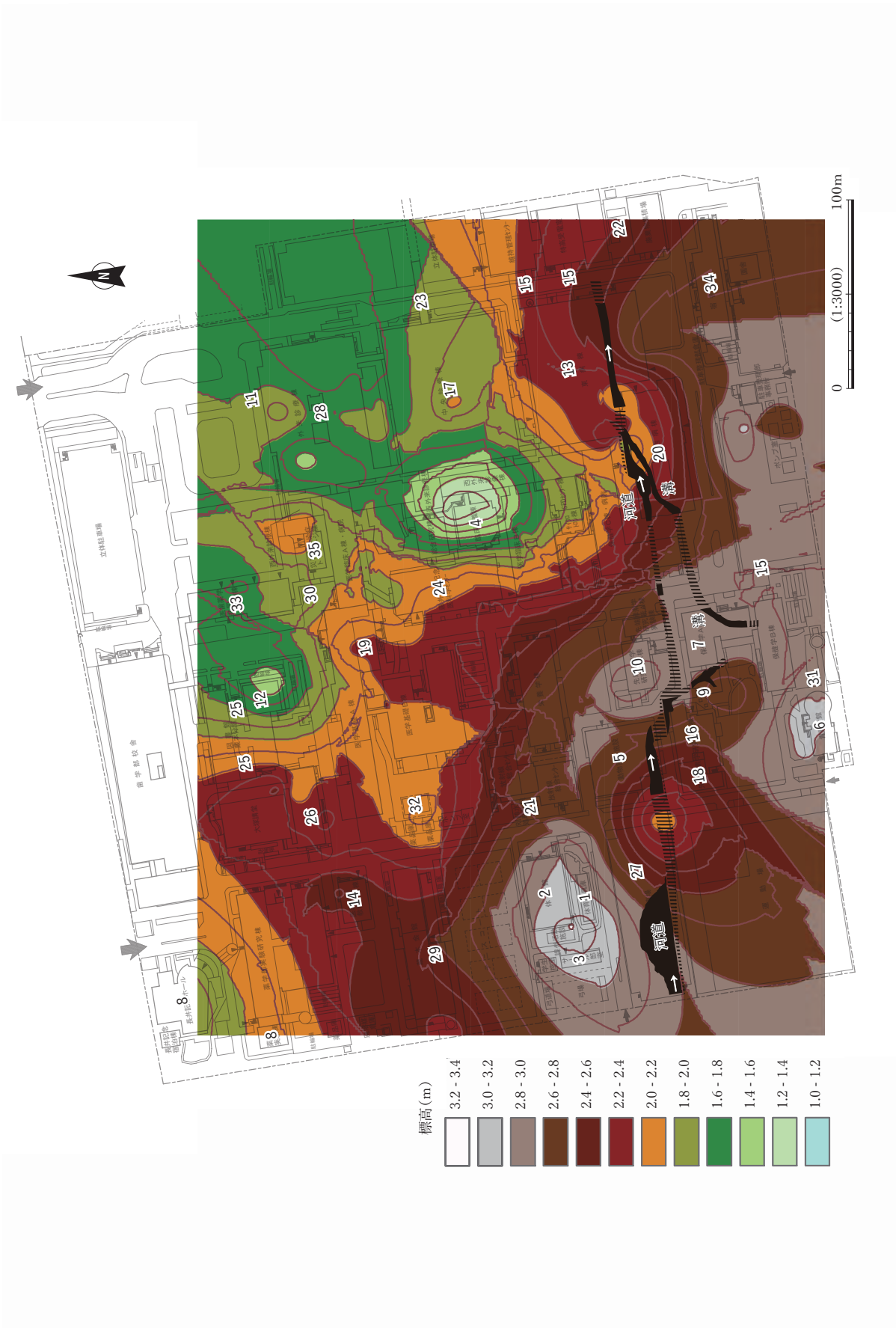
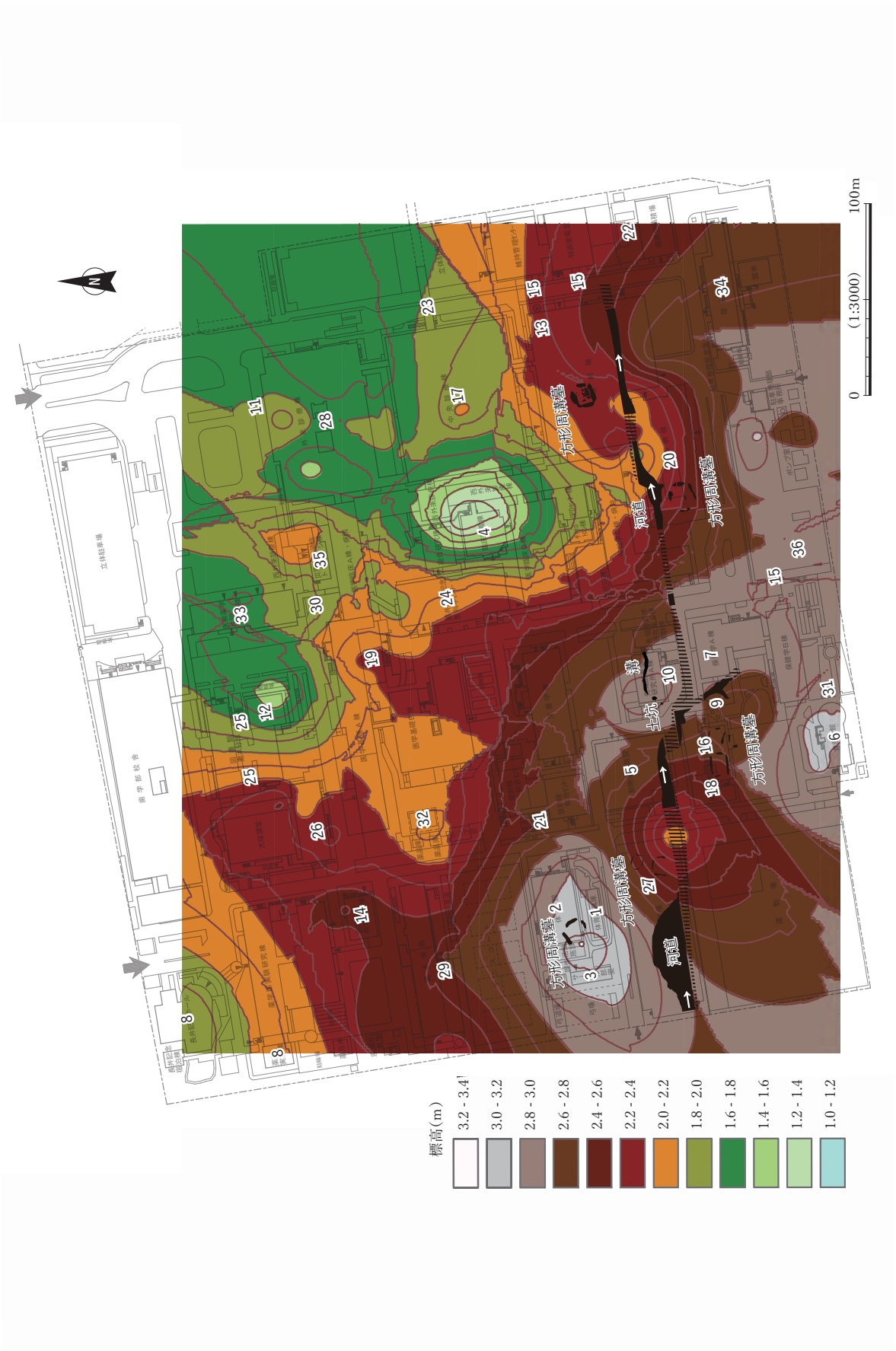


図 4-6 弥生時代中期初頭～中葉の微地形と主要遺構



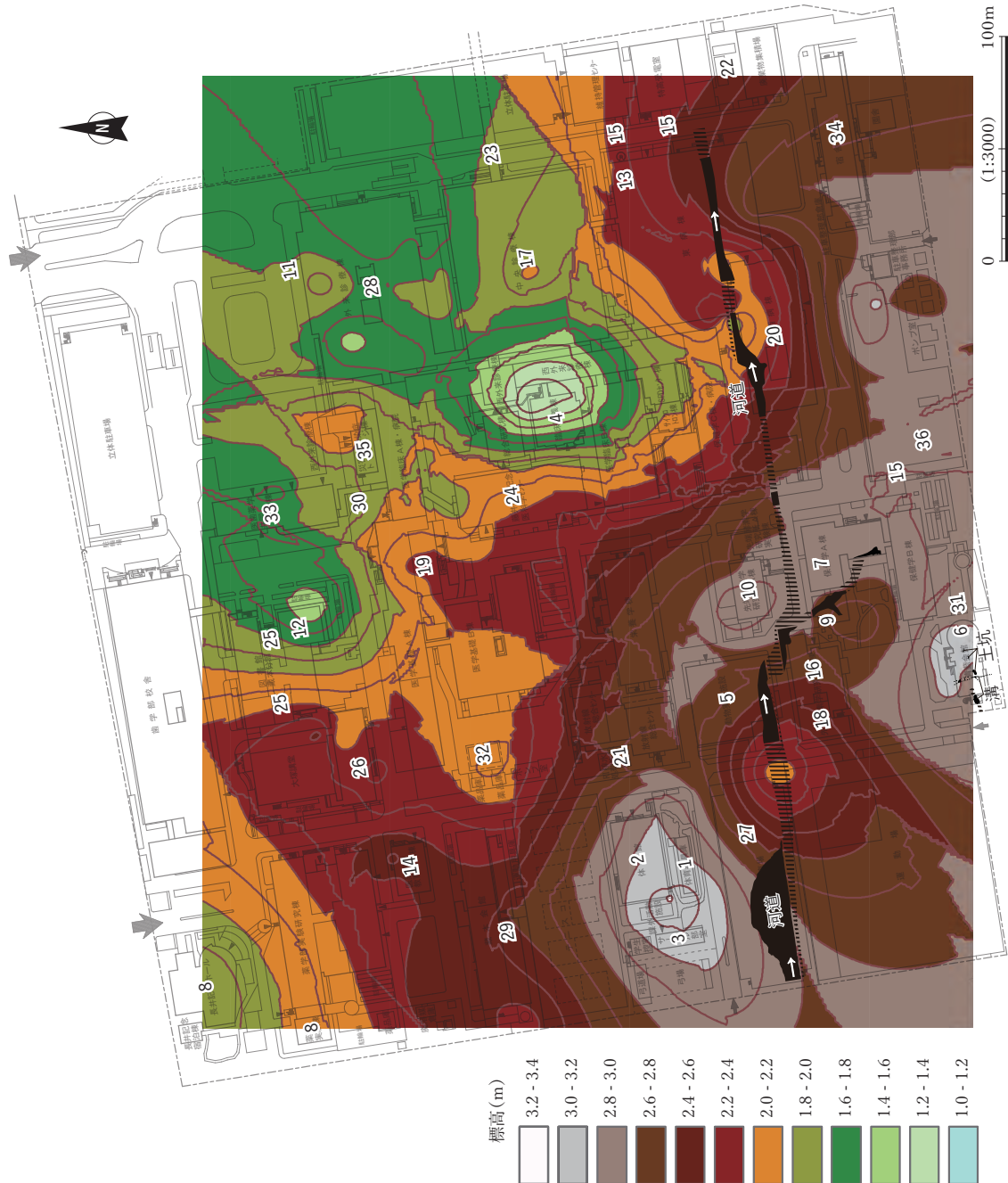


図 4-8 弥生時代中期末～後期中葉の微地形と主要遺構

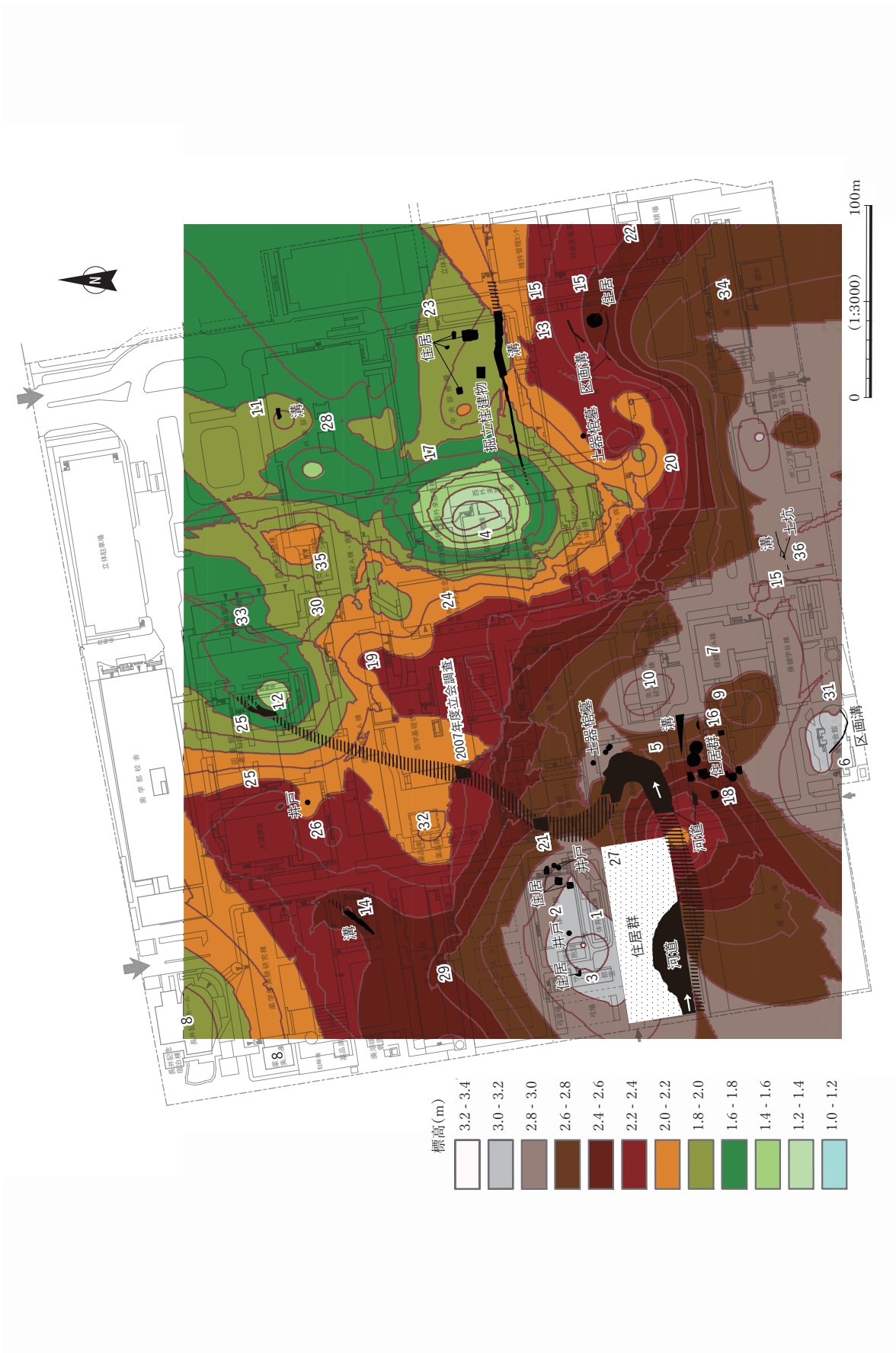


図 4-9 弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉の微地形と主要遺構

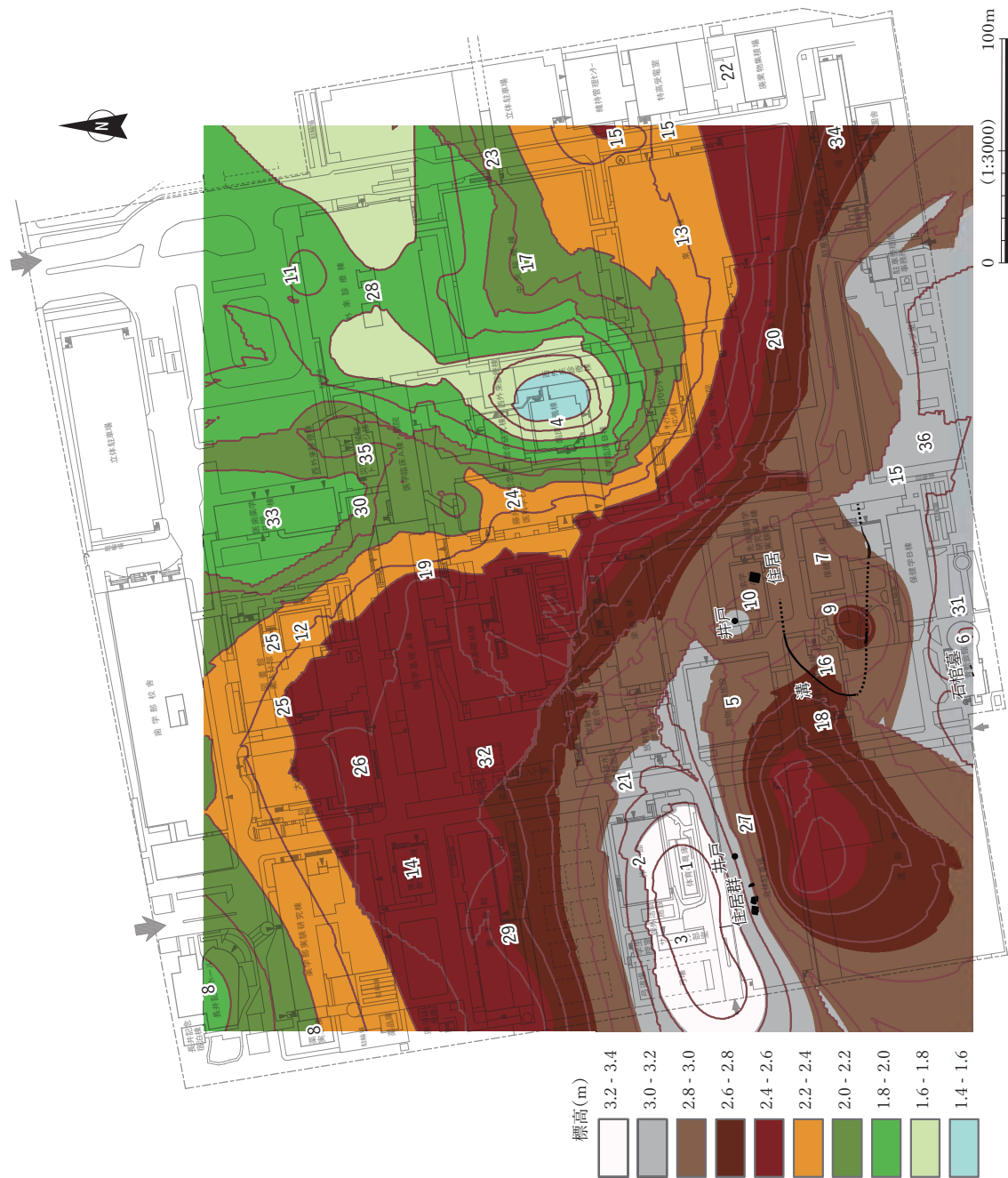


図 4-10 古墳時代中～後期の微地形と主要遺構

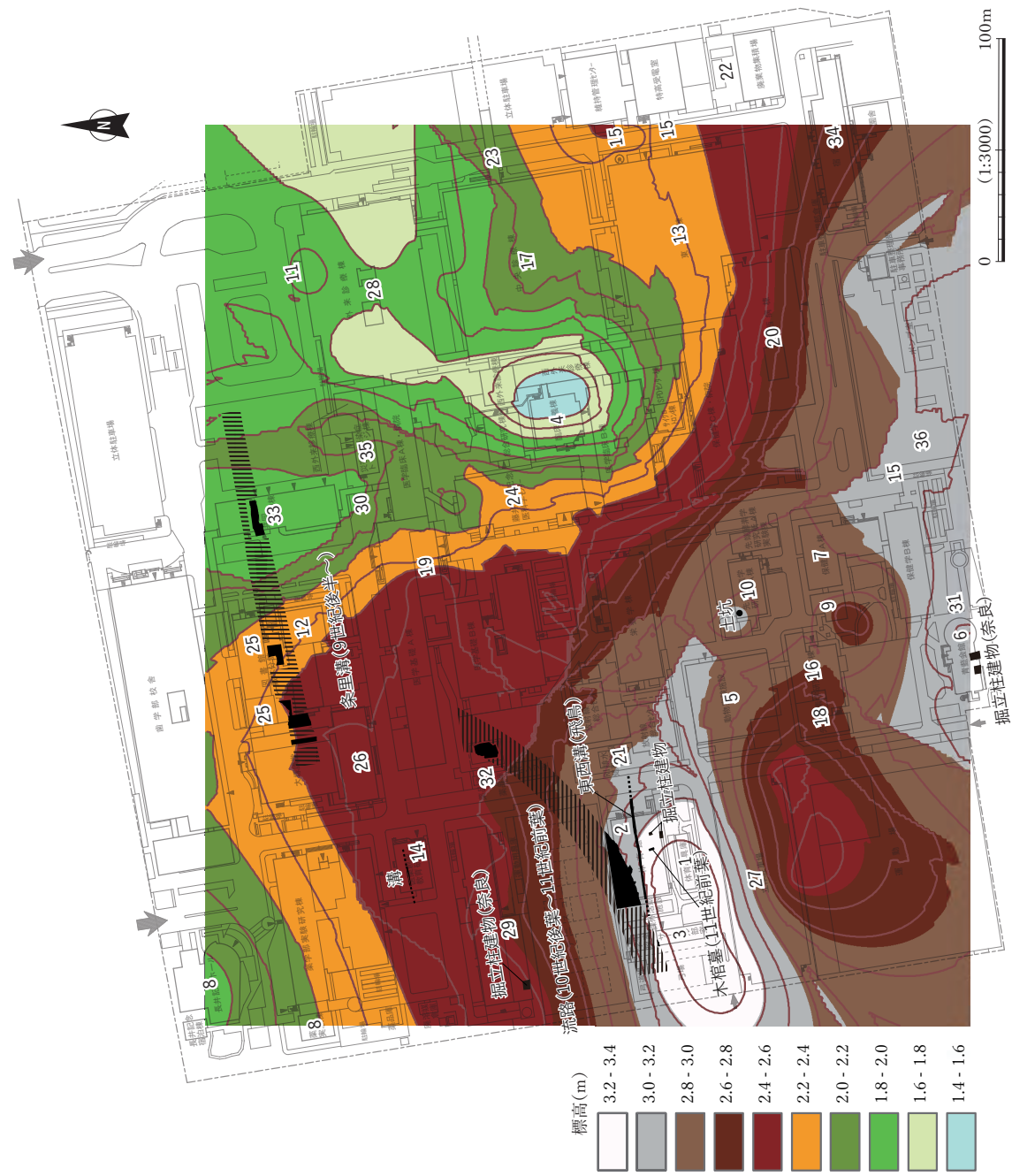


図 4-11 古代の微地形と主要遺構

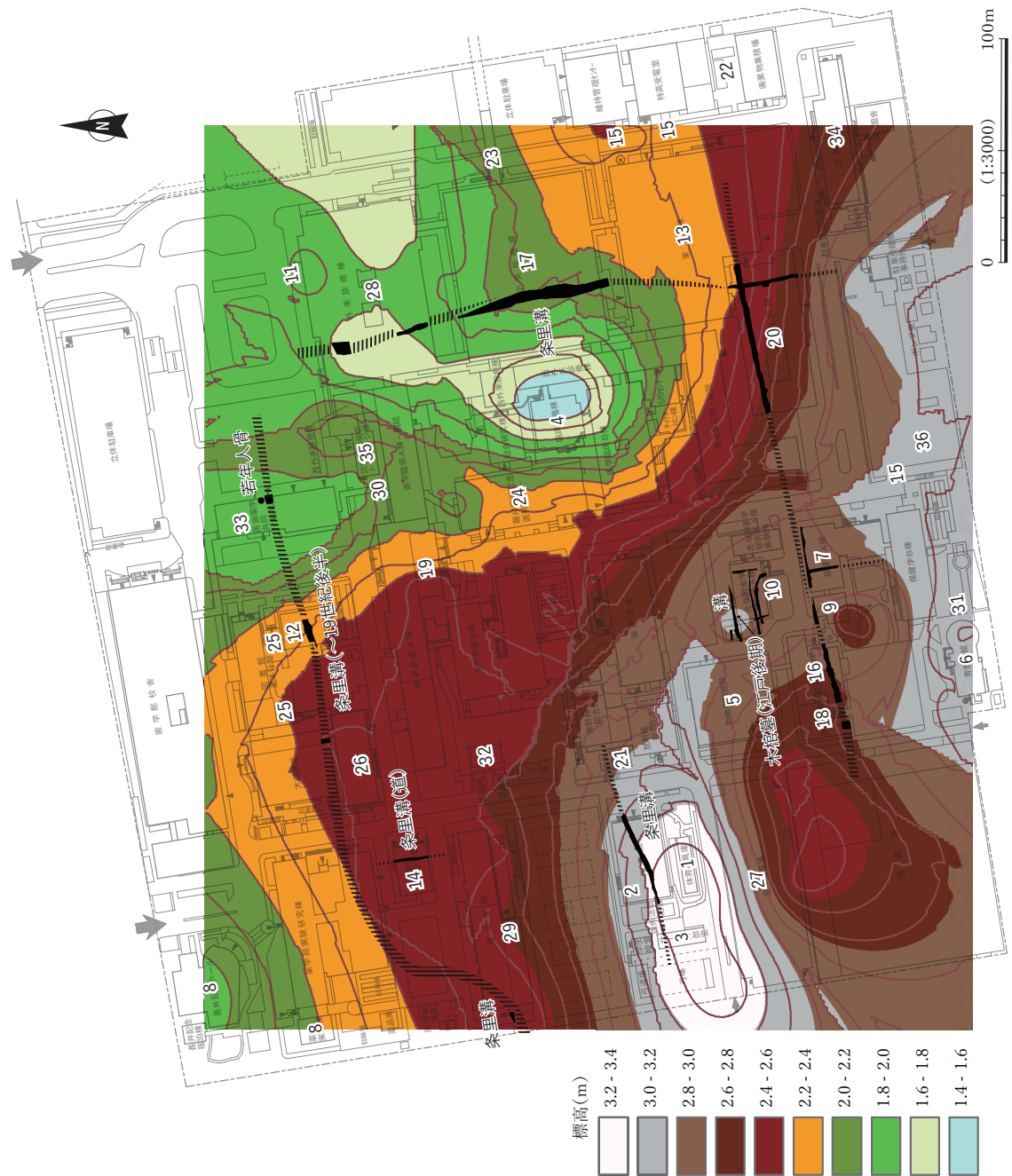
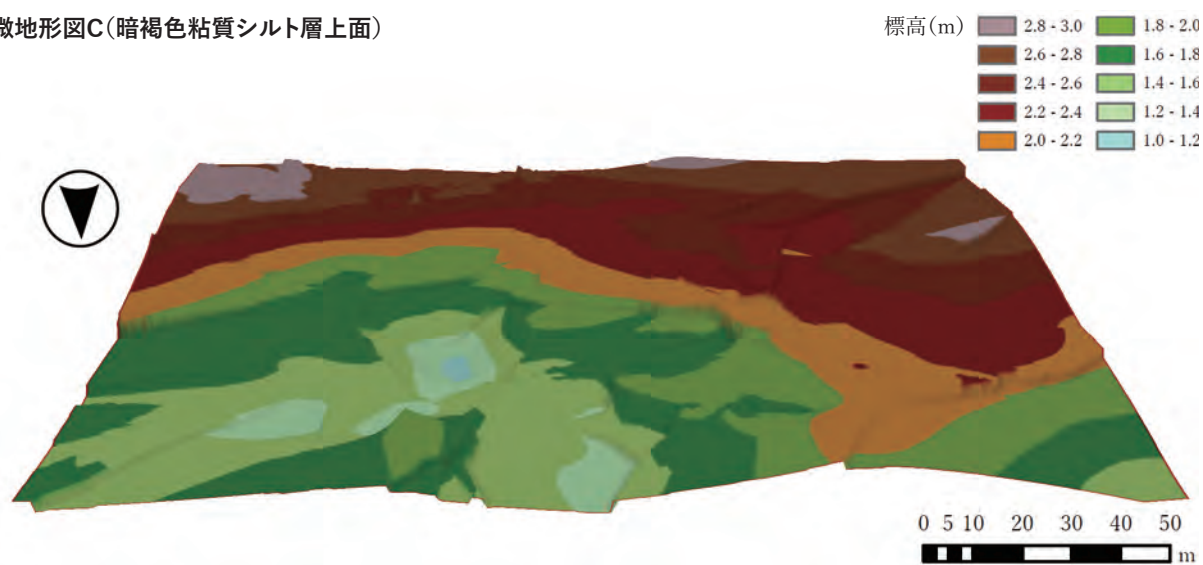
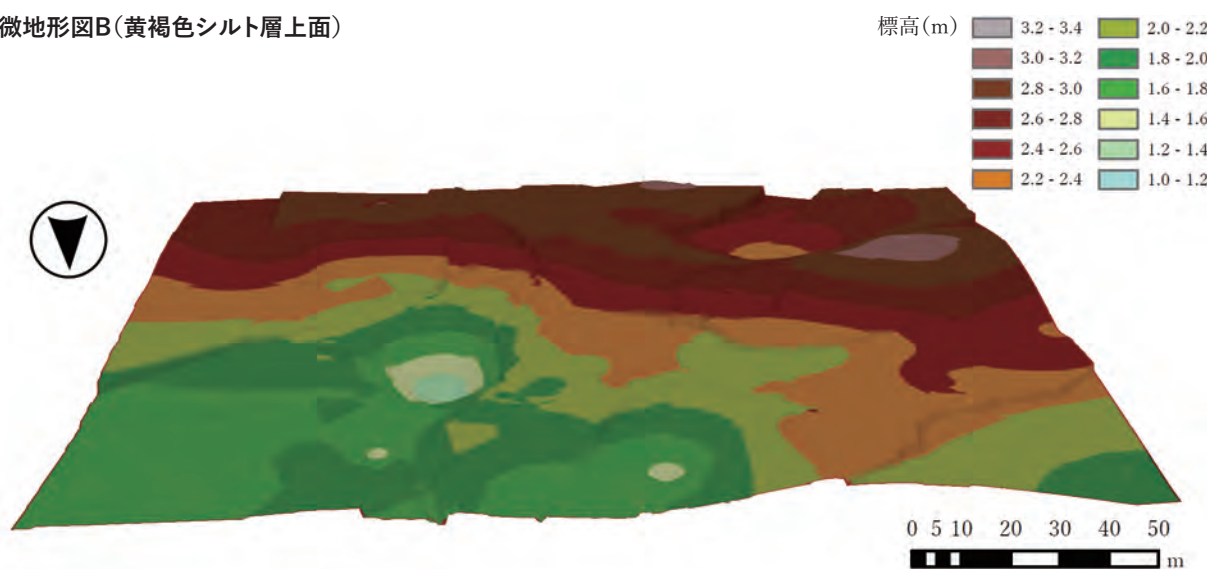


図 4-13 近世の微地形と主要遺構

微地形図C(暗褐色粘質シルト層上面)



微地形図B(黄褐色シルト層上面)



微地形図A(黒褐色シルト層上面)

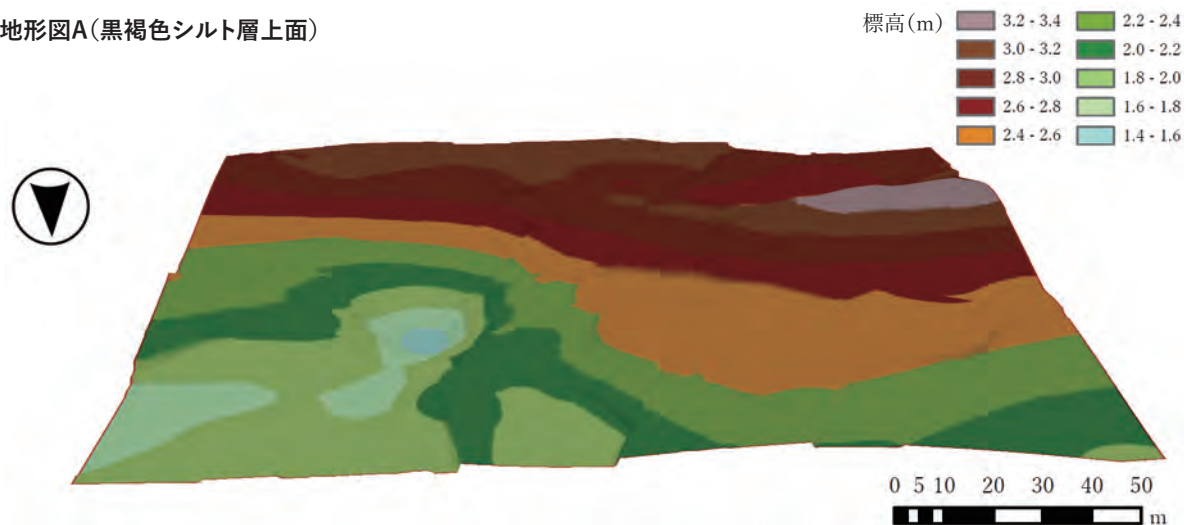


図 4-14 3次元化された各微地形図 (高さ 30 倍)

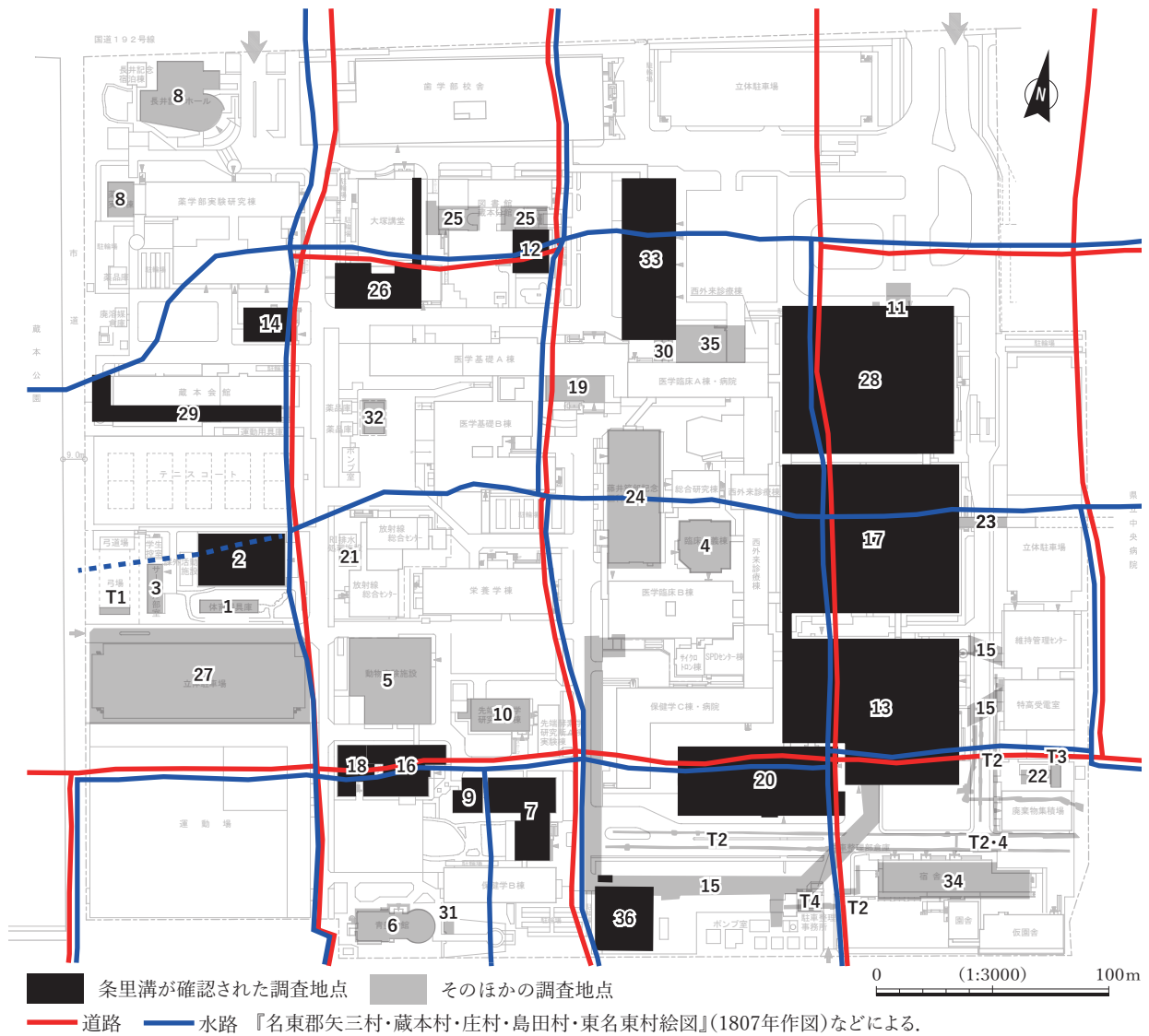


図 4-15 庄・蔵本遺跡における近世の道路と水路

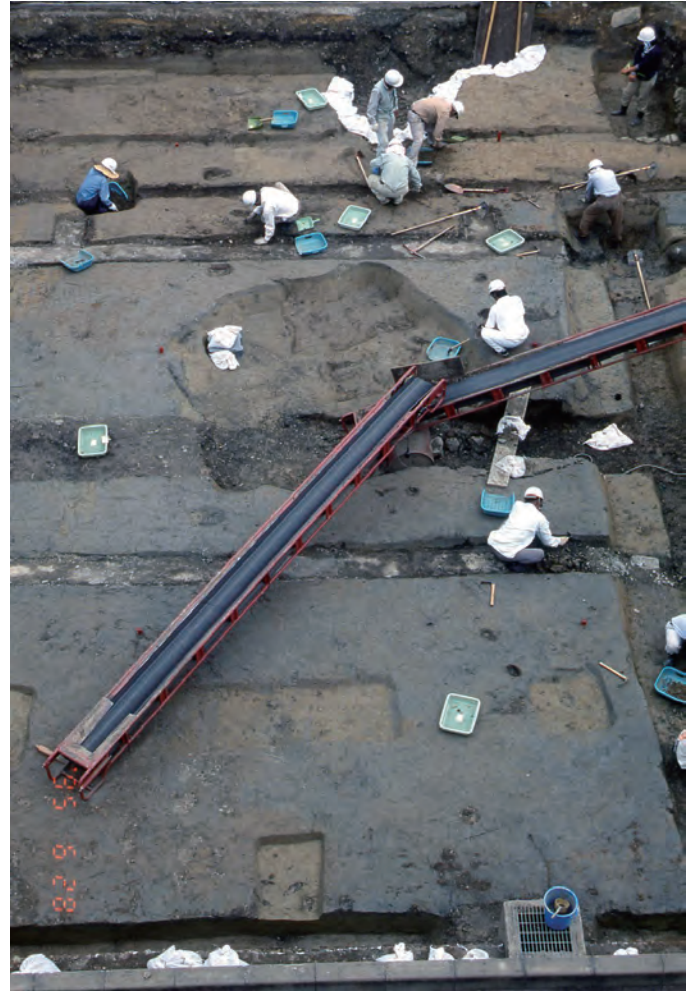
表 4-1 庄・蔵本遺跡主要遺構・遺物一覧

調査 次数	調査地点	時代区分						
		縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	近代
1	体育館器具庫新営		前期末～中期初頭：土器溜まり				溝	
2	体育館新営	晩期中葉：縄文土器	前期末～中期初頭：土坑・土器溜まり、 中期後葉：方形周溝墓、終末期：住居／ 前期末～中期初頭：炭化種実（イネ・ア ワ）・赤色顔料付着柱状片刃石斧・松菊 里型系土器、後期後葉～終末期：斜縁鏡 片	前期：井戸	飛鳥：東西正 方位溝、平 安：流路 （10C後葉～ 11C前葉）・ 木棺墓（11C 前葉）、古 代：掘立柱建 物／平安：墨 書土器・製塩 土器・木製祭 祀具・銅製鈎 帶	条里溝（～ 13C前半）・ 条里溝（13C 後半～）・掘 立柱建物	条里溝・石敷 暗渠・井戸	溝・石敷暗 渠・井戸
3	課外活動共用施設新 営		前期末～中期初頭：不明遺構、後期： 溝、終末期：住居		平安：流路	条里溝（～ 13C前半）	溝	溝
4	医学部臨床講義棟新 営							暗渠・土坑・ ビット
5	動物実験施設新営		前期中葉：井堰、前期中葉～中期末：河 道、後期後葉：土器棺墓、後期後葉～終 末期：河道／前期末～中期初頭：円形粘 土帯系土器、後期後葉～終末期：石杵・ 赤色顔料付着木製品（杵・盾など）					
6	青藍会館（同窓会 館）新営		前期前葉～中葉：石棺墓・配石墓・土壙 墓・土器棺墓・土坑、中期末～後期中 葉：溝・土坑、終末期：集落内区画溝／ 前期前葉～中葉：松菊里型系土器	中期？：石棺 墓	奈良：掘立柱 建物	土壙墓		
7	医療技術短期大学校 舎新営		前期末～中期初頭：溝・土坑（墓？）・ 井戸？、中期初頭～中葉：溝、後期前葉 ～中葉：河道、終末期：住居／前期末～ 中期初頭：松菊里型系土器	中期後葉：溝 ／中期後葉： 須恵器・勾玉 形石製品			条里溝	
8	長井記念ホール・薬 学部実験研究棟新営						水田	
9	医療技術短期大学校 舎増築		前期中葉：井堰・土坑、前期中葉～中 期末：河道、終末期：住居／前期中葉：木 製腰掛け・石製刺突武器・浮線網状文系 土器・円形粘土帯系土器	中期：溝・井 戸／中期：須 恵器・朝顔形 埴輪		溝	条里溝	
10	酵素科学研究セン ター新営		前期中葉：用水路、前期末：溝・土器埋 納遺構、中期後半：溝・土坑	中期：住居・ 井戸	土坑		木棺墓・溝	
11	MRI・CT装置棟新営		前期末：洪水砂層	前期前葉：溝				暗渠
12	附属図書館蔵本分館 増築		後期：自然流路		条里溝（9C 後半～）	条里溝（13C ～）	条里溝（～ 19C後半）・ 溝	
13	東病棟新営（病棟Ⅰ 期）		前期：河道・用水路・井堰・住居・株 痕・土坑、中期後半：方形周溝墓、後期 ～終末期：住居・溝・土器棺墓	中期：溝	水田・用水 路・道路・井 戸	水田・用水 路・道路・井 戸	条里溝	
14	医薬資源教育研究セ ンター新営		前期中葉？：溝状落ち込み・くぼみ、弥 生時代：掘立柱建物	前期前葉～中 葉：溝・土坑	溝・土坑	鋤痕	条里溝 （道）・暗 渠・鋤痕	柱穴群
15	共同溝設置		前期前葉～中葉：二重大溝・河道・用水 路・土坑					
16	ゲノム機能研究セン ター新営		前期中葉：河道・井堰、中期前半：溝・ 集石・土坑、中期～後期：方形周溝墓、 後期～終末期：住居・溝／終末期（庄内 式後半）：竈の羽口	中期：溝・井 戸、後期：掘 立柱建物	奈良：掘立柱 建物、古代： 溝	溝	条里溝・大型 水路・耕作痕	
17	中央診療棟新営		前期中葉：水田、後期～終末期：溝・住 居・掘立柱建物／後期後葉～終末期：異 体字銘帯文鏡片			条里溝	条里溝	

調査 次数	調査地点	時代区分						
		縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	近代
18	ゲノム機能研究センター増築		後期後葉～終末期：河道、終末期（庄内式後半）：住居（鍛冶遺構）／終末期（庄内式後半）：轆の羽口・鉄器・スラグ・石鎚・鉄床石（砥石）				条里溝	
19	医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修		前期中葉：水田・用水路、前期：河道、中期末～後期：方形周溝墓、中期前半：集石・土坑、終末期：土坑		掘立柱建物・溝		溝	
20	西病棟新営		前期中葉：用水路・河道・畑・土坑、中期初頭～中葉：溝、中期後葉：方形周溝墓・溝・土坑・柱穴／前期中葉：炭化種実（イネ・アワ・キビ）	中期：溝			条里溝・井戸	
21	医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修（RI棟排水処理設備）		後期後葉～終末期：開析流路			溝	溝	
22	西病棟新営その他電気設備		前期初頭：土壇墓	中期：溝			溝	
23	連絡橋建設							溝
24	藤井節郎記念医科学センター新営		前期中葉：水田			条里溝		
25	附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期				条里溝（9C後半～）	条里溝（～12C前半）		
26	大塚講堂改修		前期中葉：用水路	前期（布留0～1式期）：井戸	条里溝	条里溝（～12C前半）	条里溝	
27	立体駐車場新営		前期中葉：畝状遺構・用水路、前期中葉～終末期：河道、前期末・中期初頭：住居・土坑、中期中葉～後葉：方形周溝墓、後期後葉～終末期：住居（一〇土坑）・井戸・土器棺墓／前期末～中期初頭：炭化朽塊、後期後葉～終末期：突線鈕式銅鐸片・石杵	中期～後期：住居・井戸／住居・井戸／中期～後期：玉類・石製紡錘車	住居・井戸・耕作痕（畑）／平安：石帯			
28	外来診療棟新営		前期中葉：水田／前期中葉：炭化鱗茎				条里溝	「厚仁会」硬質陶器
29	学生支援センター改修		前期中葉：用水路／前期末～中期初頭：円形粘土帯系土器		奈良：掘立柱建物		条里溝	
30	渡り廊下建設		前期中葉：溝状遺構				土坑	
31	解剖体慰霊碑区域							陸軍歩兵第43連隊下士官集合所跡
32	給水設備新営				平安：流路			
33	病院福利厚生施設新営		前期中葉：用水路		条里溝（9C後半～）	条里溝（～12C前半）	条里溝、若年人骨	
34	寄宿舎棟新営	晩期中葉：縄文土器	前期前葉～中葉：二重大溝・土坑・土器溜まり、前期中葉～中期初頭：土坑・土器溜まり、中期中葉：溝、中期後葉：土器溜まり、終末期：土器溜まり／前期中葉～中期初頭：円形粘土帯系土器、層灰岩製扁平片刃石斧					
35	多用途型トリアージスペース新営		前期中葉：水田					
36	エネルギーセンター新営		前期末：土器埋納遺構、終末期：溝・土坑				条里溝	
T1	弓道場の場（1982年度立会調査）		前期・中期初頭・後期：弥生土器	後期中葉：須恵器			陶器	
T2	排水管・東側溝・南側溝（1998年度立会調査）		前期前葉～中葉：土壇墓・二重大溝、前期末～中期初頭：住居／前期中葉：浮線網状文系土器・円形粘土帯系土器					
T3	ボイラータンク（1998年度立会調査）	晩期中葉？：縄文土器	前期前葉～中葉：石棺墓、前期末：土壇墓					
T4	基幹環境整備・駐車整理部（2016年度立会調査）		前期初頭～中期初頭：弥生土器、弥生時代：石器					



a. 調査区付近全景（北東から）



b. 作業風景（北から）



c. 調査区北壁 A-A' 土層断面（南から）

図版2 第14次調査地点遺跡・遺構(2)



a. 調査区南壁 C-C' 土層断面 (北から)



b. 調査区西壁 D-D' 土層断面 (東から)



a. 12層上面遺構完掘状況(南から)



b. 溝状落ち込み完掘状況(南西から)

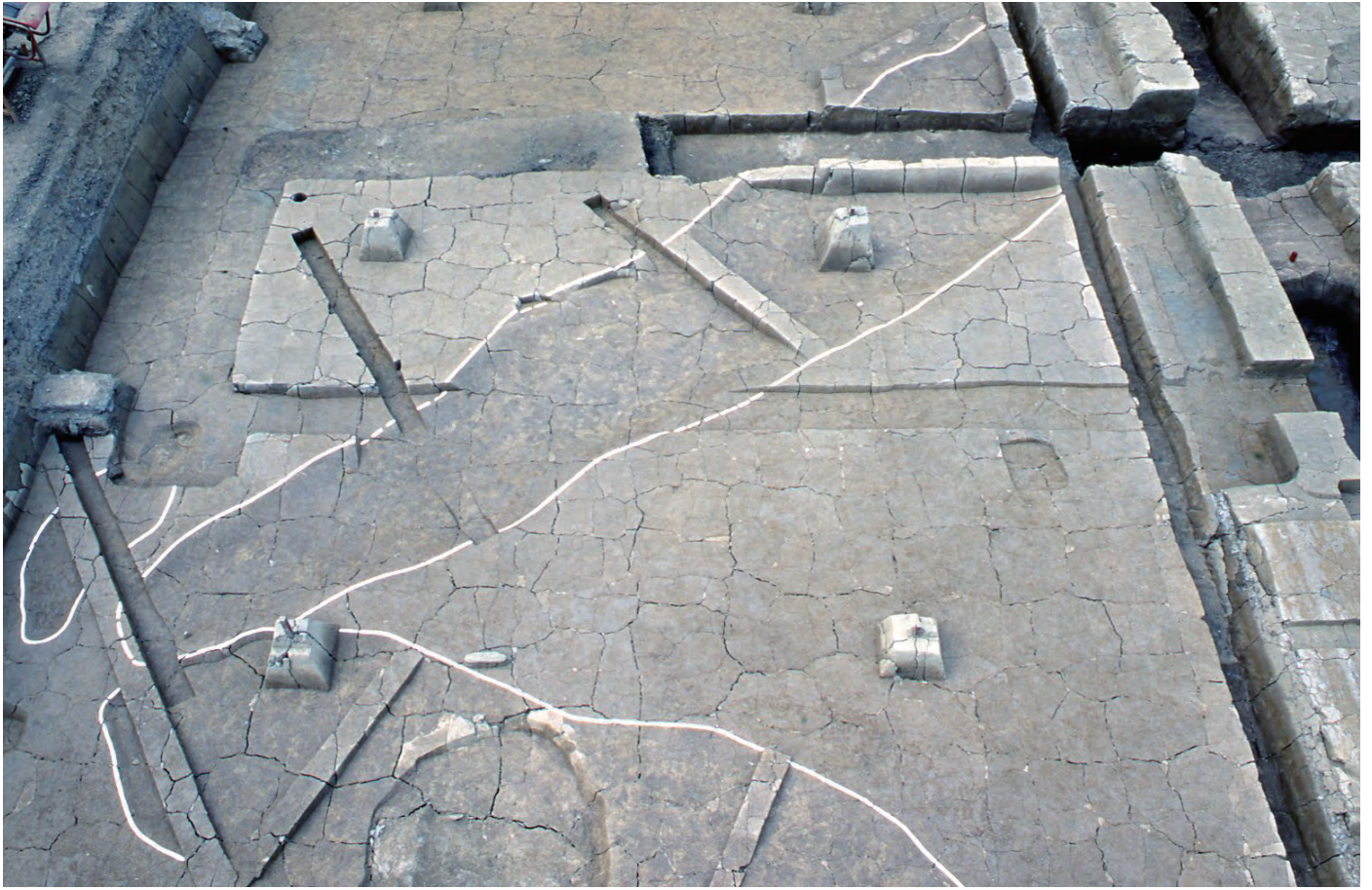
図版4 第14次調査地点遺跡・遺構(4)



a. 掘立柱建物跡完掘状況（南から）



d. 鉄器出土状況（南から）



a. 9層上面遺構完掘状況(南から)



b. SK02・SD04・SD05 完掘状況(南西から)

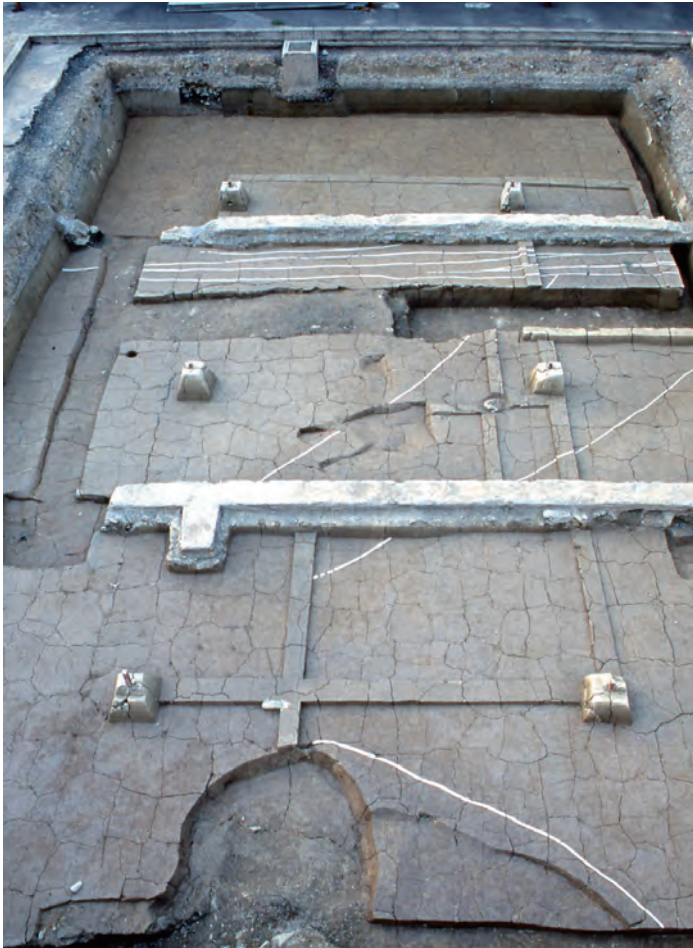
図版6 第14次調査地点遺跡・遺構(6)



a. SK02・SD04・SD05 断面(北東から)



b. 土師器・甕出土状況(南西から)



a. 7層上面遺構検出状況(南から)



b. SD01・SD02・SD03完掘状況(東から)



c. SK01完掘状況(北から)

図版8 第14次調査地点遺跡・遺構(8)



a. 5層上面鋤痕検出状況(南から)



b. 3層上面鋤痕検出状況(北から)



c. SD06・SD07 検出状況(南から)



d. SD06 断面(南から)



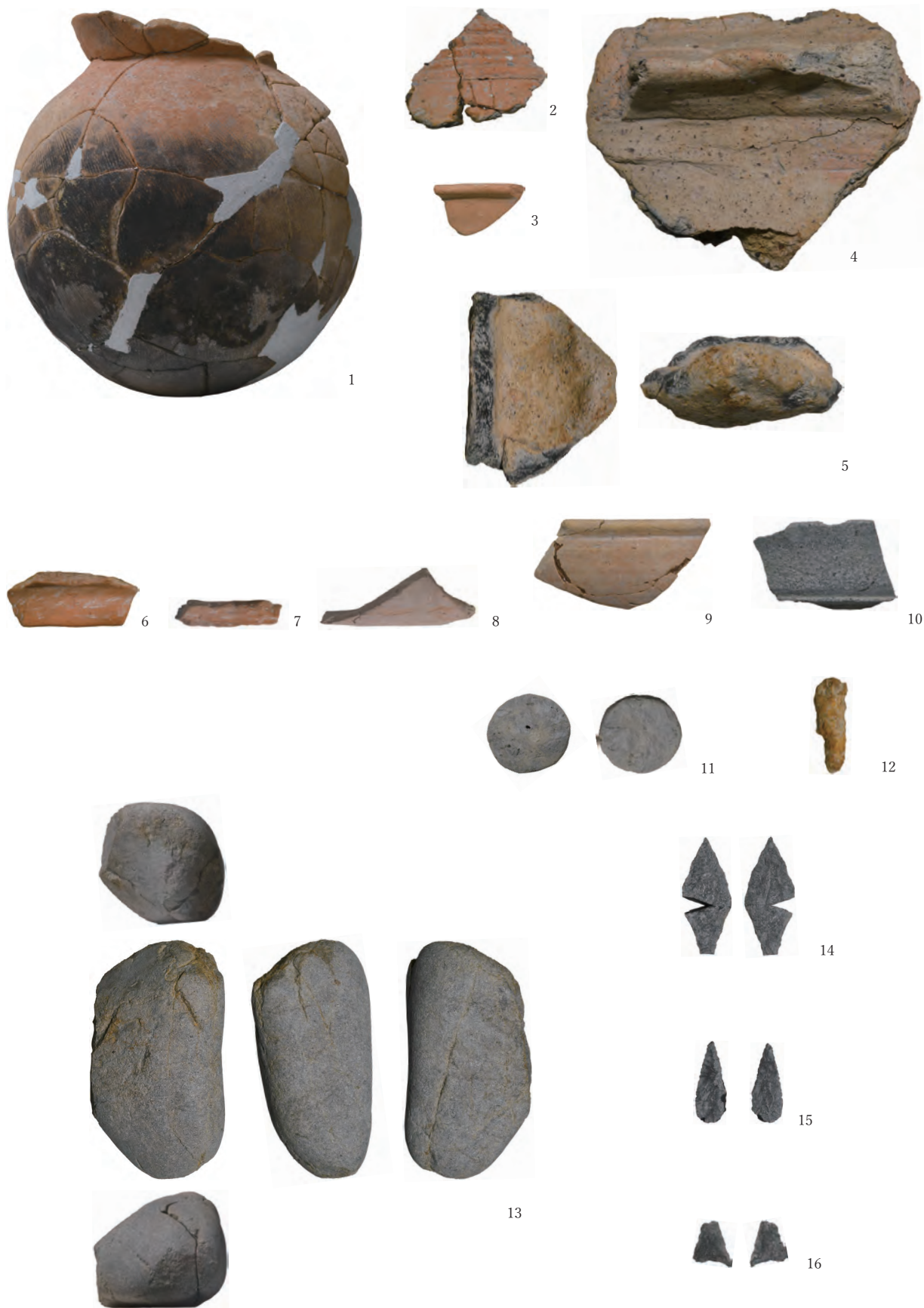
a. 暗渠 1 b-b' 断面 (北から)



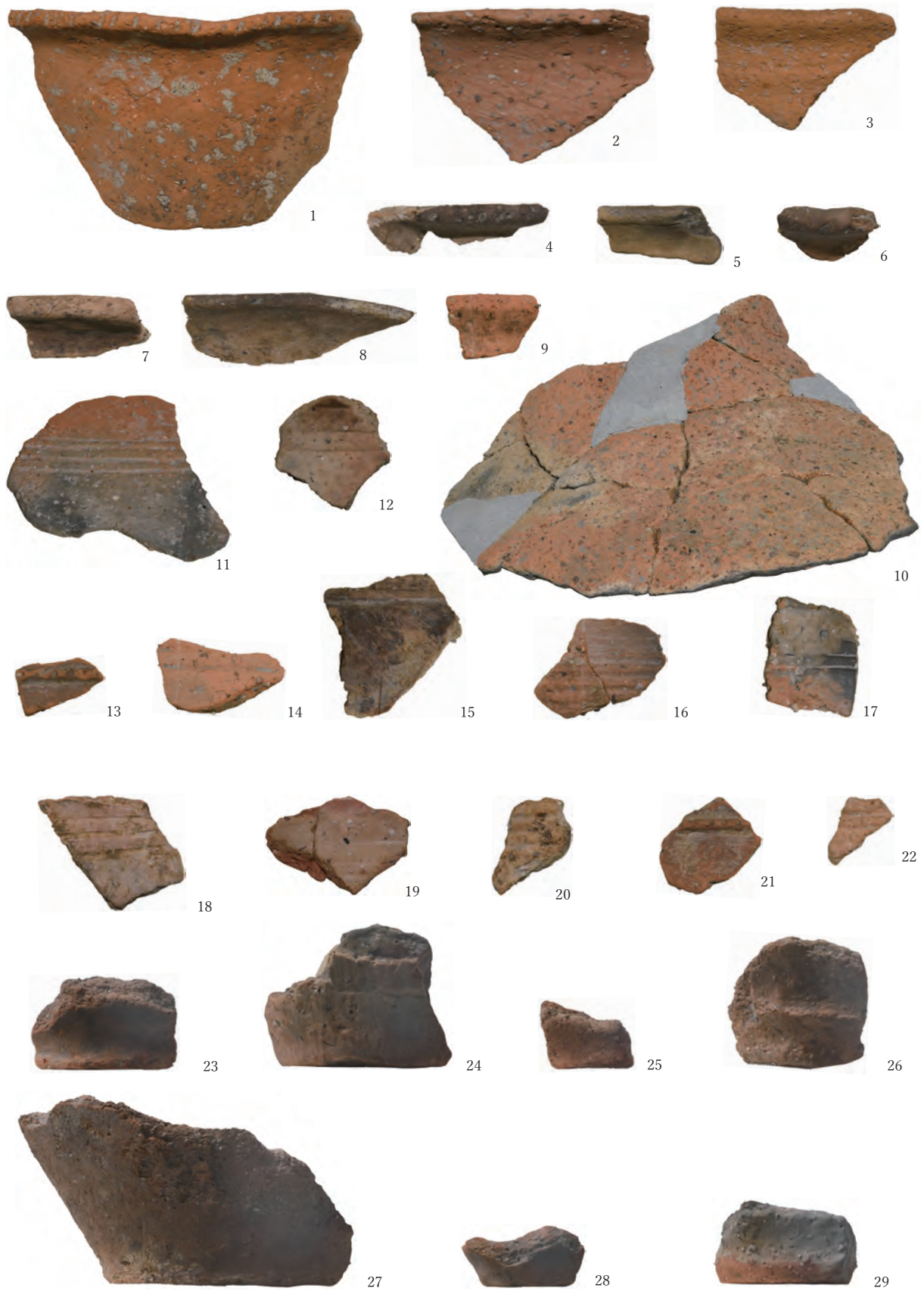
b. 暗渠 1 完掘状況 (北から)



c. 柱穴群 (北から)



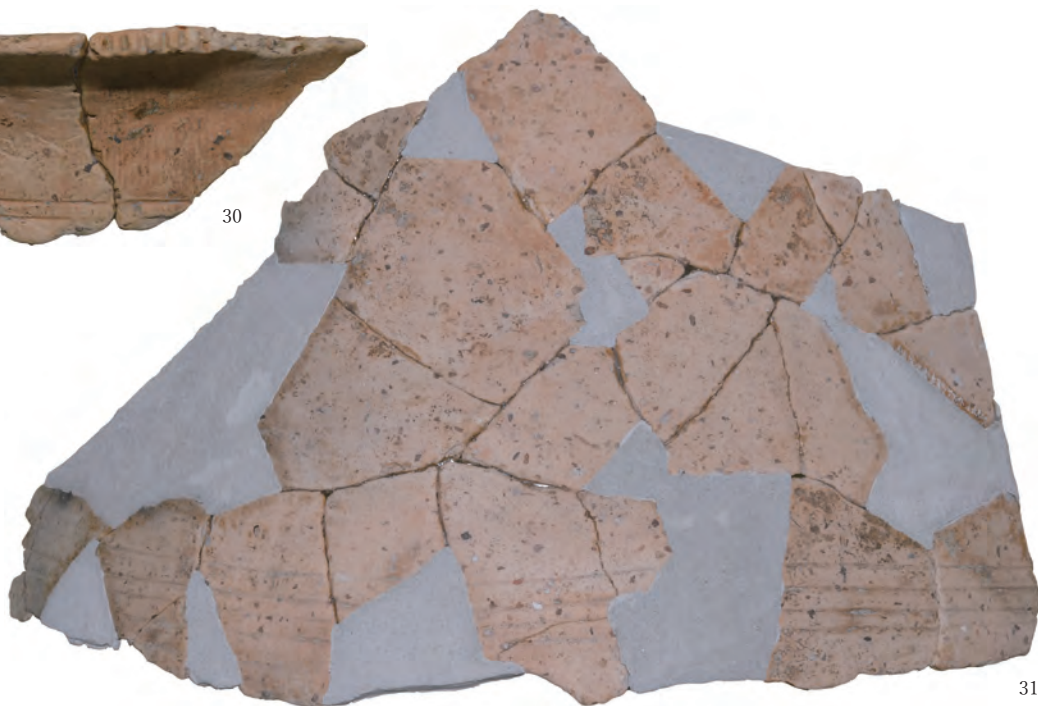
0 (1 : 3) 10cm 0 (1 : 2) 10cm
1~10・13 11・12・14~16



0 (1 : 2) 10cm



30



31



32



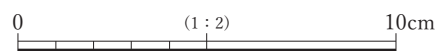
35

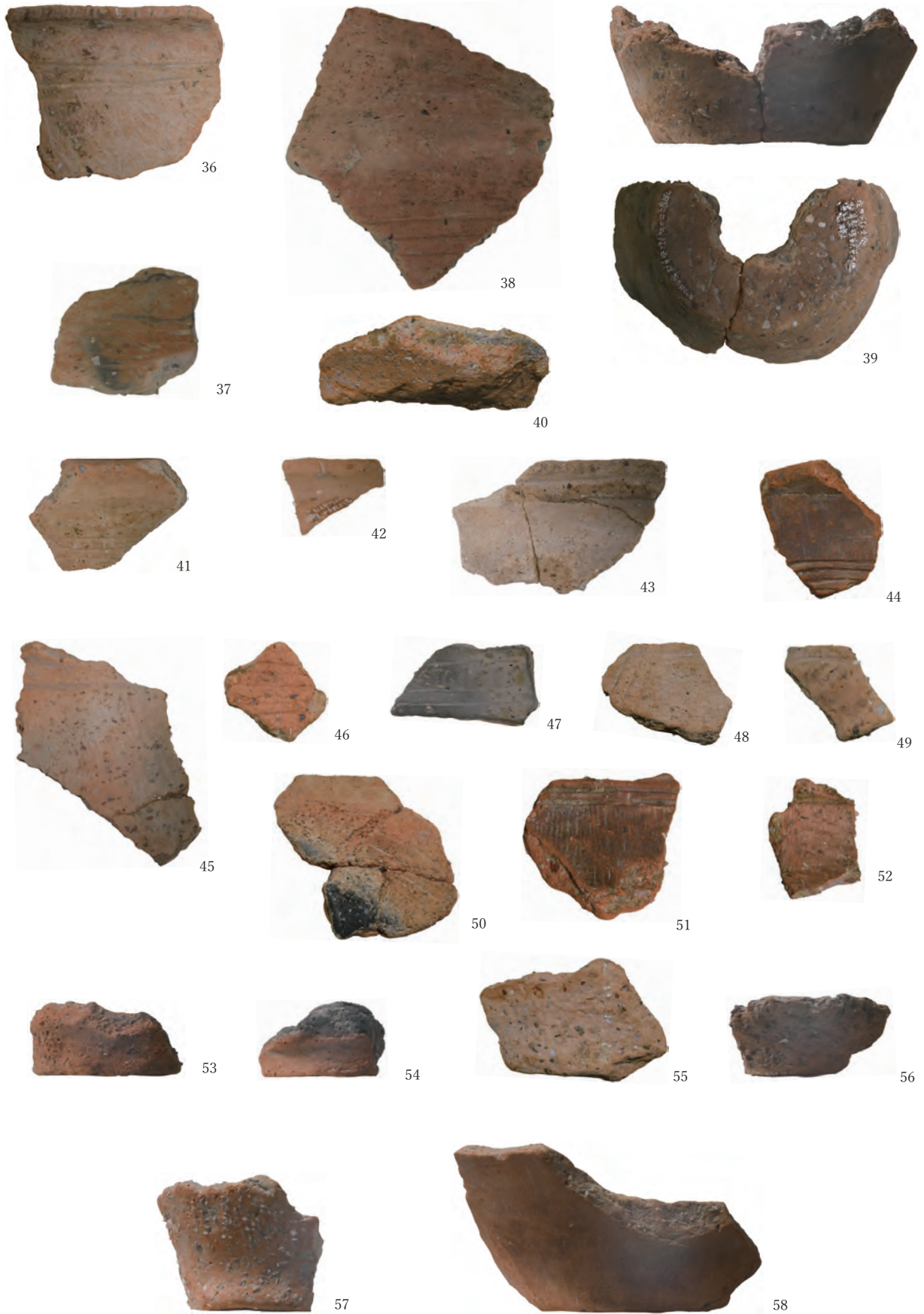


33



34





0 (1 : 2) 10cm

図版 14 2016 年度立会調査地点遺物 (4)



0 (1 : 2) 10cm

報告書抄録

ふりがな	しょう くらもと いせき なな							
書名	庄・蔵本遺跡7							
副書名	第14次調査地点・2016年度立会調査地点							
巻次								
シリーズ名	徳島大学埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第11巻							
編著者名	端野晋平							
編集機関	徳島大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒770-8506 徳島市南常三島町2丁目1番地 TEL 088(656)9405							
発行年月日	2026年9月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょう くらもと 庄・蔵本遺跡第 14次調査地点	とくしまし 徳島市 しょうまち 庄町1 丁目	36201	177	34° 4' 32"	134° 30' 57"	19950621 ～ 19950905	300 m ²	医薬資源教育研究センター建設
しょう くらもと 庄・蔵本遺跡 2016年度立会調査地点	とくしまし 徳島市 くらもとちょう 蔵本町 2丁目	36201	171	34° 4' 26"	134° 31' 9"	20160603 ～ 20160917	220 m ²	基幹環境整備・駐車整理部事務所建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
しょう くらもと 庄・蔵本遺跡第 14次調査地点	集落	弥生時代～近代		掘立柱建物跡、溝、土坑、鋤痕、暗渠、柱穴群		土器、土製品、金属製品、石器		古墳時代前期の溝。
しょう くらもと 庄・蔵本遺跡 2016年度立会調査地点	集落	弥生時代				土器、石器		

2026 年 9 月 30 日発行

徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第 11 卷

庄・蔵本遺跡 7

－第 14 次調査地点・2016 年度立会調査地点－

編集・発行 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

徳島市南常三島町 2 丁目 1 番地 (088)656-9405

<https://tokudaimaibun.jp/>

印 刷 協業組合徳島印刷センター

徳島市問屋町 165 番地 (088)625-0135

ISBN 978-4-908223-08-2

